

新しい家庭科

We

自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す



逐次刊行物

昭 61.12.19 和

国立婦人教育会館
情報図書室

'86年 We夏季フォーラムの全記録

1986 冬 増刊号



☆ はじめのうね ☆

曰「ごろ別々な生活をしながら『We』の心に寄せて考えていることを、じかに確かめたり充実させたりできるフォーラムを、楽しみに、大切に思っていました。今夏テーマは「自分らしさをこそパートⅢ」、「他者との豊かなかかわりをひらく」が焦点です。実行委員会で三月からこちら、相談を重ねてこうなりました。いうまでもなくこれは、パートⅠの「解き放て、作られた役割意識」、パートⅡの「私がわたしであるために「自己表現」」の続きです。

他者との豊かなかかわりによつて私らしさを実現する方法は数多くあるのでしょうが、この三日間の出会いを限つて共に考えをすすめるために、私たちは二つの柱を仮に用意しました。『怪傑・ハウス・ハズバンド』の村瀬春樹さんをお迎えする部分と、『『若いいのちの像』の児玉澄子さんをお迎えする部分です。具体的・直接的な人とのかかわりを、男と女の水平・パートナ・シップという根つこで考え、そうしたかかわりの各々をもうひとつ深く見、確かに生ききる上で、流れととらえる人間関係という視点のご案内をいただきます。二つの軸を目安にたつぷり語り合います。

他にもう一点、フォーラム自体の継続課題に「大人も子ども一人の人間として互角の参加者である」という取り組みがあります。男の子育てを考える会、小金井市のわんぱく村、地元富士吉田市の高校生他、若い有志の力を得て意欲的な企画、問いかけが用意されました。今年のテーマと重ねて、すべての参加者と共に受けとめたく、お願いいたします。

（'86 We 夏季フォーラム実行委員長 若竹キミ子）





8/9 (土)	
1:00	受付
2:00	開 会
	〈オリエンテーション〉
	みんなうちとけあって(★)
2:30	〈全体会〉
	「誰でもできるやさしい革命 一確立しよう! 男女のパー トナーシップ」
	8mmフィルム「あたりまえ の国の不思議」つき 村瀬春樹さんと共に
	★子どもたちは なかよくなろう、なかまづくり
5:30	
6:00	夕 食
7:30	〈テーマ別の交流〉
	1. 大人と子どもの部屋(★)
	2. 女や男、生活を語る部屋
	3. 家庭科を語る部屋
	4. (いくつでも作れます。
	5. お申し出下さい。)
	リフレッシュタイム
9:00	★子どもたちの寝る部屋 (希望する子あつまれ)
	大人は話し合いナイト

86年 夏季フォーラム プログラム

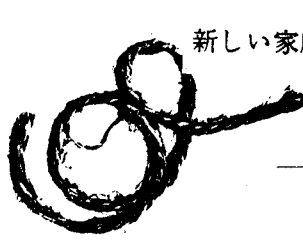
☆会場 21富士研修センター
ヌー

8/10 (日)	
9:00	早朝ミニハイク(希望者)
	富士山が美しく見える所へ
9:00	受付
9:30	〈全体会〉
	「流れ」ととらえる 人間関係
	児玉すみ子さん と共に
	★子どもたちは おひるのし(じのじゅんび)
12:00	野外で作る昼食を 楽しく(★)
	食事のあとで 各地の読者会から
2:00	〈分科会〉
	1. 野外コース(★)
	子どもも大人もわんぱくだ いろんなもの作ろう
	2. 家族を超えた新しいネットワーク作り
	3. がき大将無用論
	4. 家庭科の今日と明日を紡ぐ
	5. 教師はふつうの人間にもどれるか —生徒と教師の関係—
	6. (いくつでも作れます。
	7. お申し出下さい。)
5:30	
6:00	夕 食
7:30	〈この指とまれ式交流会〉
	1. (語りたいことのある人、名
	2. 乗りを上げ仲間をつのろう。
	3. お目あての人を囲み話し合
	4. いもどうぞ。)
	★子どもも何かやろうよ
	★子どもたちの寝る部屋

8/11 (月)	
9:00	ちよっとやってみませんか ダンス (希望者)
	〈全体会〉
	「フォーラムを顧みる」
	分科会、交流会
	こんなふうでした
	…来年はぜひ
	こんなことを…
	★子どもたちは なにかはっぴうしようよ
	そのじゅんび
11:30	子どもたちの発表会(★)
12:00	閉 会(★)
午後	実行委員と有志に よる反省会

★は子ども活動

(★)は子ども・大人いっしょの活動



自分らしさをこそ Ⅲ

——他者との豊かなかかわりをひろく——

☆はじめのことば.....	若竹 キミイ
1 フォーラムに参加して.....	4
2 他者との豊かなかかわりをひろく——全体会では—— 誰でもできるやさしい革命——確立しよう男女のパートナーシップ—— 村瀬春樹さんと共に..... 記録 浅井由利子・大場広子	16
“流れ”ととらえる人間関係 児玉澄子さんと共に..... 記録 柴崎和恵・入江一恵	29
3 他者との豊かなかかわりをひろく——交流会では—— 女や男、生活を語る部屋で..... 丹原 恒則 家庭科を語る部屋で..... 磯部幸江・大場広子・加藤千恵子 指紋押捺を考える部屋で..... 蔡 和美・川名はつ子 どんどん変えよう家族と家庭の部屋で..... 吉田 清彦	44 47 51 54
4 他者との豊かなかかわりをひろく——分科会では—— 家族を超えた新しいネットワーク作り..... 中嶋里美・青山和世 がき大将無用論..... 平井雷太・姫野順子 家庭科の今日と明日を紡ぐ..... 磯部幸江・西内みなみ 教師はふつうの人間にもとれるか..... 錦 真理・岩瀬志津子	57 61 64 67



5 他者との豊かなかわりをひらくー子どもたちと共にー

こんなこと願ってました	中野 敬子	70
野外の昼食はおいしかったでしょう	大杉 洋	71
アイデア満点、野外コース	こしらりようこ	74
ウイのフォーラム おもしろかったよ		78

6 こんなかわりもひらいて

早朝ミニハイク	渡辺千津子	80
やってみませんか、からだのかかわり	藤武 礼子	82
ゆっくり楽しく生きようよ	八島 紀子	84
児玉さんと語り合って	森本 邦子	86
森さんと語り合って	村岡 洋子	88

7 フォーラムを願ひる

盛りあがった全体会	桑畑美沙子	90
水平パートナー・シップ、つかめたでしょうか	若竹キミイ	94
子どもと過ごして	村中弘美・金子 博・荒井真木	96
各地の読者会から	姫野 順子	98
フォーラムの余韻の中から		99

○教育課程審議会への要望書 93
○編集後記 104

表紙デザイン・加藤由美子 口絵、本文写真・小林志夫

フォーラムに参加して



少しづつ工夫を重ねて

フォーラムも五回目

大勢の参加者の方の

率直なお声をここに

お尋ねしたのは、下の五項です

ガーン!

1 ①Very Good!

②人間らしさって何だろう。今年のテーマもいいな。

2 ①村瀬さん、児玉さんのお話は、とても考えさせられて、変わってゆける人間のすばらしさ、柔軟な心の大切さを感じた。

②私が話したのは、げんき君（三歳）と、とらぞう君（四か月）とまいちゃん（三歳）。とらぞう君とは、おふろでスキんシップしてしまいました。ほんとに豊かなかかわりを持てたと思います。

③二日目のお昼2hはほんとうにスツキリしました。来年もぜひ。

5 正面にはってあるテーマとか、行事とかの揭示がステキだなと思いました。

今回のフォーラムは、一言で言って「ガーン!」でした。不思議クンの誕生の瞬間でガーン! いきなり記録係でガーン! 三年前のフォーラムで知り合った人が、覚えていてくれて声をかけてくれてガーン! 児玉さんの感受性の豊かさと、人間的な大きさと、自分の教師としての未熟さと、人間としてのバカさにガーン! (コレハサイコーニガーン!) みんなで食べるお昼のおいさと景色の

1 テーマについて

①今年のテーマはいかがでしたか?

②来年以降どんなテーマを望まれますか?

2 プログラムについて

①今年は何が有意義でしたか?

②子どもと大人の関係を豊かにひらく試みを取り入れましたが、いかがでしたか?

③来年以降のプログラムに、どんなことを希望されますか?

3 会場について 4 時期について (スペース

の関係で略、ご希望を今後に生かします)

5 その他なんでもご感想、ご希望をどうぞ

美しさにガーン! 家庭科の部屋では、モヤモヤしたものが少しずつ晴れてきてグワッ! 遠い存在と思っていた森先生に話しかけられてガーン! 話しかけちゃった自分にガーン! 人前で家庭科について自分の考えを言えたことにガーン! この指とまれ交流会で、二大スター(私にとって)と、とことんお話をできたことにガーン! とらぞう君とおふろでスキんシップしてしまったことにガーン! とらぞう君が私の指をすごい勢いで吸ったことにガーン! 実行委員のみなさんのパワーにガーン! 「フォーラムを顧みる」の盛りあがりにガーン!

そして、いなか生活と、いくつか年をとって、頭がかたくなっていて、初心から離れちゃっていることにガーン！ ガーン・ガーンでした。

今年は、あの山形から四人も参加できて、しかも、三人ともすごくパワフルで、いい面をたくさん発見できて、いい人達にかこまれている自分が幸せだなと思いました。昨年よりも、ほんと、心がグーンと広げられた感じがです。私もできるだけ他者の心を広げてあげられる「広子」に今日からなれたらと思います。来年もよろしく！（山形・大場 広子）

Weに集う人は、第二の家族

1、①とてもすばらしいものでした。

②自分らしさを追求していくとき、障害になっているものを顕在化させていくようなテーマ。

2、①児玉さんのお話。ガキ大将無用論の加藤さんのまとめ

②すみません。あまりかかわれず。

③もう少し、一人一人がレポートなどを持ちよることも必要と思う。

5、部屋で一緒であった方とも交流でき、そ

の他、二つの分科会を主催して、とても楽しかった。多くの方々も是非分科会を主催して下さい。Weに集う人は私は第二の家族と思っています。一人一人の方が職場や地域に帰って思う存分活躍して下さいを望みます。

（埼玉・中嶋 里美）

人間の基盤をなすものは

1、①「他者との豊かな関わりをひらく」という部分はよかった。

②私たちは（日本は）豊かなのか。

2、①児玉澄子さんの話がとてもよかった。

人間の基盤をなすものは、理論でないということ、実感しました。

②やはり別々のプログラムとして消化されたように思う。

③私たちにとって政治とは

5、二度目の参加ですが、だんだん気が重くなるような内容に、来年は参加をどうしようか迷ってしまいます。教育現場に直接関わらない人たちが、たくさん参加できるといいなあ。

（埼玉・川崎 絢子）

変わっていく豊かさ

2、①参加者の個々人が、一年たつと変化した姿に感じることが多かった。変わり合うことも一つの豊かさではないでしょうか？

②たくさん子どもたちが参加して、子どもたちも参加者として三日間を過ごせたことが、今までのWeフォーラムの懸案点の解決の道へのアプローチになったと思います。また、保育者として子どもたちとかわった若い人たちが、交替して、講演や分科会に参加されている姿を見て、ホッとしました。二日目のやきそばや焼サンドイッチはおいしかった。ごちそうさま。

5、最後の吉田発言は、夜中の交流で数人で話した時に出てきたことでした。ピリピリ痛い思いも苦しいけれど、vividな体験をつくる一つの要因ではないかと思いました。

（東京・荻谷 薫）

他者とのかわりを豊かにして

ほんもの

1、①自分らしさをこそ……がサブタイトルで更に深まったという感じ、他の会と違って個性ゆたかなWeに集う人たちが、他者とのか

かわりをゆたかにしていよいよほんものという感じ。大いに共感しました。

②自分らしさをこそはやはりメインテーマ。サブタイトルももう一度つづけてやってほしい。

2、①児玉さんの「流れととらえる人間関係」もつとつとお聞きしたい気持ちでした。村瀬さん、おっしゃることは全く「あたりまえのこと」。でも村瀬さんからお聞きすると「どちらかがどちらかを犠牲にした形ではパートナーシップが実現できない」のことも胸にこたえました。

②子どもが生き生きしていましたね。他者との豊かなかわりは、大人よりも子どもたちが、と思うほどでしたが、しかし子どもたちといっしょにやって下さった方、ほんとにご苦労さまです。子どもたちの声、担当の方の声が聞きたいです。

③昨年とはまた変わった魅力あるプログラムでした。折角の自然の中でしたので、何か創る（作る）ものも入れていただけたらと思いましたが、野外コースでどんなものを作ったのか、途中から帰りましたのでわからなかったのですが、そのあたりを充実させれば。

（兵庫・入江 一恵）

Weに参加する男性って……

1、①——他者との豊かなかわりをひらく——とても素晴らしい！

②「自分らしさ」の追求を続けていいのでは？

2、①何といっても、開かれた人間関係の輪の中に入れたこと。新しいネットワークがさらに深まり、広がってきた。ネットワーク作りのこと、くらし方の工夫などいっぱい聞けて楽しかった。少し自分が変わりそう。

②自分の子との関係を見直す眼、私自身が他の子との関係を作るやり方、自分の各々の子どものこういう場での姿を再認識し、どうすべきか考えさせられた。

とてもよい試みと思いますが、実際はどうだったのでしょうか。私自身は、大人同志の関係をはりく方に関心が強く、子どもの方へは行きませんでした。

5、私にとって、Weは素敵な仲間との出会いの場です。去年は、精神的に落ちこんで参加した私が、元氣と友人を得て感激して帰りました。今年もまた、自分らしく生きることにな意欲的になった私があるのです。新しいネットワークを広げようとする自分の内からの気

力に驚いてしまうくらいです。少しずつ自分が変われそうです。

今年は姪（K 十歳）と娘（A 六歳、M 四歳）を連れての参加で、特に私の子どもとの関係を考えさせられました。

私が「自分」を出すのが不得手な以上に、Aはなかなか集団やその場にとけこめず、不協和音を発していました。大好きなこのKにくっついて、それなりに遊んでいましたが、まだまだ「お母さんと一緒に」と言います。Mはもっと無理でした。日頃「仕事だから」と放ってきたからでしょうか。私の姿がみえないと不安で仕方ないらしく、ほとんどくっついていました。

おかげで私は、大人の会に中途半端にしか参加できずに口惜しい思いも残りました。でも、子どもたちとサンドイッチ作りなどをしながら、豊かとまではいかなければ、何かの関係をつけたらたのではないかと思っています。

ところで、Weの会にきて、いつも思うのは参加している男性のこと。いろいろな方がいらつしやるけれど、私には何とも不思議な存在なのです。私はどうしても、自分の夫をここに重ねられない。彼をフォーラムに連れ出

せたら、面白いと思うのだけれど、やっぱりムリかな。中小企業の中であくせく働いている男には、大きななどでん返しが必要のようです。それにしても、この輪をもっと広げなくては。それも、できるだけ教師じゃない人に。みなさん、一人が一人ずつWeの仲間を増やしませんか？

(大阪・森 陽子)

男性の視点でみつめ直すことも必要

1、とてもよかった。

2、①講演会と分科会での話し合い

②高校の方々の積極的な取り組み方に頭が下がりました。

③おつれあいと同席された男性の方々がもっと男の視点でみつめ直す集いがあったのもよいと思う。

5、人や自分にいかに正面から向かいあっているか、お話しを通して感じる事ができて、とても心暖まる思いでした。

(東京・丹原あい子)

会場さがしのネットワークはいかが

1、よかったが、まだ自分らしく生きれてい

ない。他者との豊かなかわりも、まだこれでいいというわけにはいかない。もっと、深めていくテーマだと思う。

2、②昼食をつくってもらったぐらいで、直接かわらなかつたので、悪かつたと思う。保育をしてくれた若い人は、とても、大変だつたと思う。

5、いろんな地方でできるよう、会場さがしのネットワークを作つては。

(大阪・岩瀬志津子)

四か月の虎三も参加しました

1、①参加者との豊かなかわりをひらく中で、新しい自分が生まれ(発見)、新しい自分らしさをつくる事ができたと思う。

②新しいネットワークづくりについてのテーマがあれば。

2、①分科会(家庭科)において、現場の先生方の声を聞け、自分の研究への大きなエネルギーを与えられたこと。

②何より、子どものひとりである長女が、とても楽しみ、いろんな大人との出会いという体験が与えられ感謝しています。私自身は長男である乳児をかかえていたため、もうひ

とつ他の子どもとかかわれず残念でした。また、宿舎が別のため、子どもとかかわれる大人在一部であつた気がする。

③今年も、のんびりかつ充実していても良かった。他の分科会にも、ほんとうに出たかつたのですが、これは、無理ですね。

5、家庭科に関心を持つ教師集団とその他の人々というグループ分けができている気がしました。が、何人かそのグループをつなぐ人材がいて、その人たちの発言が、家庭科の方のグループにいる私にとって、とてもおもしろかつた。

参加した分科会では、現場の先生方の話を聞く一方で、自分に語れるものが無かつたことが、非常に残念だつた。ほんとうに語りたものが、自分の中にいっぱいある気もするのだが、先生方を前にすると、ことばにできない自分を発見した。これは、次回までの自分の課題にしていこうと思う。

年齢を越え、性別を越え、あらゆる人にまとうりついたものを越えた出会いがあり、楽しかつたの一言に尽きます。特に、虎三(四ヶ月)と共に参加できたことは、Weのフォーラムが持つふところの深さと暖かさで、感謝します。

(東京・西内みなみ)

子どもに、進んでかわって！

1、①良いと思います。今、とっても大切な事だと思うので。

2、①この指とまれ式交流会、野外コース

②大人の協力が足りないと思った。理屈は分かっても自分が進んで子どもにかかわると思っていない人が多いと思う。とても残念。
5、子どもの部屋・子どもの係、大変だったけど楽しかった。
(山梨・渡辺千津子)

自分らしさをこそは永遠のテーマ

1、①ひとつのテーマを発展させながら、じっくりと継続させていくスタイルがとても好きです。

②いまのところ、自分らしさをこそが永遠のテーマのように思われます。まだまだ語りたいこと、考えたいこと、実現したいことがあります。

2、①指紋の部屋にいったい何人集まるのかと不安でしたが、老(っ)若男女多勢集まり、夜遅くまで語り合うことができました。拙ない呼びかけにも拘らず真剣に受け止め、考えつづけている人が、全国に散らばっているこ

とが確かめられて、大変心強く、希望がわいてきました。

② “みそっかす”を二人抱えて、周りに迷惑をかける、私も聞きたい話が聞けない……といらいら、はらはら、おろおろしていた昔がうそのよう。いつも子連れの私を見かねて、皆様が差しのべて下さった手が、このような形に実を結んで、親も子も本当に安心して楽しくすごせるようになったことに感謝量です。担当の若い人たちが、来年もまた来たいわと言っているのを耳にして、ますますうれしくなっていました。

子どもはあっち行っちゃい！ 式だった私が、ゆったりした自然と時間の中で、うちの子とも、よその子とも、のんびりと楽しくすごした画期的な試みでした。

5、気軽にあいさつを交わしたあと、すぐに重いテーマについて語り合える——Weのフォーラムは、自分の抱えている問題を何の思惑もなしに皆の前に提出することのできる、今の世の中では得がたい貴重な場です。

吉田さんのWeがWeであるための提案に関連して。“先生”の呼称が通用しはじめています。半田さんをも先生とは呼ばない、というのがWeに関わりはじめるときの皆の申し合せ

でした。ささいなことですが、Weの原点です。新しいメンバーも知ってほしい。

交流会・分科会の参加者が家庭科教師とその他とに分かれて固定化する傾向があり、交流会が真の交流の場になり得ないうらみあり。来年は誰もここに来て、ちよっぴり変身して帰りましょうよ！ (東京・川名はつ子)

飛躍の手がかりに

1、①スタートであり、ゴールでもある。いいテーマだったと思いました。

②いのち(生きる、生かされる) いのち(性)

2、①児玉澄子さんのカウンセリングの話。今年家庭科の再スタートの時、それにについて、いろいろ情報・意見をきけたこと。

②二人の子どもが疲れも忘れて楽しませていただきました。大人としては、預けっぱなしでかわりを持つという姿勢が乏しかったこと、申しわけありませんでした。その分、思う存分、各分科会に集中でき、ありがたかったです。

③保育のあり方、私も考えます。

5、がむしゃらにここまで来、下の子が小学



校に入り、最近、ゆとり・遊びの必要性、まじめさのみのよろさ（吉田さんからの指摘もありましたが）を感じ始めました。主婦の38度線といいますが、仕事との中で、何か新しい転機を自分の内に求めています。外からの

共修への再スタートと併せ、飛躍への手がかりにしたいと思います。

それと、今自分達の行っている生徒指導のあり方が大きな課題です。

（奈良・重富 素子）

何をやるか、何をすべきか

2、①家族を越えた新しいネットワークづくり

②子どもたちの世話をし下さった方々の想像以上のご苦労に感謝。

5、やっぱり来てよかった。日頃、話したいこと、話せないことを、いっきに話せる場でした。それから少しではありますが、自分が何をやるのか、何をすべきかがわかりました。来年は、何をやったかを話せる場になったらいいなあ。

（長野・宮崎 春美）

ただ感謝

1、①とてもよかった。参加者一人一人が明日の生き方のベースをみつけれられたと思う。

②いまの各自の状況を、どう打破し、展望を見い出していけばいいか。

2、①講師お二人の現在にいたるまでの軌跡が、とてもよくわかり、自分がなにをすべきかが各自がよく問題としてとらえられた。

②娘も参加し、子どもたちの多くと知り合いになった。参加した大人の方々の、子どものかかわりもかいまみて、興味深かった。

③参加しない人も（できない事情の人にも）どんな企画を望んでいるか調査してほしい。

5、多くの同じ思いの人々に会え、これからの生きていく具体的な方法もみつめました。ただ、感謝と、企画・実行委員の方の労にどれ程御礼をいっていいかわかりません。

（千葉・森本 邦子）

子離れ・親離れを実感

2、①楽しかった。

②食事、就寝が別の場所、子ばなれ、親ばなれへと成長した実感を味わいました。十日の夜、子どもの部屋に大人が加わろうとした試みは評価しますが、大きな声で騒ぎ（？）、眠たい子どもにとってはかわいそうでした。試みの意図は評価しますけど……実態はもっと検討した方がよいと思いました。

③子どもは子どもの部屋で眠るという試み

は、来年も続けた方がよいと思います。

5、もつと本音で、もつといろんな人と話したかったのですが、交流会をおわると時間がなく残念でした。十二時以降に眠ると、あくる日、動けないという年齢に達している自分の体の問題もあります。

(熊本・桑畑美沙子)

広い視野を持てた

1、①ねらいは良いと思う。

2、①学校や家族等について従来より広い視野から考えることができた。

③管理教育批判で、実践面で成果のある、全国集団学習研究協議会、名古屋私教連の例等も紹介したら良いと思う。

(東京・石井 宏和)

若い人たちへ感謝

1、①深い意味が含まれたテーマで、とてもよかったです。

②「家族」を越えたくらしのあり方を。新しいネットワークづくり。

2、①テーマ別交流会。この指とまれ交流会、

②昨年よりもよかったと思います。

③性教育の問題——学校・家庭・地域

5、子どもとの関わりをもっと下さった若い方々にとても感謝しています。子どもが生き生きと、とても良い顔をしてましたので、楽しくすごせた三日間だったと思います。本当にありがとうございました。

(東京・藤武 礼子)

分科会の言い出しっぺになって

1、①良かった。

②自分らしさをこそⅣ 対等の関係は奈辺に……

2、①慧太(三歳)と参加したこと。分科会の言い出しっぺになって、その中でいくつもの気づきがあった。

②無理なく慧太が離れ、くっつき、自然にかかれた。

③開かれた家庭科、家庭科の専門性をこえるようなテーマの分科会。

(東京・平井 雷太)

生徒の「愛と性」に、教師は

どうかかわるか

1、①「他者との豊かなかわりをひらく」——他者の問題は自分、自己の問題であること、おもしろかったです。

②自立と連帯・共存、家庭・学校・社会
2、①家庭科の教師が、教師としてもっている課題、人間として(母としてetc)もっている課題が、その現状を語ることをとおしてさぐられたこと、おもしろかったです。

②子ども活動にかかわって下さった「大人」の方々に感謝します。子どもどうし、子どもとおとなのかかわり合いがさまざまなあったと思います。かつてにできてくるなかと「おとな」の介入と組織づけとの相互関係がいろいろ見えたんではないかなと思っています。

③のんびり、ゆったり、学習・交流しながら、みっちり語りあえる体制づくり、できるといいですね。

5、私が提起した、家庭科の教師が、登校拒否、不登校、問題行動など、どのように考えるのか、生活指導、自己の確立、自立、自己の解体と再編の問題にどうかかわるのか、について、私なりの考えをそのうちにまとめたと思います。家庭科の教師は、小5・高3というまさに思春期、青年期の子どもたちとかわっていくわけだから、家族・家庭の

中の自己、他者との交わりの中で作られていく自己の解体と再編に出会ったり、立ち会ったりすることになると思います。つまり、「子ども」としての自己、自分をくずし（死）新しい自分をつくっていく（再生）という問題に向き会えると思います。それも、教師側の自己が問われながら……。

家族・家庭が、その機能の社会化・共同化・単純化という変化をしつつある。つまり、生活の社会化・共同（体）化がおこなわれつつある今日、familyからhomeへの変化がおこってきているなかで、現代をどう生きるか、都市をどう生きるかを問うこと、……新たな「私」の確立と、新たな公共（共同体）の創出——をどのように考えていけばよいのか、考えていきたいと思っています。

家庭の問題とのかかわりで、「愛」と「性」をどう考えるか。それも一般的なレンアイやケツコンではなく、個々の生徒がひとりの人間として、かかえている愛と性の問題をどう考えていくのか。家庭科の教師、あるいはそれ以外の教師、あるいはひとりの人間としてどうかかわっていくのか……高校生あたりでは、大きな問題になるのではないかと思います。

（東京・西内 裕一）

参加したあと、自らを語ろう

1、①よいテーマだと思います。残念なのは私自身が主体的につくれなかったこと。
2、①生活（家庭とか家族とか、それらを含んだ生き方とか）について、他者の話をきけたこと。

②全くかわりませんでした。申しわけありません。いま、自分のことで精一杯で、子どもとの関わりまで、できなかったのです。
③全体会のなかに、家庭科教育に関するテーマを入れた方がよいのではないでしょう

か。
5、参加している人たちが、自らを語ることを活発にできる姿に、感動しました。とても大切なことだと思うのです。

「We」で取り上げてきている思想や課題、そしてまた、フォーラムでとりあげられているテーマを、誌上や会場だけで考えているのはいけないと思います。

親である者は、自らの子に語ること、教職にある者は、生徒たちに授業やH・Rやクラブ活動などのなかで語ることが大切だと思います。

教師が生徒に語ることは、ますますきびし

くなる中ですが、やはり、それをやってゆかなくては、これまでの日本の歴史（戦争への道、言論弾圧の社会、人権のない社会etc）をくりかえすのだと思います。小さくても、私たちは、その防波堤になりましょう。

たとえば、指紋押捺拒否のことについては家庭科（保健科）などで「いのち」とか「いのちの誕生」「いのちを産む」などというテーマのなかで、在日の人々も人間として、自分たちと同じひとつの生命であることを考えながら、生徒に、授業のなかでとりあげることもできると思うのです。昨秋、不十分な内容でしたがやってみました。きちんと受けとめてくれた生徒たちがいてうれしかったです。心をこめて自らのおもいを語れば、生徒の何人かは、受けとめてくれると思うのです。

（埼玉・柴崎 和憲）

我が子の新しい面を知った

2、①全て良かったですが、家庭科一本で分科会に出てきましたので、最後の全体会が、司会者・発表者の人間性がそのままあらわれていて非常に楽しかったです。

②子どもを連れての参加でした。家では全



然見られない、また学校の担任の先生からの
お話からもうかがい知れなかった我が子の新
しい面を、お姉さんからお聞きして非常に驚
ろき、参加して良かったとまたあらためて思
いました。

5、職員室の机の上に載っていたことからWe
を知り、「子どもも一緒」という魅力に引か
れて参加し、各地で素晴らしい活動をしてい
る人たちがおられることを知り、学校と家
との点と線の生活に大きな活を入れられた感
じです。この夏の素晴らしい思い出だけにど
まらせず、まず友達にこの話をし、本を薦め
て、一人の人にもこのことを広げていき

いと思っております。良い本をたくさん手に
入れられたこともうれしかったです。ありが
とうございました。
(山梨・佐野美佐子)

児玉さんの話が圧巻

1、①自分のカラを捨てて参加しようと努力
してみました……。
2、①児玉澄子さんのお話が圧巻でした。フ
ォーラムに来て本当に良かったと思いまし
た。

②とても良かった。親も安心してフォーラ
ムに参加できたし、子どもも親がそばに居る
という安心感の中で、親から離れて行動でき
たようだった。

5、私のかかえている問題について、児玉さ
んから適切なアドバイスをいただき、まさに
この問題のために参加した私にとって、とて
も有意義でした。
(千葉・榎本 豊子)

子どもが荷物でないのがいい

1、①自分らしさも度をすぎれば自分勝手、
ほどほどに思います。

2、①愛知のWeの会からは、これからの運動

をどう繰り広げていくのかを聞いてこいとい
うことだったが、それより他のテーマの方が
今、新鮮に感じる。それくらい愛知は、家庭
科教育の方面でも八方ふさがりで、家庭科か
らのがれ出たいような気分であるからかもし
れない。でも、聞いてこいと言われた以上出
席しなくてはならないし、また、のがれられ
る訳もないし、もちろん家庭科からいろんな
ものが見えてくるのだから、大切にしたい気
持があるのだが……。

②子どもは荷物ではないというのがいい
と思う。どこへ行っても荷物的扱いをうける
のでつれて来にくいけど、ここはいい。

(静岡・田中 洋美)

来年は企画に参加したい

1、①良かったと思います。

②日々の生活、衣食住から、自分の周囲の
こと(環境・平和 etc)を考えるとというのは
どうでしょうか？

2、①なんといっても、十日夜の「子どもの
部屋」でのタヌキ寝入りが良い経験になりま
した。

②ちょっとむずかしいでしょうけれども、

子どもと大人が一緒に何かやる企画を増やせたらいいと思います。

5、もっと若い人、特に学生（中学生も高校生も）も参加できたらいいのに、と心から思っています。それと、来年はぜひ、企画にも参加させて下さい。
（茨城・掛札 悠子）

若者のエネルギーすばらしい

1、①今一番大切なことだと思う。

②この線ですすめてほしい。

2、①児玉澄子さんの講演、それからはじめの分科会に出て希望をもった。

②ぜひつづけてほしい。子どもたち同士が仲良くなれてよかった。子どもともっと仲良くなりたかった。外での交流、食事もたのしかった。運営をしていた若者のエネルギーがとてもすばらしいと思う。

③ひきつづき多様性があり、一人一人を大切に方向で家庭科の教師、教師以外にも興味をもつて参加できるように（今年、とてもよかった。去年よりも）

5、いろんな職種の人と話せるとよいですね。

魅力ある誌面づくりと、読者をふやすこと

をみんなで作っていきましょう。

（広島・間所 宏子）

子どもたちの元気に感動

1、①よかった。

②自分らしさをこそそのラインを続けてほしい。

2、①二日目からの参加でしたが、家庭科の分科会、夜の話し合い、とても有意義でした。

②よかった。子どもたちも楽しそうでした。5、子どもたちの元気に感動。
（埼玉・八島 紀子）

分科会のテーマ、広がり

2、①「指紋」をめぐって、また新しい出会い特に若い人たちと話し会えたことが大変うれしかったです。

②たのしかった。子ども係の縁の下の方もちの大変さは、並大抵ではなかったと思います。昨年よりは、自分の姿勢としては、子どもたちとかかわることを心がけたつもりですが、子どもを含めて、つつみこんでフォロームをやっていくこと、もっともっと、全体で

も考えてゆかなくてはと思いました。

5、分科会のテーマが、昨年・今年と固定してきた感じ。もっと広がりを作っていくことと、お互いの交流を深め合えることを来年は心がけたい。
（東京・蔡 和美）

子どもの部屋、さらに充実を

2、①児玉澄子さんの「流れととらえる人間関係」がとても印象的でした。魅力的な語り口と笑顔は、つらい事例をもサラリと話され、カウンセリングとはこんなに身近なものだったのかと改めて思いました。また、私の住んでいる富山県では、今「内観」ということが流行していますが、それと本当によく似ているので驚いています。

②子ども劇場に入会していますので、今回の「子どもの部屋」については、少々不満があります。例えば、「お約束」などをつくり、「自分の布団を敷いたり上げたりは子ども自身ができる」など最低の条件は作ったほうがよい。（二日目、一人のお父さんと、そばにいた二三人の子どもと私で布団を上げたが、重労働でした）

③さらに発展し、充実した子どもの部屋を。

Weに投稿していらっしゃる方の紹介と、その方々の生きる姿勢など聞きたい。

5、お世話して下さったお若い方々、大変だったと思います。いろいろな遊びの工夫や野外の食事、いろいろとありがとうございました。子ども部屋の充実のために、子どもと過ごして下さる方々の人数を増やし、十分とはいえなくとも謝礼はぜひ考えてほしいと思います。子どもたちは、とてもよい経験をし友達をつくり、楽しい夏休みになったことと思います。

(富山・大角由美子)

おれを言うことを忘れ、ごめんなさい

1、①「自分らしさをこそ」から一歩進んでの「他者とかかわり」とてもよかったと思います。

②よりいつそう自分をひらき、他者をひらくこと。

2、①最後までいられず残念ですが、指紋押捺拒否の交流会、児玉さんの話、ともに印象的でした。野外での昼食、楽しかったですね。②good、こちら側の意識としても、子どもに関わってこういう姿勢が昨年よりも多かったと思います。

5、読者会の報告のとき、最後に言おうと思つて忘れたこと。「おいしい昼食ありがとう！子どもたち、若ものたちにありがとう。と、大きな拍手を!!」お伝えください。

今年も、盛りだくさんで楽しいフォーラムでした。子ども係の人たち、お疲れさまでした。ありがとう。大勢の人の手でフォーラムができ上がっていくのだということを、今年は見れました。実行委員の皆さん、御苦労さまでした。最後までいれずにごめんなさい。

(東京・姫野 順子)

本音で生きる大切さ

1、①自分らしさを前面に出して、本音で生きることが最も大切なことですので、「自分らしさ」をこれからも追求してほしいと思います。

2、①村瀬さんの講演↓社会的常識にとらわれないで、本音の部分で、しかも自由に生きて、素晴らしいパートナーシップを作られた話は興味深かった。児玉さんの講演↓素敵な気持をもつことが人間性を伸ばす最大の武器であると改めておもいました。

②子連れの身には、とてもありがたかった

です。(岐阜・杉本 純子)

発言は短く明快に

1、①日頃、自分中心に考えていることが多いので、視野を広げる良い機会だった。

②来年も様々な立場の人と対話できるような、それに魅かれて集まって来るようなテーマにして下さい。

2、①全てが有意義でした。

②人見知りをしない、明朗活発な子が多く楽しかった。でも十時以降の会議に出席したままだったりするのはどうかと思いました。正直言つて、にぎやかすぎて困った時もありました。

③出席者が明日へのワンステップを進むべく来ているので、各自、自分の意見は短時間に明快に表現するようにしたいものだと思います。(少々、まと外れの答えでした)

5、普通の人間として、あたりまえの感覚を失いかけようとしている自分に気がついたのは最大の収穫でした。心の洗濯をして来たような気がしています。自分の感じている疑問を口に出して解決してみようと思います。

(山形・我妻 典子)

みんなエネルギーですね

1、①世の中にはいろんな考え方、発想の持ち主がいる。また、その人も真なりということで、自分の発想の転換(?) みたいなことができたような気がします。子どもたちとの交流も楽しかったです。

②自分が広い視野に立てるような企画を！
2、①初めての参加でした。いろいろ魅力のある分科会ばかりで、参加できないことが残念でした。(しかたないのだけれど)

②子どもから気に入られたりして、また、くじに当たったりして他の人よりは、かわれたと思います。けど、この時間、いろんな話し合いから離れなければならないのは、やっぱり残念でした。子どもの世話をかけてくれた人は私以上に心残りがあるのでしようけど。

③家庭科教師なので、やっぱり家庭科のことをどんどん取り上げてほしいです。

5、大場先生に率いられて修学旅行のようにしてやってきました。参加しているみんながすぐエネルギーで、どこからあんなエネルギーが出てくるのか、私もまねさせてもらいたいと思います。

今年転勤になって、女子校にやってきて、共学ができることから離れてしまうのかと思っていました。が、実際に授業をやってみると女子だから当然という雰囲気があり、内容を検討して、男女に関係なく必要な教材を見つけ出していかねければと、ようやく気がつきました。二学期から少しでも自分の理想に近い授業をやっていたらと思います。また、生徒たちは賢いので、こういう家庭科を考えてもらえるように(私と一緒に)、いろんな刺激を与えてやれればいいと思いました。森さんのいうように、さっそく「We」のバックナンバーや単行本をまわりの人たちに、そして生徒に広めて行きたいと思っています。ご準備、本当にありがとうございます。参加できたことに感謝します。
P.S. やはり勉強するには、いすだけでなく机もほしいと思いました。

(山形・荒井 恵里)

ゆみこさんに会えたこと

1、①よかった。

2、ゆみこさんという「いい女」をまのあたりにできたこと。春樹さんという過渡期の矛

盾をはらんだ男との出逢い。“この指とまれ”で平井雷太さんや川名さん、荒井さんたちとの出逢いや共感から、より自然に生きる力をえたような気になったこと。

(東京・丹原 恒則)

自分の変化のバロメーター

1、①ステキなテーマでしたが、私は消化しきれませんでした。

②Weではやはり、他者とかかわりを求めて来たいと思っています。

2、①どの会も得るもの大でしたが、強烈すぎるほどの刺激はなかったように感じました。

②多くの子どもとの交流はできませんでしたが、もう少し、時間的余裕がほしい。

5、二年、三年と、参加回数を重ねるにつれ、自分の変化のバロメーターがわかるのが、フオーラムだとわかりました。また、他の人の変化もわかって楽しみです。さて、来年の私はどんなに変化しているでしょうか？

(埼玉・仲西 香)

誰でもできる

やさしい革命

—— 確立しよう 男女の
パートナシップ ——



村瀬春樹さんと

共に

『怪傑ハウスハズバンド』でおなじみの村瀬さん、スラッとした長身でちよつとつっぱり風。ご自分の畑で作られた枝豆を持ってきて下さいました。とても甘く、おいしい枝豆をみんなでいただきましたながら、なかなか雰囲気の中で、講演がはじまりました。

〈自己紹介〉

はじめまして、村瀬春樹です。今日、僕がお話するのは、一種の男の主婦（夫）の物語であり、それと同時にパートナシップを何とか確立した方がいいんじゃないかという事で考えてみました。

僕は、一九四四年、横浜で生まれ、現在、神奈川県

二宮町で暮らしております。家族は、パートナリーのゆみこと長男の飛礫、次男の不思議。今回、みんな一緒に参加しました。仕事はフリーライターで、二十五歳の時から書きはじめ、『誰か沖繩を知らないか』という本を出しています。一九七〇年吉祥寺で『ぐわらん堂』というライブハウスをゆみこと一緒に経営し、その後、一九七九年、三十五歳でサラリーマンになり、一年ほど続けた後、ハウスハズバンドになりました。なぜ、男の主婦になったか、そのきっかけからお話ししていきたいと思っています。

〈僕がハウスハズバンドになったわけ〉

それは、一九八〇年、今から六年前のことなんです。これ

は、晶文社から出ている『怪傑ハウスハズバンド』という本に出ています。ある朝、ゆみこは、婦人体温計を口から抜きとりざま、こう言うんです。「もう、うんざりだわ」。

「何が？」

「今日、燃えないゴミを出す日って知っていた？ 村瀬さん」

「えっ？」

「今日は村瀬さんの生命保険の集金日だし、電気代も二か月もたまっている。今週は、給食がないから、お弁当もつくらなきゃいけないことを知っていた？」

「いや、そんな事は知らない」

「そういう事すべてに、うんざりなのよ」

「俺、ゴミ捨てに行ってくるよ」

「わかってないわね。そんなことじゃないの」

「どんなことなんだ」

「言われた事だけを手伝うんじゃないって、家事や育児を、自分の仕事として考えてほしいのよ」

「夫や子供たちのために、一生、下働きするなんてごめんだわ。私は村瀬さんのお母さんでもないし、まして、召使いでもないわ」

「そりゃわわっているさ。しかし、俺は毎日会社で働いている訳で、家のことまでわかるわけじゃないじゃないか」

「じゃあ、会社なんかやめればいいじゃない」

「だって、俺が会社やめれば、食えなくなるじゃないか」
「今だって、食えてやしないわ。何のために、私がパートに出ていると思うの」

「何が言いたいんだ」

「私が働きに出るわ」

「じゃあ、俺はどうなるんだい」

「あなたが家庭を守ればいいじゃない」

「しかし、女が外へ働きに出て食えるほど世の中甘くないぞ」
「食えなけりゃ、あなたがパートに出なさいよ。今、私がやっているみたいに」

こういうふう言われ、追いつめられた僕には、二つの取るべき道があったと思う。それは、

①家事・育児を一層手伝って、よりよき亭主になること。

②仕事をやめて、男の専業主夫になること。

ほかの場合まづかったのは、極端な方法を選んだしまったことです（笑）。つまり、夫婦の役割分業を逆転してしまっただんです。

〈男の主婦と女の主人〉

その頃、男は外、女は家という役割分業というのがおかしいんじゃないかと思ひ、とにかく、これを逆転してみれば、問題が解決するんじゃないかと思っていたんです。それが、

どうも、そうじゃないということを話したいと思います。

タイムレコーダーのない主婦業に、ある意味では、あこがれていた僕が、主夫になって、まず気がついたのは、日曜祭日に休めないのが主婦業であるということ。言い換えれば放っておけない仕事ということがわかったんですね。なににもこたえたことは、それらの家事労働ひとつひとつの仕事はどうも、あまりエキサイティングじゃないということなんです。しんどいわりにおもしろくない。非常に、ボルテージの低いエネルギーで仕事ができってしまう。非常に、重要であるにもかかわらず、おもしろくない。しまいには、夕方、台所に立つのがいやになっちゃったんです。冷酒をコップ一杯飲みほしてでないと元気が出ない、そういうわけで、非常にうちこんでしまい、グチっぽくなり、ウジウジし、うつうつとした毎日が続いた時期がありました。

一方、ゆみこは、僕が専業主夫になると同時に、入れかわって、生まれてはじめて、フリーのライター兼編集者として仕事をしはじめた。ゆみこは、生来、非常に不器用な人間なんです。僕は、不器用な主婦にも、経済的自立ができるのかどうか、ひとつの生体実験をみるような思いで、ずっと眺めていた（笑）。ところが、彼女は、バリバリ仕事をし、経済的自立を達成しはじめ、同時に、精神的にも大きく自立しはじめたわけです。

自立しすぎたくらいもありました。だんだん、いばってくるわけですね。彼女は、忙しく働いて帰ってきた不機嫌な主人としてふるまうことが、ままあった。この場合男の主人よりも始末が悪いのは、ついこの間まで、彼女はベテランの主婦であつたわけで、僕の家事に、こまごまと介入してくることだった。

問題は、経済権を握ったゆみこの意識と行動が、ひどく、男のそれと似はじめてきたことだった。また、経済権を失った僕の意識と行動は、ひどく女のそれと似てきて、ヒステリーをおこしたり、ひがみっぽくなった。年中、ため息ばかりつき、「もう、うんざりだよ」と僕が言うと、「いいご身分じゃない、失業者のくせに毎晩ビールが飲めるんだから」とゆみこに言われる。ゆみこが、キャリアウーマンとして自信を満たせば満たすほど、逆に、自信を失っていったような感じがです。

そういう状態の時、大学とか高校の同級生から電話がかかってくるんですね。同窓会があつたりして、出ていくと、パーティ会場には、みんな同窓生んだけど、男たちと働く女性の一群と専業主婦の一群がいる。

働く女性の方は、イキイキしながら、昔の友人たち——働く男性たちですけど——と名刺交換なんかやってる。同じ業界の人間だと、新しい仕事へと話が展開したりしている。実

に活発なんです。ところが、なんだか暗いというか、ロンドンというか、こんなことを言っておこられてしまいそうだけど、パーティ会場の隅の方でトリの唐揚げとか肉団子をツツいている一群がいる。大学卒業後、結婚して家庭におさまってしまった専業主婦の同窓生たちです。ぼくも名刺交換するわけでもないし——主婦も主夫も名刺を使わない——まして仕事の話に花が咲くわけでもないから、そっちの専業主婦の一群といっしょに肉団子をつつく羽目になる。ところが、話題というと子供の成績の話、身辺の人たちの病気の噂。あるいは冠婚葬祭、ダイエット、ペットの話……。学生の頃、あんなに活き活きして魅力的で成績優秀だった女性たちが、こんなこと言々とナンですけど、どうしてこんな中年太りのロンドンなおばさんになってしまうのか？ ぼくもまったく同じ事情で、きつとロンドンなオジサンだったにちがいない。やっぱり、男と女の役割を逆転しただけでは男と女の関係の問題の解決には、ならぬ、ならないじゃないかということに気がつきはじめたわけです。

その頃の僕の家庭をここで整理してみますと、ゆみこは、経済力も生活技術も両方○。一方、僕は、生活技術は○なんだけど、経済力が全くない。×なんです。ここで、僕が思ったことは経済的に自立していないと、男も女もだめになってしまうんじゃないかということ。男も女もだめになっ

〈二人の主婦と二人の主人、

そして主婦も主人もいなくなった〉

それで、仕事を捜しはじめたのですが、年齢制限というネックもさることながら、時間の制限、つまり、晚メシの支度をするのにまにあう時間に帰れる仕事がほとんどない。いろいろ、捜しあぐねた結果、キャデールの仕事をはじめたんですが、土・日に仕事に出るので、子供という時間が極端に少なくなりました。で、次に、TOTOという会社に勤めたけれど、出張が多く、家事・育児のしわよせがゆみこにかかってしまい、これはまずいということで、一九八三年、また、フリーライターになり、現在に至っています。

その頃の僕の家の中では、生活技術をもった女の主婦が一人と男の主夫が一人。そして、経済力をもった女の主人が一人と男の主人が一人。つまり、二人の主人と二人の主婦が共存している状態になってきたわけで、よく考えてみると、どちらが主人でも、どちらが主婦でもない関係になった。主人も主婦もいなくなったんです。そこで初めて、僕は、これが、平等な関係、水平な関係なのかと実感したわけです。

そこで、どういうメリットがあるか紹介しますと、まず、家事・育児が孤獨な仕事から楽しい仕事に転化されます。「家事労働、二人でやればこわくない」。そして、家事がはか

どって、時間の余裕ができる。どちらかが家にいなくても、家庭は円滑に運営されていく。どちらかが、病気になっても死んでも生活していける。また、お互い、家事の大変さ、楽しさがわかってくる。外での仕事の大変さもよくわかってくる。一人でシャカリキに働くより、二人で適度に働いた方がずっと楽。しかも、パートナー同士、一緒に過ごせる時間が多くなる。最後に、相手に飽きて、別れてしまっても、一人でりっぱに生きていける。

僕らの生活は、はたからみると、共稼ぎの男女のようにみえるんですが、よくよく観察してみると、二人の主人と二人の主婦がいて、実は、どちらも主人でもなく、主婦でもない、こういう生活を営んでいるわけなんです。

〈男社会について〉

主夫になってみて、いろいろ気がついてきました。今の男の存在というのは、家を留守にする存在、ほとんど仕事に生き、家のことをすべて女房に任せっぱなしにしてしまっている。これが、性別役割分業ですね。なぜ、女が家事労働をしなければいけないのか、こう追求した時に、合理的な答えはでてきませんね。つまり、男が男社会を形成してきた中で、初めて発生したわけです。働く主婦というのは、フルタイム働いて家事労働もやっている。こんなバカな話はない。今、

男たちに真剣に問われているのは、男もまた、生活技術を獲得し、一人の生活者として、自立していかなければならないという事じゃないかと思います。

ところで、男の家事労働時間をご存じですか。妻が専業主婦とパートタイマーの場合、夫の家事労働時間十二分なんです。妻がフルタイマーの場合は四十分だそうです。ちなみに女性の家事労働時間は、職業をもった女性、平日平均六時間十八分。専業主婦の場合、八時間三分。この数字をみていると、働く女性というのは、男の二倍働いている。とにかく、十二分と四十分じゃ、男は生活技術なんか身につくはずないですね。それで、まずいのは、多くの男たちが、そんな事はわからなくていいと思っているんですね。日常生活なんているのは女たちに任せればいいと思っている。

ところが、日本の男性にとっても、女性にとっても、さらに日本の文化にとっても、役割分業の弊害が、非常に大きくできてきているんじゃないか。たとえば、男たちの仕事の面にもろにできてしまう。商品というのは、男社会を色濃く反映している訳だけど、たとえば、僕がワープロを打ちはじめた気がついたことを報告したいと思います。

ワープロというのは、企業の論理でいえば「日本の誇るべき最先端のハイテク産業」ということになります。これを打ち続け、内蔵されているコンピューターと言葉のキャッチボ

ール（ひらがなで打つと、向こうは漢字で返してくる）をしていると、いつのまにか、このコンピュータをプログラミングした人たちの人となりがわかってくるんです。言ってみれば、このワープロを作った人の臭いみたいなものが届いてくるわけ。これが、どんな臭いかというと、分別ざかりの日本のオトーサンの臭いがやたらプンプンする。つまり、ワープロというのは、日本のオトーサンの問題意識にそったパターンで入力されている。つまり、オトーサンがかかわって



なかったり、理解を超える言葉というのは、十万語の辞書の中に入っていないですね。

たとえばぼくの使っている二台のワープロはいずれもシャープの「書院」系のものなのですが、『家事労働』をひらがなで打っても変換されない。『かじ』と打って、『ろうどう』と打つ。そうするとやっと出てくる。たった六字でしょ。これは、使用頻度の問題かなと思ったんですね。ところが、そうでもないみたいなんです。もっと使用頻度の低い特殊な長々しい言葉でも、男社会の言葉だとちゃんと変換可能なんです（当座繰越金、損益分岐点、代表取締役、貸借対照表など）。家事分担、分娩室、もちろん入っていない。育児とは入っているけど、僕らが日常頻繁に使っている子育て、これは入っていない。つまり「家事労働」「分娩室」「子育て」は、日本の男とは関係ない言葉なんです。だから、日本のオトーサンがプログラミングしたワープロには入れてない。それで、もっと身近な食生活の関連において捜してみようと思ひ、「みそしる」とひらがなで打ってみた。これが、変換されないんです。汁だけは、かろうじて変換される。『みそ』がひらがなで残ったまま。みそだけなら変換できるんだけど。これは、現代の日本のオトーサンにとって味噌と汁というのは、別々に分裂して存在しているということ。味噌と汁を統一させたことがないということなんです。つまり、味

増汁をつくったことがない（笑）。実際、そういうふうに考
えざるを得ない。

次にじゃあ、この味噌汁、だしは何を使っているのかなと
思い、「だしこんぶ」と打ったがでない。「かつおぶし」も
出ない。いったい、この家ではどんなだしを使っているのか
とて、化学調味料」これが出るんですね（笑）。「中性
洗剤」「合成保存料」これも一発です。オートサンたち
は、こういう意識と感性で仕事している訳で、これが、商品
にも、もるに出るんです。

この男社会のオートサンたち、あるいは男たちの最大の特
徴は何かという、後片付けをしない、この一点に集約され
ると僕は思っています。たとえば、食事の後片付けをしない。
寝具、汚れた下着、くつ下の後片付けをしない。自分たちが
編みだしたプルトニウムの後片付けをしない。有機水銀、ダ
イオキシン、みんな後片付けをしない。だから、宇宙は、ロ
ケットのかけらや、人工衛星の残骸がいっぱいになってい
るし、海の底は原子力潜水艦の残骸でいっぱいです。

こんなふうに、男は、あらゆる分野で女性に甘えてるんじ
やないか。つまり、後片付けをするのは、女性なわけです。
実際、男というのは、子供の頃は母親に甘え、結婚しては女
房に甘え、仕事帰りに寄っては、なじみのホステスに甘え、最
後に、老人医療施設の寮母さんに甘えて、おむつを取りかえ

てもらう。これが、今の日本のオートサンの悲しい一生（笑）
なんです。

男社会の矛盾がボロボロと現れはじめて、それに対して、
続々と女性たちの異議の申し立てが、特に、ここ十数年来は
じまったでしよ。もちろん、国連の婦人の十年の果たした役
割も大きかったんですが、やっぱり、一番大きかったのは、
男社会の矛盾というものを、これじゃいけないんだという女
性たちの内部の煮つまりがあったからではないかと思いま
す。僕が六年前にゆみこの異議申し立てにあったように、皆
さんも、いろんな分野で、異議申し立てをはじめています。こ
れが、今の現状じゃないかと思えます。そうならば、男の時
代は終わった。これからは女の時代だと言われるのも、この
へんに理由があるんじゃないかと思えます。

性別役割分業によって成立した男社会というものが、まず
パートナードある女性との関係の中に噴き出してきました。
セパレートコースを歩んでいく男女たち、たとえば、離婚件
数を調べていくと、激増しています。十年前の二倍以上に増
えています。そして、昭和五十九年には、離婚が死別を上ま
わり、いまや、男と女は生き別れの時代だということができ
るんじゃないかと思えます。離婚経験児、これも考えてみた
らかわいそうな話なんだけど、これが、二十年前の三倍以上
に増えている。たとえば、男女の関係の中にも、性別役割分

業の男社会というものが、こういう弊害を生み出したわけですね。

この離婚の内訳を調べてみると、男女とも、三十〜三十四歳がピークで、同居期間十年以上、四一・二％で一番多い。つまり、長く暮らした末の離婚が際だって増えている。離婚するなど言っているわけじゃないですよ。しかし、耐えて不幸になるよりも、すっきり別れて元気になった方がいいと思っ
ているにもかかわらず、子供たちのことを考えると、暗澹たる思いがしているわけです。むろん両親が別れた後、イキイキと暮らしている子供はたくさんいます。

ぼくの身边にも、仲の良い友人たちの間にもたくさんいる。むしろ、別れて、母の手ひとつで育てられてからの方がずっとイキイキした子供になったというケースも知っている。

しかし、同時に深く傷ついている子供たちも知っている。何度か言うようですが、子供のために別れるなど言っているのではないんです。性別役割分業によって、どちらかがどちらかを犠牲にすることで男女の信頼関係をこわしてしまい、別れるのはおよしなさいって言ってるわけです。せっかくな
いっしょに暮らそうと、わざわざ選んだ相手とですね。むろん、別れるたびに人生が活き活きするから、別れるのが趣味だ
っていう人は別ですが。

〈女の主婦について〉

ここで、男社会のことについて考えてみたので、次に、妻というか、女の主婦についても考えてみたいと思います。男にとつて、女というのは、普通二つに分類されます。ひとつは女の子、もうひとつがオバサン。男にとつて、この二つは全く違う存在で、もつと過激に言えば、男にとつて女というのは、若い女の子のことなんです。オバサンは女じゃない。いい意味でも悪い意味でも、女の子っていうのは、男の励みというか、はりあい、性的欲求の対象である。ところが、この女の子が、年月がたつにつれて、なぜかオバサンになる。いきいきした蝶が、イモ虫に変身してしまいます。これは、なぜなんだろう。

これは、やっぱり、「人は女に生まれない。女になるのだ」
こういう事だと思ふんです。これは、ボーヴォワールの言葉なんですけど、僕の言葉に直して、もつとわかりやすく言いますと、「人はオバサンに生まれない、オバサンになるのだ」。
こういう事じゃないかと思ふんですね。

つまり、台所という檻の中で、蝶は、イモ虫に退化し続けていってしまうわけです。さっき、同窓会のところで、専業主婦の話をしましたけれど、本当に、なぜ、学校時代あんなにいきいきしていた人間が、こんなに変わってしまうの

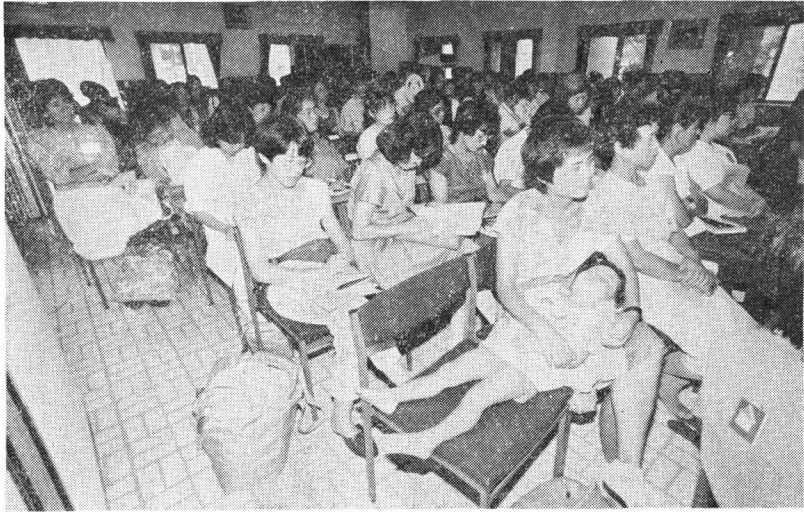
う。そういう感想をもちました。やっぱり、これは、「男は外・女は内」、あるいは、「あなた作る人・ぼく食べる人」そういう性別役割分業の中で、男の下働きばかりさせられて、つまらない人間になっていくわけですね。ひとつのおもしろい仕事というのは、おもしろい人間をつくっていく、つまらない仕事は、つまらない人間しかつくりたくないと思うんです。家事労働を決してバカにして言ってる訳ではないですよ。重要なことだし、必要欠くべからずことだし、誰かがやらなきゃいけない。ただ、これを、だれかひとりの人間、あるいはひとつの性に固定してしまうと、今言ったオバサンばかりになってしまう。

しかし、人間がつまらなくなったからといって、オバサンが弱くなるわけじゃない。ここがおもしろい。たとえば、出産は、人生観が変わるでき事じゃないかと、男の僕は想像してしまふわけです。この出産に立ちあうか、立ちあわないかというのは、僕は、夫婦の役割分業の決定的な第一歩だと思っています。これは、僕の特論ですけど、ゆみこに教えられたことです。初めて、そこに立ちあってみてわかったことですけど、女性が子供を産むと子育てに忙しくなるわけですから、それに専念するようになり、一方、男の方は、会社に専念していく。夫婦のセパレートコースは、いいよ、角度を

ひろげていき、若い女の子は若いオバサンに、若いオバサンは、ただのオバサンに変身していくわけです。そして、オバサンがキャリアをつんで、どんどん強くなっていく。オバサンたちは、男っていうのは、そんな大した存在じゃないと思いはじめます。彼女たちは、人生において、だんだん主導権をもっていくと、自立していくわけですね。これから、女の時代をリードしていくのは、決して、若い女の子たちじゃないと思っています。子供を産んで、男は大した存在じゃないことに気がつき、そして、自立しはじめて、経済的な手段をもちはじめた、こういう人たちが、どんどん、世の中を変えていくんじゃないかと思っています。

〈確立しよう、男女のパートナーシップ〉

ここで、最後に一番気になっていることは、こういう強い女性たちが自立していく場合に、男に多くを期待できないことをわかればわかるほど、自立を「勝手に」してしまうわけですね。男を諦めてしまう。これは、すごく問題があるんじゃないかと思えます。「うちの亭主」とか「ダンナ」とか、「敵」とかい言う方で、「やっぱり、男なんかアテにする方がまちがいのよ」と、ある意味では、男性との関係を切っちゃって、女性たちだけが集まって、どんどん動きはじめている傾向がでてきている。



ここで、このパートナート、新たなパートナースhipを確立していくことこそ、これから自立していく女性にとって、また、すべてに自立している女性にとって、急務ではないかと思っているんです。男性の多くはほとんどの場合、女性がないを考えているのか深く理解しないまま、経済的には自立しているわけですし、そうなると、女と男がバラバラに自立しちゃっていることになる。これは、子供たちの目から見たら、こういうカップルの構図というのは、「片親が二人」というふうになっってくる。でも、子供たちが欲しいのは「両親」のわけです。片親二人と両親の違いはどこにあるのか？それは、パートナースhipの有無だと思います。

女も男も、今、必要なのは、自立することと同時に、相手との関係の上に「パートナースhip」を確立することだと思います。そのためには、どちらかがどちらかを犠牲にした関係では、絶対、パートナースhipは確立できない。やはり、男女の理解の上に成り立つチームワークのよい「共業」、それは、それぞれの仕事に対する理解と、日常生活の上での家事・育児の責任をともに共有することから始まると言えるでしょう。今お話ししたことは、何をしたらよいかということ、じゃあ、これからいかにしたらよいかというのは、このあとのディスカッションや夜の交流会にまわしたいと思います。

(記録・浅井由利子)

☆映画

「あたりまえの国の不思議」

はてな

を観て

『新しい』というよりは、『ごくあたりまえのほんとに人間らしい』男と女のあり方を提起していただいた講演の後で、村瀬さん御自身が性別役割分業を変えてゆく力を与えられたきっかけとなる、ゆみこさんの出産に立ち合った経験を、8ミリフィルム「あたりまえの国の不思議」を見せていただくことで共有させていただいた。

この映画は、一九七六年の作品で、その頃はまだラマーズ法が上陸していなかった時で、病院出産であり、不思議君は逆子でお尻から生まれてきた。しかもゆみこさんが早期破水してしまつて、陣痛促進の点滴を打ちながらのものなので、という説明をいただいてからの上映となった。

バックに流れるのはビートルズ。今ではスラリと背が伸びて頼もしい高校生になっている長男飛礫君の小さい頃が写し出され、ヨチヨチ歩きの不思議君を泣かせてしまうシーンがあつて題字が現れる。そしてゆみこさんの大きくふくらんだお腹。『確かに僕はここにいるよ、もうすぐ生まれるよ』と言わんばかりにモコモコ動いているのがよくわかる。命の存在がよくわかる。ゆみこさんのお腹もモコモコ動いている。

じつと新しい命を待つ表情が美しい。

そして分娩。苦しう、頑張つて!! あまりのリアルさに観ている人は声も出ない。皆何を思つてこの映画を観ているんだろう。私は画面から目を離すことができなかった。母親の命を振り絞つた血まみれの赤ちゃん、少しずつ、少しずつ出て来た。元気な産声、後から出て来た胎盤、ゆみこさんの笑顔、写している村瀬さんとの堅い握手、産湯につかつてきれいになって――。たった15分の映画だったけど、私には随分長い間不思議の国を旅してきたような気持ちと、あこがれて未だ手の届かぬ経験を共有させていただいた感動の中にあつて、しばらく呆然としていた。誰もがこんなふうにしてこの世に生んでもらつたことを改めて知らされることは、大きなショックであるに違いない。それぞれが様々な人生を抱えて十年、二十年、五十年。その一人一人の命がこんなふうに始まつたことを知ることが人の心を動かさないわけはないと感じて、涙が出て、誰にも気づかれないようにすることに必死になっていた。できることなら誰もいない部屋ですつと泣きたかった。なぜだかわからないが。

☆参加者とのやりとりから

講演の最後に村瀬さんは「今僕が話したことは、一つの

『何をしたらいいのか』であつて、じゃあ『いかにしていくか』はこれからのディスカッションの中でみんなで一緒に考えたいと思います」と締めくくられた。

まず出されたことは、「このような講演を求めるのは女性が多いが、変えてゆくべき男性社会に対して『書くこと』や『講演』によってどう切り込んでゆこうと考えているのか」という質問。以下、時間の都合により次の交流会や分科会に続けてゆくことにして宿題を出し合うことにした。

次に、「村瀬さんのような改革はお二人がフリーだからできたのではないことだが、それは本当だろうか。私のつれあいは国鉄職員だが色々な制約があつて、村瀬夫妻のように変わってゆくのは難しい。こういう場合はどうしたらいいのか」との質問。それから「出産に立ち合うか否かが性別役割分業を決めてゆくということだが、子供を産まない、産めない夫婦の場合はどうなるのか」。

ここで司会の平井さんから、「村瀬さんの話でおかしいとか、違うんじゃないかと感じたことでもいいから」ということで、自分が感じた「ひっかかったこと」を出してくれた。それは『片親二人』の状態では絶対よいパートナーシップは生まれないのか。離婚を経験しても地域の中で頑張っている『片親』もいるし、『生き別れの子供達はかわいそうだ』というのはいもう大昔のことのような感じがする」と。講演の

中で触れられなかった子供とのパートナーシップについても後で話していただくことになった。更に吉田さんからは、「パートナーシップを必ず結婚の中だけに見出さねばならいいのか。出会いのチャンスが無くても、離婚してしまつても、新しいネットワークの中でパートナーシップが作れるはず。『結婚』という幻想の外にある『離婚』を経験した子供が『かわいそう』という意識を変えてゆくにはどうしたらいいか」という意見も出された。人と人との関わり方が多様化している中では、パートナーシップもまた多様化が求められているのか――。

姫野さんは、「私もゆみこさんのように突き上げましたし、二番目の子供の出産にも立ち合ってもらつたが、夫は何も変わらなかった。諦めて、村瀬さんの言うように勝手に自立し始めたらようやく変わってきた。世の男性が全て村瀬さんのようではなく、突き上げや出産以前の二人が目指していたものや共通点が大きく関わってくるのではないか。それから親子関係のあり方とか、父親像をお子さんの口からも聞きたい」との発言。だんだん色々な人の色々なケースが出て来て面白い反面、どこまで行っても結論が出ないのではと不安になってくるが、皆それぞれにパートナーや子供や、他者との関わり方を求めて模索する姿が生々しくていい感じになってきた。自称「のろけの丹原」さんは、「共働きの途中で妻が倒れた

ことが赤信号に近い黄色信号だった。更に子供を作りたいという時になって、妻の大変さを思うだけでなく男の自分がどう変わっていったらいいのかを考えさせられた。自分に何ができるかを考えている時に『男にも育児時間を』という考えに出会ったが、イザやってみると生活技術を身につけるのに時間がかかる。これによって自分が歴史的に作られた男だったことに気づいた。そこでこれからの男がどうあるべきかを考えた時に家事や育児に関わることは、やさしさとか思いやりとか惚れ込んでいられるからできることで言葉よりも大きな愛情表現になるんじゃないかと思う。そういう表現を他者との関わりの中にも適用できたらいいなと思っている」との御意見。

ここで司会者は、ゆみこさんからの発言を求めた。映画の中の素顔もステキだったが、この時の顔も華やかで眩しいくらいだった。「ゆみこ・ながい・むらせと申します。出産シーンまで見ていただいた皆さんを親しく思っています」と前置きして、「私達のケースは一つのやり方ではなく、全部に共通するようなやり方はない。私の方が皆さんの生き方を学びたくて来たのです」とのこと。「私が皆さんにお話できることと言えば、痛みはその痛みを感じている立場の人が自分の方から言わなければそれを感じ取ってもらえないということ。相手が察してくれるのを待っていてもわかってもら

えない。あなたとの関係をなんとか変えてゆきたいと申し出ることで、『変わり合える関係』でなければ長続きがしないということが言える。その過程では数えきれない程の失敗例があります」ということで、その失敗例も後の会でお聞きすることになった。

最後に発言したのが二十一歳の筑波大生掛札さん。「同じ年頃の一人暮らしの男も女も、自分で食っている人はごく少数。これはどうしてかを考えた時、させてもらえなかった、教えてくれなかったとのこと。パートナースhip云々よりも自分の子供の躰をどうしているのか、自分で自分のことをやれないのは親が手抜きをしているんじゃないか。親が親なりに、親として教えるべきことがあるんじゃないか。それが学校に任されたりしてしまって『結婚したくないけど奥さん欲しい』とかいうことになってしまいうんじやないか」との若い世代からの発言に親である方々はどんな答弁をなさるのか。

以上出てきた村瀬さんや我々自身への質問や意見は、全て食後の交流会への宿題に。その答えが聞きたくて予定していた交流会を変更した人も少なくなかったようだ。

(記録・大場広子)

“流れ” 人間関係 ととらえる



児玉澄子さん

共に

はじめに

—— 表題のこと ——

このような題を私がつけましたのは、このフォーラムで何か話してもらえないか、というお誘いをうけましたとき、私が受け持っているクラスである問題が起こっていたのです。それで非常に心を痛めていました。彼らの動きを見つめ、見守りながら、彼らのもっている小さな流れを大切にしながら、しかも私がその流れのひとつ粒として何ができるだろうか——どうい

ふうになつて入っていったらよいのだろうか——と
しみじみ考え、実行していた時でした。じつと目をこらして
みていると興味深い流れがみえてきていたのです。それを
話したくなりまして、このような題をつけました。

しかし、現在流れていることをお話しするのは、あまりに
もなまなましくて、私自身もうまく語りきれぬか、というこ
とがちよつと心配でした。それから、テープをお採りになっ
て活字になるということをおききして、人間の流れというの
はどこでどう変わるかわかりませんから、結果はわからない
し、この話はやめておいた方がよいと思ひました。そこで
よりは、過ぎてしまったことをお話ししたいと思います。

この題とは、ずれるかもしれませんが、やはり人間関係というものは静止したものはいつもないと思うのです。いつも流れながれているのですし、大きな流れ、小さな流れ、自分の流れ、相手の流れ、そういうたゆとう流れのなかにあるものだと思っておりますので、きょうの話もあながちこの題と関係なくはないと思います。そこをお許しいただきたいと思います。

二つの事実をお話ししたいと思います。

最初は、導入として、私がカウンセリングなるものを研修しはじめたときに会った、私自身をゆるがしたようなケースを一つお話して、そのあと、学校にもどってからやはり私を九十度ぐらいは変えただろうと思うケース、その二つのケースをお話しできたらと思っております。

大学の聴講生として

——カウンセリングに疑問と

抵抗感と違和感と——

まず、東京大学教育学部の聴講生として勉強させていただいたときに会ったケースのことをお話したいと思えます。

私はそこで一年間勉強させていただいたのですが、ものすごい疑問でいっぱいだったのです。

あのような学問の殿堂というところと、私たちが現実に生きている場というものが、あまりにもかけはなれています。

私は四十歳を過ぎてから勉強させていただいたのですが、まわりは大学生とか大学院生とか若い人たちがばかりなのです。学生たちはフレッシュで脳細胞も若やいでいますから、言うことも立派です。でも私は、ただもう現実にさいなまれ苦しんでいる状態で入って行っておりますので、ずれるんですね。

最初、カウンセリングというものがくさくさいやでたまらなかつたのです。心理学などを立派に勉強なさったかたが、何か非常に高いところから、人間はこうである、とかあなただの病気はこうである、とかまわす診断をして、何か治療をして治していく、というようにとらえていたのです。

それからもう一つ私に抵抗があったのは、ケースカンファレンスでした。毎週一回いろいろなカウンセラーが自分のケースを持ち寄ってきて、カウンセラー同士が意見を交換する会合なのです。ケースカンファレンスそのものはとても勉強になったのですが——。

そこに大学生や大学院生といったカウンセラーのタマゴたちが自分のもっているケースを出してくるのです。ケースの内容は私にとって大変勉強になるのですが、ケースの紹介のしかたに抵抗を感じました。

「このお母さんは、こうでこうで、こうでこうで……」と事実を羅列しながら、「この母親はこうだったから、子どもがこうなったんだ」という結論を出します。

まだ二十代の学生が、三十代・四十代の苦しんでいる母親のことを、非常にひらたく紹介するわけです。

「この母親がこうでなかったら、子どもはこうはならなかっただろうに——」という言いかたをされると、グーッとくるわけです。人生経験もそんなにないのに、勉強はしているから理屈はいえるけれども、その人にこの母親のほんとの苦しみがわかるのだろうか。この母親がこういう子どもをかかえて毎日（たまに一週間に一回ずつ会うのとはちがうわけですから——）その子と面と向かってやっていかざるを得ないのに、その苦しみを微塵も感じさせないようなひらたい言い方で、議論するのに、居たたまれない思いをしたのです。

ひとりの母親との出会い

——子どもがもつ問題の責任はすべて母親か——

私は、子どもを三人受け持たせていただいたのです。その後母親を一人受け持ってみないか、といわれて受け持ったのです。

四十から五十ぐらいのお母さんでした。

男のお子さんが家庭内暴力と登校拒否で部屋から出てこな

いのです。ヒゲぼうぼうで、お母さんがごはんを運ぶとごはんだけは受け取るのですが、お母さんの顔をみると物を投げののだと言います。

そのお母さんは、「私がこうだからこういうふうになったと主人が言います。きょうのことを相談に行こうと言ったら、何だ、家の恥をよそさまにさらすのか。おまえがやった尻ぬぐいもできもしないでよそさまのところへ行つて、そんなことを言つて何になるんだ。おまえがやったことだからおまえが片づければいいんだ」というような言いかたをされたんです」と言うのです。

「そんなことちつとも恥ずかしいことでも何でもなくつて、どのお母さんだって大なり小なり子どものことでは悩んでいるんだから。私自身も悩んでいるんだから。お母さん、一緒に考えていきましようよ」と私は言うんですけれど、「いいえ、ほんとにお恥ずかしい次第で——」と恐縮しています。どうしてもその「恥ずかしい」ということからぬけきらなくては、何とも申しわけありませんでした。やっぱり私がやらなければならいんです。自分の産んだ子ですから——」と言つてお母さんは帰つて行かれて、もう二度と現れなかったのです。

人間とかかわる、ということ

もう一つ、こんなこともありました。

それは、愛知の精神薄弱者のコロニーの教授による集中講義でのことです。大きな教室でやりますから出席もとりません。最初のうちは教室が満杯になっています。ところが、先生がそのコロニーでの「たっちゃん」という精薄児の記録を克明にお話なさいます。「たっちゃん」はことばも出ないのですが、先生がほんとに苦勞なさってかわかることで、「たっちゃん」がやがて吐くようにしてものを訴えていく、その過程は、実に感動的でした。するとまわりは非常にしらけた雰囲気になります。学生はどんどんいなくなってしまう。後の方に坐っていた学生が「なあ、精薄児にも『ころ』あるのかよお」と言っています。それを受けた学生が「あるんかないんか知らんけどよお、こんな奴らにこんな時間かける必要があるんかなあ」と言っているんです。私は耐えられなくなって、席を移して先生のお話を聴いたものでした。

また、遊戯療法の場面で、かかわっているセラピストは子どもと一緒に遊べなければなりません。ところが子どもと遊べないセラピストがいるのです。何にもしないでフワァーとつつ立っているんです。だから子どもに何の変化も出ないんです。

ところが、ケースカンファレンスのときに、そのセラピス

トたちは、「あの子はどうだ」「この子はこうだ」と観察はしていますから報告だけはみごとなのです。でも一緒に遊ぶことはできない。

それをみて私は疑問に思ったのです。いくら知識がたくさんあり、理論がしっかりしており、分析ができて、人間とかわる仕事というのは、ほんとに一緒に遊べなければいけない、こころをもつて、その人と接することができなければならぬ。それこそが大切なのではないかなあと疑問がわいてきたのです。

エーコちゃんとの出会いのなかで

——ひととひととのからみあい——

そんなある日、「エーコちゃん」というケースに出会うのです。「エーコちゃん」というのは、三歳半から四歳ぐらいの子どもで、ことばがいくつかしか出ない。遊戯室に入るといつも砂場に水をたらして水が砂に吸い込まれていくのをじっとみているような子、ときどき興奮すると「ばびぶべぽ——」と叫びます。そしてあきてくると、べたあんと床にねてしまうのです。

その子についていたセラピストは女性の大学院生でした。彼女が抱きあげて自分のひざにのっけようとするのですが、「エーコちゃん」は抱かれた経験がないから、からだが固く

なつて抱かれないのです。どうやつて抱かれてよいかわからないのです。

そのうちに抱かれると気もちよいことがわかつてきて、だつこが自然にできるようになつてきたときに、別にカウンセリングを受けていたエーコちゃんのお母さんはセラピストが抱いている「エーコちゃん」の姿を見てびっくりします。抱いたことのない母親なのです。

この母親を異常な母親だと思ひになるでしょうけれど、とても悲しい過去があるのです。五歳のときに両親が心中をしつたらしいのです。ひとり残され、親戚に預けられて、そこで虐待に虐待をされながら耐えて、中学を卒業し、家出のように上京するのです。そして小さな町工場に勤め、同じように身よりのない男性と知り合つて関係をもち妊娠するのです。どうしてよいかわからず困ります。

一方、その町工場を持っている老夫婦には子どもがいな。い。おばあさんは事情があつて子どもを産ませてもらえなかつた。おじいさんの方は貧乏からたたきあげた人で、そういう人において頑固さがあつて、しかも少し異常性があつて、高い塀に囲まれた町工場からおばあさんを一步も外へ出さないのです。自分の奴隷を塀の中に囲っているような状態なのです。

その老夫婦が、若い働き者の二人を夫婦養子にし、そこで

「エーコちゃん」が生まれるのです。「エーコちゃん」はおばあさんが育てて、若い二人は工場できつかわれるのです。くたくたになつて帰つてくると寝るだけ。しかも工場主の老夫婦に遠慮しながら暮らしている、という状況です。

おばあさんは、与えられた赤ん坊に狂喜します。でもどうやつて子どもを育ててよいかわからない。立派に育てたいというこで、赤ん坊の頃から絵本を買つてきて、朝から晩まで「おいうえお——かきくけこ」という毎日。「エーコちゃん」は、そのようにして育つた子どもだったのです。

若い母親は十回目のカウンセリングでようやくころがひらいてきてそうしたことを訴えるのです。そしてまるで幼児のように泣くのです。どんなに遊びたかつたか、どんなに学校へ行つてお友達と遊びたかつたか、どんなに父親と母親をうらんだか、どんなにいじめられたか、というこを、幼児のことばになつて、カウンセラーに泣きわめくのです。

それを、カウンセラーは受けとめます。

そのころからお母さんに変化がおこります。おもいのたけを出したころから少しづつかわってきます。

お母さんが「エーコちゃん」のいる部屋に入つて来て「エーコちゃん！」つて手を出すのです。「エーコちゃん」はびっくりするのですが、おっかなびっくり手を出してお母さんと手をつないで帰ります。まだしつかりはつなげなくて手の



ひらを合わせるような感じですが――。だんだんしっかりつなげるようになって、またセラピストの抱くのをみて、お母さんもおつかなびっくり抱けるようになった頃、“エーコちゃん”に“ママ”ということばが出てきます。そのことばがきっかけのようになって、いろいろなことばが言えるようになります。

ことばが出るようになりますと、母親は「もう来るのをやめたい」と言います。それは老夫婦が、「もう幼稚園にやらなければ。カウンセリングなんかおしまいにしなきゃ」と言うからでした。そして“エーコちゃん”はこなくなっています。

私はこの話を感動して聞いていたのですが、最後に担当したセラピストが

「私はこのケースをこのまま終えたくなかった。私は“エーコちゃん”とずっとずっと一緒にいたかった。なぜなら“エーコちゃん”は四人のおとなを背負ってあの高い塀の町工場に帰っていかねばならないのです。はたして“エーコちゃん”に四人のおとなを背負えるでしょうか？　そしてお母さんだってまだ十分に強くなっていません。しかも老夫婦は全然変わっていないのです。そこへ帰っていくのです。私はしやしやり出てもいいからもっと続けたい。二週間に一回、一ヶ月に一回でもいいからもっと来てちょうだい、と言いたく

なる。でも私の立場でそれは言えません。相手がやめると言ったらやめなければなりません。でも、私は、ずっと「エーコちゃん」と一緒に歩いていきたくかった。」

と二十四、五歳の冷静な頭の下さそうな院生のセラピストがポロリと涙をこぼしたのです。

その場面をみて、私は心の底から、いいなあ、と思いました。はじめてそこで心技兼ね備えたカウンセラーにめぐり合ったのです。学問するとはこうでなければならぬ、私はいつもこの事例この場面にもどって来ようと思いました。

いつも「母親がこうだから、ああだから——」という発言を聞いてきたのですが、この「エーコちゃん」の母親をせめることのできる人がこの地球上のどこにいるでしょうか。このような過去、このような苦悩を背負ってきた、何の罪もなくしてこのような苦悩を背負ってきた人を、誰がせめられますでしょうか。だからといって、このおばあさんをせめられますか。そう思ったときに、人間がからみ合って苦悩をうみ出しているということ、どこが原因なのかわからないようなからみ合い、というものがわあーっと見えてきたのです。

「受容」ということ

——カウンセリングを学ぶ——

ここで、はじめて、私は、「受容」という根元がわかって

きたように思いました。真の苦悩は受容する以外にないことを悟ったのです。

「エーコちゃん」のケースに出会ったことで、自分の身にあれこれ、くっつけてきたかさぶたが、全部はがされていくのを、実感しました。

それが私の原点になって、それからほんとに素直にカウンセリングというものを受け入れてきました。海綿が水を吸うようにたくさんのかさを吸収できるようになっていきました。

そのことがあって以後、半年ほど、ほんとの勉強をして勤務校にもどったのでした。

K君との出会い

——自らのちからがあふれ出るということ——

K君のことも本に書いてはいるのですが、もう少し詳しく時間いっぱいおはなしたいと思います。

K君は、何度も同じことを繰り返す子でした。たばこ・万引・たかり……。学校というところは問題行動に対して謹慎しかやりません。何度でも繰り返すのでやるたびに増えていて、最後は二週間も三週間にもなっていました。

その間、学校は指導と称して教師がかわるがわる出向いて行って説教します。あしたから謹慎がとけて登校する、とい

う日に、彼は外でシンナーを吸い補導されています。学校では誰が考えても退学、ということでした。

その退学処分がきまるという職員会議の前々日の夜、ある教師から電話がかかってきます。

「実はあの子が一回目と二回目にみつかったときに、僕は良心にとがめることをしている。あの子がやったんじゃないのかもしれないのに、僕が言いはったものだからそうなっちゃったんだ。それから彼は同じことを何回も繰り返している。カウンセリングなるもので彼を救えるものならやってみてほしい。職員会議で提案するから、引き受けてほしい」というのです。

その人が電話をかけてくれたことはうれしいと思い、無にしたくないという気もしましたが、私は自信がないし困ってしまいました。

そこで私が指導を受けて尊敬している先生に相談したのです。

「あす謹慎がとけるといふ日に、あしたからもどれるという日にシンナーをやる、ということが私にはとつてもわからない。どういふことでしょうか」と。そしたらその方はおっしゃるのです。

「きょうで終わると思うからやった、と。そういう考えかたはできませんか？」

そこで私ははっとしたのです。「きょうで終わりなんだからやらなきゃいいのに」——というもののみかたしかできていませんでした。

大切なのは、その子の見方で、見てみることに。長い間外にも出られなかった彼が、これで終わりだと思った時の気持ち——その上での行動と捉えていくのだと。

私の思い入れを捨て、無心になることだ、からっぽになつて彼の話を聴く・聴く・聴く、ということをやってみよう、と決意しました。

それから五日間の格闘が始まったのです。カウンセリングは普通一回に一時間しかしてはいけないものなのです。相手にもこちらにも負担になりますから。ところがそのとき私は毎日二、三時間も致しました。五日間の猶予しかなかったからです。

明るみに出た彼の本音は次のようなものでした。

「何でオレだけがドジ踏んでオレだけがこんなめに会うのか」

「大人は不公平じゃないか。片手落ちだよ」

ものすごいうらみつらみが積り積っていたのです。

「法律を犯せば罰せられることはわかる。でも見つからなければ罪にならないじゃないか。だから、見つかった運の悪い奴は罰が通り過ぎさすらいんだ」

教師が一生懸命に指導を重ねてきたつもりでも、彼には素通りだったのです。ただがまんがまんを重ねて、うらみつらみだけはつるけれどもこころのなさは素通り。それどころか、ただ不公平だという思いだけが積っていったのですね。その積もる思いを彼自身で解決していくには五日間では無理だなあ、退学になるだろう、したら私はそのあとともつきあっていこう、それしかないな、と思いました。

最初の日、長時間の面接のあと、私はくたくた。

「きようは疲れたわねえ。あなたも疲れたでしょう」と言いましたら、「ううん、疲れたけど、すごくすっきりした」と



言ったんですねえ。ああ、すっきりしたのか。そうか。それなら、私が来た意味は少しは、あったのだ。

三日目には、北海道への夏休みの家出の話になったのです。それがカギになっていきます。

彼は、単車がすごく好きなのです。そしておもしろいことを言います。「僕の生活はテレビの画面を見ているようなもの。パッパッパッと一瞬でしかない。ときどき何かころにうかぶ。例えばこんなこととしていいのかなあ、と。でも次の瞬間次のものがうかぶとぱっと忘れる。単車ぶっとばすと全部ふっとぶ。だからこれは僕の生命だ」。アルバイトをしてようやく買った単車を毎日手入れをして大切にしていたのです。

二回目か三回目に走ったとき、事故を起こします。下手な運転の車と衝突して倒れるのです。自分も痛かったけれど、まず単車が心配だった。相手の車を運転をしていたお姉さんが降りて来てやさしくしてくれた。修理代を払ってあげるからと言って名刺を渡してくれた。

自宅へ帰って母親に、「何だおまえ、それは逃げられたんだぞ、おまえはいつもドジなんだから」と怒鳴られるのです。それでも電話がかかってくるだろうと信じて待つのです。翌日電話をしたら、こわいおじさんが出て「うちの車だってキズつけられている。おあいこだろう」と言われ

る。それでひきさがったら母親に「それみたことか！ 言わんこっちゃない。おまえの頭がからっぽだからこういうことになる」とバンバンバンバン例によって言われるのです。

それがきっかけになって、夏には行ってみたいと思っていた北海道に知人を頼って家出します。

今、私は、すんなりとお話していますが、実は、話の筋をたどるのは、大変でした。単語がポンポンとび出すだけです。

「北海道は、広々として、すてきなところでしょ」と聞きま
すと、

「うーん、すごく大変」

「何が」

「働くのが」

「ああ、牧場の仕事が厳しいのね」

「うん、でもかわいい」

「え、何が、子供たち？」

「馬が」

「ああ馬の世話をしていたのね」といった具合なのです。

でも、北海道行きの話は、彼は熱を入れて語り、私も、丹念に聴くことができました。

「いい経験したのね」

「うん、僕も話しているうちにそんな気がしてきた」

「帰って来た時に、この話を聴いてくれる人がいなかったのよね。……ごめんね」

私は、唐突にも「ごめんね」と言っていました。彼の行動を家出即非行ととらえて彼の経験を抹殺したであろうおとなたちに代って、謝りたい気持ちにさせられていたのです。

その日は、二人にとって心動かされた日となりました。

翌日会った彼は、顔がとても明るかったのです。そして彼の方から「先生ねえ。オレにもいいところあるってことがわかった」と言うのです。私はびっくりしたのです。「どんなところ？」ときくと「オレねえ、單車とばして止るんだ」というのです。つまり、單車をぶつとばしているときに、交叉点が見えると、もしかすると目の見えない人がいるかもしれない、子どもがとび出して来るかもしれない、老人が渡りきれずにいるかもしれない、ということをいつも思うのだそうです。そうすると、このスピードではいけないあとで思ってしまうのだそうです。「先生、これが僕の倫理っていうのかしら？」倫理なんていうことばを使ったこともない子がそういうのです。びっくりしてしまいました。

そして、彼の言う倫理は、法律とか罰とか、見つかるとかいう次元を超えたものなのだという洞察に導かれていきます。事故の相手に腹立たしい思いをしたのも、法律のあるなし、警官を呼ぶ呼ばないに関わらず、信じていた人間の良さ

を裏切られたからだだったんだ、と気付いていきます。

彼の言う倫理——人間の良さ——を伸ばしていきやいいんだと、彼は、希望を持ち始めます。

私は驚き入り、感嘆しました。あの解くに解けない問題を、彼は、経験を生き直すことで解き明していったのです。

「僕は、経験を活かせなかったからいけないんですよ。でも今僕は、ラッキーだと思います。友達も僕のような経験すれば良いのと思っちゃうな。」

五日目には、かげりのない微笑を浮かべてこう言えるようになっていったのです。

明日は多分復学が許されるだろうという最後の面接を終えて私は彼に言いました。

「K君ありがとう。君のおかげで私もいろんなことわからせてもらいました。」

彼は立ち上がろうとせず、感に入ったようにつぶやきます。

「学校ってところは、勉強以外のことも教えてもらえるのですね。」

彼は、この時、今まで不公平な大人の集団でしかないくらえてきたろう学校というものの見方さえ、変わってしまったのです。それは、又、彼の私に対する「ありがとう」でもあったのでしょうか。

私は、このケースで経験したようなことは、二度とないこ

とだと思っているのです。ほんとにありがたい経験が私に授けられたと思っています。こうやって信じて子どもたちと接していけばいいんだなあ、という確かなものを私は、Kとの出会いによって与えられたのだと思っています。

本にも書いたことですが、こんな稀有な経験を実際させてもらった者としてぜひみなさんにじかにお話したいと思ひまして、させていただきます。

——記録を終わって——

フォーラム全体会での児玉さんのお話のときの会場の雰囲気、児玉さんのちからづよい語りのおすがた、などをおもうかべながらまとめました。

児玉さんのご著書『若いいのちの像^{すがた}——私のカウンセリング入門』にもあふれ出ている児玉さんのおこころをお伝えできないもどかしさを感じます。読者のみなさんの想像力と感受性で私のつたなさを補ってくださいますよう、おねがいいたします。

なお、児玉さんの前掲書をお読みくださって私の記録のまずしさを訂していただけたらと存じます。

(記録・柴崎和恵)

参加者との話し合い

〈中嶋〉二つ質問させていただきます。一つはカウンセリングの勉強を四十歳で始められた動機をお聞かせいただきたい。

もう一つはお話の中で「受容」ということばがありました。が、カウンセリングのケースの中では非常に大切だと思うのですが、私達の一般的な日常の中でも重要なことだと思えます。ケースを離れての日常の教室の中でお互いの「受容」のあり方をお聞かせいただきたいと思います。

〈児玉〉私は大体七年度すると教師をやめたくなくなるんです。七年度すると子供が生まれたり、三十歳でアメリカに留学し、気分が開けてずいぶん人間が変わったりしました。四十歳になった時またどうしようかなあという気になっている時、たまたまた夏の講習会である講師が「人があるがまま受容する」という言葉を平気で使っているのを聞きびっくりしました。私は、それまで人を評価する、批判することには鋭かったものですから「何言ってるやがんだ」「そんなことできかないよ」という気持で、半ば挑戦的な気持で勉強始めたので

すが、その後ズルズル入りこんだという感じですが。

もう一つは日頃の生活でということなのですが、日常生活で出会う人全部を受容できたらどんなにいいかと思っっていますがそれはできません。私がつと同じ職場の人たちを受容できたら、どんなにいいかと思いますが——何故できないのかと、長年思い悩んできましたが、最近はおきまわっています。というのは、ある意味で今の学校の中では、教師は生徒を傷めつけている存在になっています。だから、生徒を受容すればする程両立しなくなるんですね。私は、それ程強くないから神経がズタズタにされてしまうと、生徒たちに向かい合った時、もう余裕が残されていないんです。

〈小林〉私も都立高校で国語を教えています。お話に感動しましたが、最後におっしゃったことに関連すると思うのですが、やはり、今の学校の体制では教師は生徒を傷めつける側だと思えます。私もつらい思いをしたことがあります。そんな時、児玉さんのようにカウンセリングをなさっていて、周りの皆さんも認めておられれば職員会議の話題にもなるでしょうが、何でもない私が生徒とい関係までいったとしても、同僚から「あなたは運が良かっただけよ。だけどこの次はどうなるかわからないわよ」と言われる雰囲気です。こういった中で、同僚を受容できないというお気持はわかります。日々傷めつけられているのは生徒であって、さい

わい児玉さんとかかわりあった生徒はラッキーであつたかも知れませんが、そうではない生徒が大勢いるわけです。私が最も関心があるのは、そういう体制の中でどう変えていつているのか、私は何をしていけばいいのかお聞きしたい。

〈児玉〉 恥づかしいことですが、私の中でカットしている面があります。最近になって少しずつ年の功といいますが、落ち着いて闊えるといった面が出来てきましたね。その上に、生徒たちが実証し、支えてくれるといったこともあります。文化祭の時などに目に見える成果を見せてくれる。それは、大きな力ですよね。生徒たちに対する限り日々努力を怠らないことだと思います。それがこの仕事の本質なのですから……その営みの中で何かを掴む。そうすると他の雑音、足の引っぱり、中傷は、力を失っていきます。たった一人の闘いのようでいて、すごい力を得ていくと思うようになりました。

〈吉田〉 お話の中で、ある父親が言ったという「母親が駄目だから、子供が駄目になるんだ」という考え方にひっかかるんです。昔はおばあちゃん達と助け合つて子供は育つてきた。問題が起きた時も母親だけでなく両親そろつて呼ぶというふうに持つていかなくては……。僕自身、母親の子供に与える影響をあまり強く見てほしくない気持です。それよりももうすこし親が自分以外の人達との関係を多く作つていくことが解決の緒口になると思います。

〈児玉〉 ある著名な心理学者がこんなことを言いました。

「あるカウンセラー志望の若い母親が小さい二人の子供を連れて自分の所に来た。彼女は大学の時に心理学を勉強したので、ぜひそれを生かしてカウンセラーになりたいと考えているがどうしたらいいのかという相談であつた。ところがその時子供達が部屋を走り回つていた。自分の子供もロクに寝もできないのに人様の子供をカウンセリングしたいとは何事だ。ああいう人にはカウンセラーになつてほしくない」。また、「キリスト様は九十九匹の羊をおいても一匹を助けるとおっしゃっているが、私はその方がそんなに献身的なお方なら、九十九匹はおいても二人のわが子を育ててくださいと申しあげたい」とおっしゃるのです。私は、がっかりしました。その若い母親の中にある何かしたいという意欲は人間として当然なことですよ。それを訴えに来られたのに一刀両断にまるでお前は自分の子供をまともに育てればいいと追い払つたわけです。

また、別のある大学の名誉教授が「最近は母性がなくなっているから非行が起きるんだ」と。そして「自分は六歳になるまで母乳を飲んでいたので、今でも母親を神とも崇め健やかに生きてるんだ」と話されるんですね。かたや母性信仰、かたや「母親は自分の子供だけ見ていればいい」ときめつける。

先程エーコちゃんの話をしたのは母親だけを責めて何にな
るといったかったのです。たしかに今の母親は昔の母親と
違ってきています。それはいろんな社会的背景、時代的背
景、あるいは日本固有の何かがあるに違いないんです。その
ことをきちつと分析してくれるのが学者の役目でしょう。昔
は良かった式の信仰だけでは困るんです。

母親に向かって「お前が悪いからそうなったんだ。それを
他人様^{ひと}に持つていくなんてとんでもない」と言った父親の話
もしましたが、他人様に持つていっていいのではないです
か。いっしょに考える人があつていいのではないでしょう
か。おかあさんを何で孤立させなきゃいけないんでしょう。
そうすればおかあさんは子供を殺すか、自殺するしかないで
しょう。子供というのはみんな育てていくもの。母親自身
も生き生き、伸び伸びと生きられた方が子供も救われるの
ではないでしょうか。

〈村岡〉 昔は、おじいちゃん、おばあちゃん、地域社会があ
つたと言われる。しかし、それはまた女の人にとってはとて
もつらい時代だったと思います。自分の経験からいっても、
老人の家庭介護でも昔は手がたくさんあったといわれるけ
れど、何人人がいても、弱い立場の女にあてられる。同性であ
りながら、介抱する人間には、「他人には不快感を与えるな」
「汚い所は人に見せるな」「自分は笑ってやれ」というような

無理なことを言うんです。子供の問題もそうだけれど、それ
を支える人がいると思います。地域というものが必要なら新
しい形の地域を作つていかなければ……。

〈児玉〉 時代は流れています。昔は……といつても、それは
もどらないこと、要は男であるうと、女であるうと、子供で
あるうと、一人一人が生き生き生きること、誰かの犠牲の
上にたつての生き生きでは意味がないと思います。

〈中嶋〉 七年目毎に教師をやめたくなるとおっしゃいた
が、フルブライトで留学なさつた時にはお子さんはおられた
と思いますが、連れて行かれたのでしょうか。

〈児玉〉 母に見てもらいました。

〈中嶋〉 一般的にいって、子供を置いて留学されるというこ
とは夫とやり合うケースがあると思うのですが、それはス
ムーズにいったのでしょうか。

〈児玉〉 スムーズかどうかわからないのですが、夫は後にな
つて「あつしまつた」と思つたでしょうね。フルブライト留
学は四十歳まででしたので、まだ十年あると思い、どんな問
題が出るのか調べるつもりで受けたのですが、ラッキーが重
なり決まつたのでやむを得ず腰をあげました。でも、思い切
つてやつて、ほんとに良かったと今は思っています。女の
人もチャンスだと思つた時には掴んでいくのがいいと思いま
す。

〔西内〕 東大教育学部の大学院に在学している者です。児玉

さんがおられたのは多分教育心理だと思いますが、私はつれ
あいと学校教育学を研究しています。頭でっかちの経験の少
ない者の集まりですが、なかには自分たちの限界を感じつつ
何かしようと頑張っている人達もいます。それが児玉さんの
一年間の経験で切ってしまうと……。長い目で見ていた
だけると、その人たちも将来何らかの形で役に立つ研究者に
なっていけるのではないかと思います。

「分析」ということは大事な道具なのですが。児玉さん
の話は聞くとすばらしいなあと思いますが、今の所、児玉さ
んでなければできないことだと思ってしまう。いつか自分で
やった時に、これが児玉さんのおっしゃったことだと感じ
とれるように、みんなで共有できる道具として勉強する以外
にないと思います。

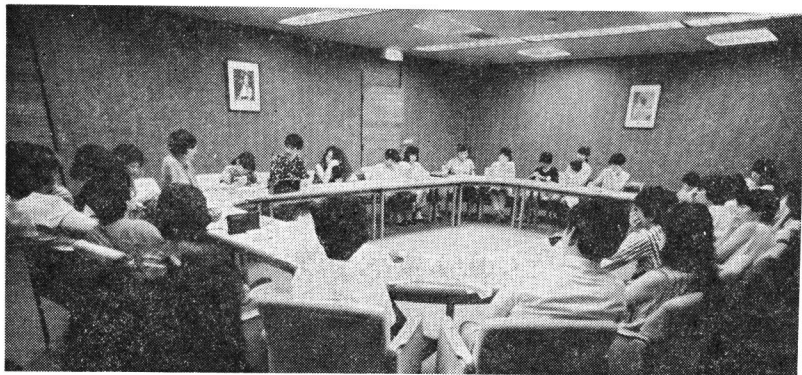
〔児玉〕 理論と心の両方を持つ学者が増えてくれたらなあと思
います。理論とか分析がなければ、ただ感情論とか主観に
なってしまう。私はさきほど、若い研究者たちのいいところ
も弱いところも紹介したと思います。エーコちゃんというケ
ースを自分の中に全部受け入れて涙を流す研究者もあるの
ですから。どんな大学にもすばらしい人も、ただの冷たい観察
者もいます。しかしまたそういう若い人達を育てたのは私
達大人だと思っていますから、ただ若い人達だけを責めるこ

とはしたくないですね。

（記録・入江一恵）



女や男, 生活を語る部屋で



こんなことを願ひ
こんなふうに語り合いました

丹 原 恒 則

「男の自立」や「男性問題」に気づかされたとして、では実際どのようにやっていくのか。私の場合、「男も育児時間を」という事で三年一〇ヶ月やってきています。連れ合いや子ども、そして自分のために、この方法が働き生きる女や男たちの未来を拓くんだとも思い込んで、小さな確信犯のように振舞ってきました。ところが、少しからだはラクになってくると、内面のしんどさを口実に、次第に私は墮落してきたのです。専業主婦のいたれりつくせりの家庭生活でラクをする幼い頃からの習慣がしみこみ、実生活を営む基本が身についていないため、にわか仕込みの花婿修業もしっくりなじんでいとは言えません。それに、一夫一婦に首を傾げ、自由な関係が関心事になってきたりで、自分をもてあましてきていたところでした。

女や男、それと生活そのものの、興味のあるテーマなのに、個的イメージがパターン化してしまったのでしょう。全く別

の側面から見つめ直し、実践の参考にしたいとも思っていました。例えば、固定化した性別役割分業の歪みをどのようにして直しつつ、いったい何を創造していこうとするのか。対にとらわれない女や男（人間）の関係をどんなふうにつくっていったらいいのか。どうやって働く時間を短くし、生活時間をふやし、どんな内容や方法で価値を見出し暮らしていくのか。ともかく、参加者一人ひとりの個的状况と実践が相互交流するように、「性」「労働」「地域の関係」「人創り」といった生活の様々な領域を対象に、語り合い、何らかのヒントなり発見、そして励みにでもなれば……と思いました。

ああ わたしたちが

もっともつと貪婪にならないかぎり

なにごととも始りはしないのだ

〈茨木のり子詩集「対話」〉

『怪傑ハウス♡ハズバンド』という本もさることながら、存在それ自身が作品であるかのようなゆみこさんと春樹さんの参加も得て、30名程の人々の交流会が四時間半に及んでもたれました。語り合いをスケッチすると、「変える」「変わる」「関係性」「個の確立」といったことになるでしょうか。男社

会をどう変えていくのか、そのノウハウを含め、自己紹介を兼ねた四方山話で会はスタート。

『変える・変わる』

男たちの現在、それは既存の休暇制度もフルに使おうとしない。内外から規制されているとはいえ、男はもつと仕事場で生活上の自己主張をした方がいい。「子どもを園に迎えに行くので早く帰ります」とか、「病人の看護をするので休みます」とか、もつともつと「男らしく」キツパリ言いたいものです。手はじめに、「一、日解放日」から始め、サラリーマンも本気になって生活を自分に取りもどそうとすれば、休日是一年休も含め年間約三分の一あるのだから、かなりの事が徐々にやれていくはず。春樹さんはフリーだからできるのではなく、ゆみこさんとの関係で身につきまされるところがあり、ほんのちよつとの本気から変わりはじめたという。

そうは言っても、「男は仕事！」。仕事はやってみると楽しい面もあり、夢中になっていると、いつの間にか共同生活者がいなくなっていることも。信頼や思いやり、いたわりといった愛情があるうちにお互い、変わり合いたいもの。

「変える」といってもなかなかうまくいかないのが現実。正当な指摘だから変えてきたとしても、批判者を抑圧者と感じ、ライバル意識をもったりして、問題提起される方に何か

溜まっていく。悔しさの共有というか、「戦友」に思えることもあるけれど何かこうねじれちゃう。思ったことも言わなくなり、うつとおしくなることも、要求がましく思え辛かった時も。となると、「人は変えられっこない」のだから、まず自分が生活を楽しんで、人が見てあれがいいとまねするところから人が変わることもあるでしょう。期待もせず、何をしてもいい、自分からすすんでやりたい事をしていく、関係を創っていくというのも、ノビノビしていてもおもしろいやり方ではないでしょうか。

『関係性』

関係を持続するには、自分が「がまん」しなかったら、(また)相手がいなくなっちゃうという所での緊張感があるし、反面馴れ合っているところも大幅にあります。「他者を変える」「他者が変わる」「自分を变える」「自分が変わる」いずれにしても変わり方というのは、既にできあがっているものがぶつかりあって変形していく感じ。剣戟あいつ迫力の中でこのでしょう。信頼し合って羨しくなる程あったかそうなゆみこさんと春樹さん達も、罵り合い投げ飛ばされ、春樹さんは肩の骨を外されたこともあるとか。

自分たち二人だけの幸せというのは成り立たず、変わり合う関係性はネットワークというか、地域的な関係としても、ひろがりつながっていく。例えば老人介護やPTA、子ども

会等。そもそもライブハウスを始めたきっかけも、脳溢血で倒れ半身不随の身障者になった春樹さんのお父さんの経済的扶養だったそうで、「あたりまえの国の不思議」8ミリフィルムに登場する杖をついたおじいさんがその人です。あの映像は、出産・子育てのかけに、老人介護の問題も垣間見せていたのです。

それから、男としての人創りと新しい家庭科共修との関係については、趣旨に賛成でも、生活全体を自分達の手に取りもどそうとする対抗文化の発想から、春樹さんは、「公教育に期待しない」とのこと。

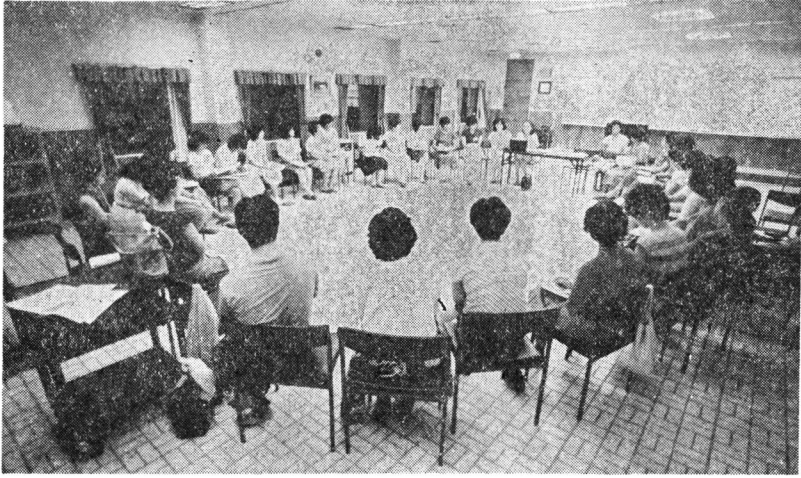
『個の確立』

問題を個に集約させ、パートナーシップの確立に向け、戦術として、生活技術を持たない男の行く末を事例集にし、男の井戸端会議をやってみることが提案されました。

最後に旅の途上インドで知り合った人と子どもものいる暮らしを営む教員の男の人の力みのない話を紹介します。

「本当に平等に家事をやるって事が問題なのか。そうすればパートナーシップがうまくいくのか。そういう事と深いところでふれ合っている事と別ではないか。本当に深いところでふれあった事があるのかな。それは自分の問題なんだ。二人の個の問題を二人で誤魔化しちゃうこともある。そのへんの事をつきつめたい。」

家庭科を語る部屋で



こんなことを願っていました

磯部幸江

一九八六年。文部省の教育課程審議会は、これからの家庭科教育の取り扱いについて、基本的な改訂の方向のまとめを出しました。長い間、女子だけの家庭科必修はおかしいと、闘ってきたことが実を結び、男女が共に学ぶ教科として出発することになったのです。その成果を確認し、制度上の問題点を明確にするためにも、今回のフォーラムでは、家庭科に力を入れなければならないと思います。教員だけの研修会のような雰囲気にならずに、We.ならではの会にしたい。それには、先生も、先生じゃない人もどんどん発言する、文字通り交流の場にしたい。

子供たちに、いつもと違った母親の姿を見せてやろうと、二人の子連れの参加でした。ところが、はしゃぎすぎて捻挫をしてしまった五歳の長男。痛みがとれず、湿布だ、医者だとあわててしまい、交流会は、立山さん・加藤さんをお願いしてしまった次第です。

次の日、早朝、夫に迎えに来てもらい、帰る道すがら、雄

大な富士の姿を心に焼きつけてくれたとのこと。一週間で回復し、元気に飛びまわっています。彼らが、家庭科を学ぶ頃は、男女共修はあたりまえの世の中になっているでしょう。

家庭科を学びながら、「男と女の自立」「人間らしいくらし」「差別のない社会」を創り出す考え方や実践力をつけてほしいと願っています。今、私たちが、教師としても、一市民としても、家庭科を創り上げる大きな一歩を踏み出す時なのです。

こんなふうに語り合いました

大 場 広 子

第一日目の夜、この交流会に集まったのは35名。都合により急ぎよ司会を静岡の加藤さんをお願いして、七時半から夜中の一時過ぎまでなんと五時間半の長きにわたって熱い語りが行われた。

☆教課審の報告をどう受け止めるか

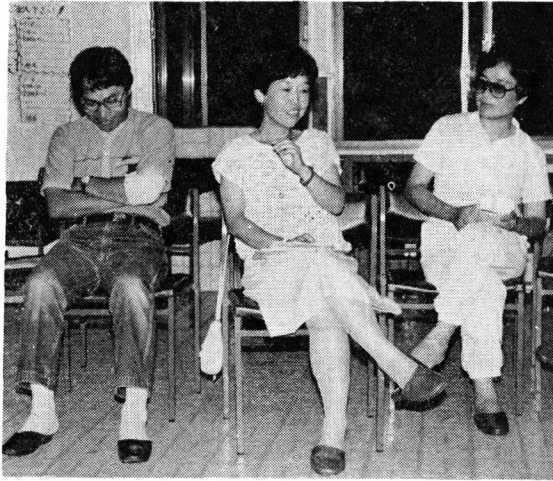
まず自己紹介ということで、なぜこの交流会を選んだのか、どういうことを話したいか、自分が抱えている問題等につい

て話していただいた。参加者のほとんどが家庭科教師。一ヶ月前に新聞発表された教課審の報告を「どう受け止めたら良いのか」「詳しいことが知りたくて」「内容に疑問、不安があった」等、掌を返したような文部省側の姿勢に対して戸惑いながらも、「自分なりの意見を言えるように」「一緒に考えたくて」「語り合う場がなくて」「共修の理論的裏付けを求めて」「勇気をつけたくて」等の積極的な意志を持った方々、そして京都の森先生や熊本の立山先生などの、先をゆく方々のお話を聞きたくてと言う方も。また、教師以外の方から「家庭科教師は子供達や家族の抱える問題をどう考えているのか」「これからの家庭科はどう変わろうとしているのか」と大学院で教育学を専攻する西内夫妻・虎三君。「性別役割意識を家庭科教育で変えてほしい」と出版社に勤める青山さん、「家庭科教育に携わる人々が一つのまとまりになれないか」と高知大学の菊地先生、「教師は（子供や親は変えようとするくせに）、一番最後に変わる存在」と翻訳の仕事なさっている鈴木さんなどから鋭い御意見で新鮮な風を送っていただいた。その間には半田さんから朝日新聞記者の心を込めて書いた記事について、教課審の考え方と裏話、四つの問題点、これまでの共修運動の歩み、女性による民間教育審議会の「教育改革提言」の中からこれからの家庭科のイメージを、資料によってわかりやすく解説していただいた。これら

を十分に吟味し、「共修運動をどう進めてゆくか」「共修で何を教えてゆくか」を打ち出し、「今後の運動の方向として何が効果的なのか」を考えてゆくという事になった。

☆教師以外の方の見方を大切に

確かに家庭科教師達は正念場に立たされている。だがここで原点に帰ってじっくり押えてゆくべき問題が多々ある。先の鈴木さんの小学生のお子さんのクラスの問題について親の立場からの意見を聞くことにした。鈴木さんのお子さんのク



ラスは、担任と生徒との関係がうまくいってないために授業も成立しないほど子供達が荒れており、担任の先生もノイローゼ状態。「PTAがなんとかしなくては」と思っても、どの程度出ていって良いのか」という状況にある。この件について「子供の前で教師を批判しないでほしいと頼むことはどうなのか」「答えを持つてからそれを承認させるために『話し合う』のが教師である」「他のクラスとそろえることに必死になり過ぎる」教師は、子供にとって「怖い状態を作らなければ押えきれない」「若い人を育てる気持が管理職に欠けている」等々、教師のあり方が問われる発言が飛び交った。

鈴木さんの抱える件についての具体的な解決策には至らなかったかも知れないが、「家庭内暴力、登校拒否、自閉症とかの子供の問題や、離婚とかの家庭の問題に家庭科はどう答えてゆくのか」「もっと袂を脱いで」「普通の感覚を持つて」考えてゆくことは私達の大きな課題であることを確認した。

これによって教師というよりは母として、女として、人間として抱える悩みや苦しみは吐き出され、その中に涙に暮れながらも積み重ねられた実践や、共修の家庭科こそ子供達の心をゆさぶり、思いやりやさしさを引き出し、互いに影響し合い、変わり合いながら生きる力を育める教科としての実践が語られた。

☆胸を張って堂々とやれる時代が来るのだから

共修の必要性はわかっていても、一部の教師達は「コンピューターを教えないければならないのか」「指導要領の中身に満足できないのに、今後もどんな中身を押しつけられるのか」という不安も出された。これに対して「今まで先輩が非難や無理解に耐えて積み上げてきたものを堂々とやれる時代」が来るのだから、今こそ「生活の主権者として生きられる人間を」創る家庭教育に、「覚えることよりも考えなくちゃいけない」教科に、「他教科との結びつきを」「総合的に」「より身近な視点で」「生活と生命をいとおしむ」教科へと変えてゆくことが今後の課題として出された。

「指導要領にこだわらずに」「子供達の抱える問題に深く迫れるような中身を」創ってゆこうということが今回の交流会の結論になるのではないだろうか。長時間でたいへんだったが、それを帳消しにして更に上回る程の中身の濃い交流会だったと思う。

ピンチヒッターの司会をして

加藤 千恵 子

半田さんからピンチヒッターの司会を頼まれ、気安く引き

受けたものの、最初に自己紹介、各県の状況、自分の抱えている問題などを話していただいたら時間はすでに10時、司会らしい事は何もせず予定時間は終わってしまった。この日しか参加出来ない方にとって交流会は物足りないものだったろうと申し訳なく思う。参加者の発言からは、今年七月九日に出された教課審の基本方向についての情報を知っておかねばという気持、いよいよ時期到来した男女共修の家庭科の内容をどうしたら良いかという思いが伝わって来るものが多かった。

10時を過ぎてから半田さんの提案で、鈴木さんが親の立場から発言された教師観——お子さんのクラス担任との関わりの中から実感したこと。「教師とは自分を変えることが最も困難な人」「教師とは自分の考えと行動が最も離れている人」——をめぐって話が続けられたが、これに対してピッチリかみ合った発言は得られなかったので、鈴木さんはさぞ歯痒い思いをされ、ますます失望されたのではないかと胸が痛くなってしまうた。

父母との連帯を願っているながら、目の前に出された発言に対して、教師の自己弁護でなく、親と教師が前向きに理解し合えるように接点を持って答えるにはどうしたら良いか、交流会が終わってから頭から離れなかった。

指紋押捺を考える部屋で



こんなことを願っていました

蔡和美

「一五円五十五銭」という童話があります。関東大震災の時、「朝鮮人が井戸に毒を投げた」というデマがとばされて、六千〜二万人の在日朝鮮人・中国人が虐殺されたことを描いたものです。主人公のゆみ子のひいおじいちゃんは、耳が悪かったために「十五円五十五銭」がちゃんと言えず、朝鮮人にまちがえられて殺されたのです。

関東大震災のことを勉強しているという四年生の娘に、この本を持たせたら、先生がクラスの子供たちに読んで聞かせ、その感想文を届けて下さいました。ほとんどの子が、「日本人がそんなことをするなんて信じられない」「ごんくくだ」「ちようせん人がかわいそう」と書いています。そして、「じしんで多くの人が死んだのに、それでもまだ人をころしていくなんてわたしはとでもできません」「自分が日本人だから、わたしもなんだかちようせんじんの人を、ころしたようなかんじがしました」「どうして、ちようせん人たちをころしたのですか？ おしえてください」と。

「指紋がイヤなら、日本から出て行け」という、信じがたいほどの排外主義が、いまだに大手をふってまかり通る日本社会。昨年来、大きな高まりを見せた指紋押捺拒否の運動が、日本人・日本社会に問いかけたもの、運動のその後について、そして一人一人、どんなことができるかなど考え合う場をもつことを願って、関東大震災の時の虐殺の証言などを集めた映画「隠された爪跡」のビデオを見た後、話し合いに入りました。

こんなふう語り合いました

川 名 は つ 子

十代から五十代までの老（？）若男女二十人が、ロビーの藤椅子や床に思い思いに腰をおろし、「指紋押捺制度って、何ですか？」という初参加者の質問で、口火は切られた。

蔡さんから、外国人登録法は在日外国人に同化を迫り、応じない者は抑圧・排除するための法律であることが説明された。今、押捺は最初の一回だけとの改正案も出されているが、

これは、「指紋は同一人性の確認のため」と当局が繰り返してきた根拠を自らくつがえすものだ。それに、一回限りとなれば、大人たちはもう押さなくてよくなり、一六歳の子どもが最前線に立たされる。親としてそんなことは許せない——蔡さんの怒りと苦悩が私たちの胸に重く伝わる。

次いで蔡さんから聞いた話は、さらに衝撃的だった。
初耳の「九一年問題」

一九六五年の日韓条約で法的地位協定が結ばれ、在日韓国人は協定永住という優遇措置が受けられることになったが、それも一九九一年以降に生まれる子どもに在留資格については何の取り決めもない。中国籍の蔡さんの場合も、永住権は子の代まで。孫の代はどうなるかわからない。

もう何代にもわたり日本で生活してきた人たちのために、その未来がこのような不安定なものであることを、誰も知らなかった……。

「拒否して、生活は変わりましたか？」

拒否者の国外強制退去など、弾圧が厳しくなっているのに、蔡さん夫妻の身を案じ、また中学生と小学生の二人の娘さんの受け止め方を知りたいとの声もあがった。

近所や学校での反応はさまざまだが、自営の印刷業にも今のところはさほどの影響は出ていないし、脅迫状も送られてきていない。中学二年生の曉燕ちゃんは、同じクラスの中国

からの帰国者と話し合ったり、夏休みの自由研究で指紋押捺について展示したり、五月に母子で中国旅行をした際は南京の虐殺記念館の見学を希望するなど、この一年でずいぶんと民族意識に目覚めてきたという。

「蔡さんが好きだから、ここへ来ました」

十代の人が初々しい声で参加の動機を語ると、「私も蔡さんが好きだから……」と、つぎつぎに連鎖反応がおきて、その都度、どっと笑いがはじけた。でも、冗談めかした笑いの中に、ひとりひとりの心底からの願いがこめられていた、と思う。蔡さんと私たちとが、こだわりなくつき合うことを妨げている指紋押捺制度の存続は許せない。

私たちひとりひとりに何ができるだろうか

住民や学生の立場で環境問題に取り組んでいる人、学校の管理体制の中で子どもに伝えたいことを一杯に抱えて苦慮している教員、エリート官僚からの押しつけで狭められていく自治を守ろうと悪戦苦闘している自治体職員……それぞれの場での闘いが語られた。そしてそれらの経験から、上からの変化を期待するよりも、行政の末端にいる窓口担当者や、小さな自治体をまず動かして、下から上へと迫っていかうと話し合われた。

「子どもたちに民族差別について語り伝えていく」「はんこにこだわって、むやみに押さないようにしている」——日本

の社会を変えていくために、私たちひとりひとりに何ができるかを探った。

日本人はいい形で他国と交流してきていない

若い学生、教員たちから、隣りの町、隣りの国と仲良くできない日本人の島国根性を顧みる発言が相次いだ。この閉鎖性の根源には国家への忠誠を要求する天皇制があり、国家の治安のためには人権を踏みにしても平気という人権無視の状況がある。いやなことはいややといえる気持を大切にしよう、人権意識を育てよう、と話し合えば熱を帯びた。

また、日本は歴史的に侵略してきたばかりでなく、今も東南アジアなどで森林を破壊し、現地の人々の暮らしを奪っている。これではよその国といい形で交流はのぞめない——これも若い学生のことば。

十一時を過ぎても、まだ解散しがたかった。ファースト終了後も、「話のつづき」や励まし、蔡さんや川名のもとへ寄せられている。

11月20日、蔡さんのおつれあいの張さんが、都庁での抗議行動中、仲間五人と共に建造物不法侵入罪容疑で不当逮捕されました。まさに指紋押捺拒否者への弾圧。拘留期間も延長され20日間の長期にわたっています。カンパ等の支援をお願いします。蔡さんにお渡しし、「指紋押捺に反対する北区の会」の救援活動に使っていただきます。(編集部)

どんどん変えよう

家族と家庭の部屋で



こんなことを願ひ
こんなふうに語り合いました

吉 田 清 彦

テーマが大きすぎたことと、いったん「女と男、生活を語る部屋」に合流しながら途中で抜け出し場所を移して再開するといった事情もあり、充分にテーマを絞り切れないままに時間切れになったことは残念というより、せつかく出席していただいたかたに申しわけなかったと反省しています。

「どんどん変えよう家族と家庭」というテーマをなぜ持ち出したか、そして具体的にどういうことを話し合ってみたかったか、について書いておきたいと思います。

今、若い人達の間では結婚願望を強く持つ者が多いといわれる一方で、「あえて結婚しなくてもいい」と考える人達も増えてきています。しかしそのいずれもが、結婚というものを既成のイメージでとらえているのではないでしうか。

私は、結婚＝家族・家庭というのは、暮らし（かた）の枠組みだと考えます。そう考えると、その「枠組み」を取り巻く環境はここ十年、二十年の間に大きく変貌してきたといわ

ざるをえません。ひとことで言うと、従来家族・家庭を支えてきた地縁社会、血縁社会が力を失い（あるいは消失し）、それに代わりうるものを作り出せないままに、個々の家族・家庭が孤立、分断させられているといえます。このような状況の中では、家族・家庭の構成員は余裕を失って衝突や爆発が起こりやすくなったり、あるいは弱者——妻・子・老人——の側に一方的にしわ寄せが押しつけられたりします。

いわゆる「家庭基盤充実政策」というのは、このような状況に対する「あちら側」の危機感のあらわれにほかなりませんが、これは性別役割分業意識を強化して、女・子・老人にさらに犠牲と献身とを要求する以外の何物でもないことはあきらかです。しかしながらこの「家庭基盤充実政策」は、世論操作の面においても、税制などの法制的な面においても、すでに着々と具体化されはじめています。

このような「家庭基盤充実政策」に対して「こちら側」の対応策を具体的に立てていくことが今急務とされています。

家族・家庭の風通しをよくするために

私なりの考えを、結論部分だけ書き記しますと、

一つには、家族構成員間の「絆」や「役割」を固定的に考えずに、従来のものとは違う新しい関係をつくりだしていく。

二つには、家族・家庭の〈枠〉を外側に広げて、従来の地縁・血縁社会に代わりうる新しい地縁社会——ネットワーク——をつくりだしていく。言いかえれば、家族・家庭の内側も外側も風通しをよくしていく、ということです。

「風通しをよくする」ための具体的な方策について、ランダムに二、三述べておきますと、

まず「内側」については、●別居結婚・通い婚（お互いに住む距離は、隣家、団地などの上下階、ひと駅離れたところなど）●お互いの親とは親族関係を結ばない●自分の親とも最低ひと駅以上の距離（スーパのさめる距離）を保つ●胎内からの男の子育て（妻の妊娠確認点から夫が胎児に語りかけるなど）●台所をオープンカウンター（対面式）にして、調理担当者以外の家族構成員はカウンターで勉強や仕事をする●「一人になれる」空間的な保障（妻・夫・子それぞれ自分の部屋あるいはスペースを確保して、それらの空間の管理運営についてはお互いに口出ししない）●「一人になれる」時間的な保障（年に数度、妻・夫・子それぞれが旅行など単独行動を行う）●夫・妻、親・子の役割交換（ロールプレイング）を時々行う。

次に「外側」については、●集合住宅内に共同スペースを要求し、保育・料理などの共同化を試みる●「共同保育」「文庫活動」など男親を巻きこんだ運動を広げていく●「人

様に迷惑をかけないように」ではなく、「困った時にはお互いさま」で、「迷惑かけあい運動」を起こしていく。

交流会の話し合いの中では、「家族・家庭の問題は、話し合い、愛情だけで解決するほどなまやさしいものではない」（飯能・柴崎さん）、「いろいろなアタックすれば家族も変わると思うが、変えるためには何倍もの苦しみを覚悟しなければ」（所沢・仲西さん）、「人間関係創造能力を身につけていく必要がある」（所沢・中嶋さん）、などの意見や、「父親が子育てにかかわりすぎると、『母親』が二人できるのでは」（三鷹・児玉さん）などの反論も出されました。

「外側」の問題については、翌日の交流会「家族を超えた新しいネットワーク作り」に引き継がれていきましたが、「内側」の問題についてもっと突っこんだ話し合いができなかったのはとても心残りです。来年は「内側」の問題だけにテーマを絞った交流会をぜひ持てたいと思っています。



家族を超えた新しいネットワーク作り

こんなことを願っていました

中 嶋 里 美

私と共同生活者の間には子供はいません。よく人は言います。「お子さんいなくなって淋しいですね。特に老後は……」と。「いいえ、私にはたくさん友達がいますから」と言ったり言わなかったりですが、まだまだ図式的な考え方をする人が多いようです。

『乳癌なんかに敗けてはいられない』、『ニューヨークで癌と生きる』等の著者の千葉敦子さんのネットワーク作りの見事さには目を見張ります。彼女はシングルジャーナリストですが、癌で入院中、病院へ手紙を

運んで来てくれる人、電話を受けてくれる人、食事やデザートを運んでくれる人、ペットの面倒をみてくれる人等を友人の中からさがします。同様に病気が回復したら自分も他の人のために何らかのボランティア活動をしようと決めています。

敬老の日に看病に疲れた五七歳の女性が、八二歳の母親を殺した事件や、毎日の新聞に父子心中や母子心中がみられますが、家族の一人一人を他者として大切にし、自分に背負えないものは行政やまわりの人やその他の機関に見てもらおうとこそ、自立への道だと思っています。

昨春秋W誌上に、西独の共同体の紹介と家庭を開かれた場とすることを提案し、多くの方々から共感を得られたことうれしく思います。春のゼミナールでは地域でのネットワーク作りが熱く語られました。他者との豊かなかわかりのためには、お互いに時間を作り出さなくてはなりません。物よりも愛にあふれた社会を創るために今立止まってみる必要があります。

こんなふう語り合いました

青山和世

私には子どもはいません。男の共同生活者はいます。一度離婚したことがあるので、そのあたりから家族について考えるようになり、多くの人と触れ合っていきたいというのが基本的な考えです。去年西独の共同生活を見たら、男女十六人がそれぞれ個室を持ち、食事はお互いに居る人が作って、たっぷりの時間と会話を、情報交換をしながら楽しんでいました。Weにお互いの家庭を解放し、宿泊所のリストを作ろうと呼びかけたら、やろうという人がずいぶんいました。また、団地の集会所などのように、公的に作らせる必要があると思うんですね。地域の人たちとかかわりは、彼が地域の自治会長をするまで、ほとんどなかったが、老後の助け合いなどについてもネットワークを作っていきたいと思っています。(中嶋)

一人ぐらしですが、整理整頓をネットワークを利用して少し軽くしたい。(青山)

障害者の病院の看護婦をしています、患者さんを見ていても、障害者の場合、家族にすがるしかない。(落合)

私は一人っ子で福井県美浜に両親がいて、将来その家と土地を少し運動という形で解放区のようにしたいと思っています。(森本)

結婚して都会に出て来て孤独だったとき助けてくれたのは、子どもの友達のお母さんで血縁はあてになりませんでした。ニューヨークの大西さんを向こうに転居する小松さんに紹介し、小松さんが向こうに着いて大西さんから住む上のハウツウを伝えられるという感じでネットワークができました。(間瀬)

区役所に勤めています。パートナーとは十三年程一緒にいますが、結婚という形はとらず、子どもは二人います。彼のほうは家事育児に違和感のない人で自然な形で共同生活をやった。家族という限られた関係だけじゃどうしようもないと思うし、二人とも人が来ているのが非常に好きなので、どうぞ来てください。(大塚)

抽象的な意味で人間のネットワークづくりに興味を持っています。(青木)

弟のパートナーが育児ノイローゼになったことから、同じ悩みの人が横の連絡をつけたらいいと思う。自分の時間、ネットワークに応じた場所の解放のしかたが必要なのではな

いかと思う。(吉田)

四年前に母を看とったが、自分の病気、老後を考え、身体
の弱い人たち、障害者の人たちはどうしていったらいいのだ
ろうと思う。私にとって地域は干渉してくるだけで、職場で
も気の合う人は誰もいない。楽しくやるにはどうしたらいい
のかも聞きたい。(永井)

一人ぐらしで気楽な反面、病気のときが心配。人につき合
うのがへたで、長く続く友達がいないので、何とかしたいと
思っています。(宮崎)

結婚十一年目になるが、夫は失業や病気やいろいろあった



人で、ストレスは私に向けられる。今私はネットワークを開
じたところで悩んでいる。(河上)

結婚して東京に来て団地妻の寂しさを味わって外に出て、
幸運に教師になった。(森)

小金井に住んで、子どもが生まれてから地域の人たちに育
てられた。来年夫の転勤でピッツバークに行くので、そちら
に行かれる方はどうぞ。(岡村)

今大学四年で、就職も進学も向かないということ、やり
たいことをやろうと思っています。女性解放、公害、環境破
壊の問題とかの話の根底は一つで、全部を一緒に見ていかな
いと必ずどこかで間違えるような気がする。そのためには、
この無駄遣い社会をまず小さなものにして、すべての人がす
べてのことを考える時間を作っていく必要があると思ってい
ます。(掛札)

コミュニケーションのあり方と、具体的には地域・団地な
どネットワークが作れるかということが共通項になったと思
います。(中嶋)

多機能な共同スペースを集合住宅の手に作っていくべきだ
と思う。(吉田)

お金のない私たちは情報ネットワークを使っていきたいで
すね。(中嶋)

思想信条は違っても情報だけは交流し合うことが、いずれ

大きな流れになると思う。(吉田)

家をきれいにするには友達を呼ぶこと。(吉田)

中嶋さんが以前こういうものに関する情報がほしいという新聞を作っていました。(河上)

今は続いているいいんです。作りたいものを作れないとか、ナイロビの影響もあって、数年後には教師をやめ、まずは所沢市議に出ようと思っています。(中嶋)

僕たちが市議などと直接話したことを情報として流すのは有効。(吉田)

区議会だよりなどに会議の日程も出ている。(丸山)

町内会掲示板に興味を持って見ている。(川名)

セクトがあつて、共修の会も大阪で一つになれない。(森)
家庭科の男女共修は、あらゆる政党・思想の持ち主とやってきて広がり、政党とかセクトを乗りこえてきたように思います。(中嶋)

「これ何なの」っていうスタイルは、人の関心を集めることができる。(若竹)

人間関係をうまくするテクニックがあるのではないかと思う。(岡村)

河野貴代美さんの『自分を変える』という本には、自分の思いを伝えて相手を不快にさせないということについて書かれている。ものの言い方は研究したほうがいいのではないか

と思う(中嶋)

——語りあいたいことは山ほどあるのに、あつというまに時間がきましたので、あとは夜に続けることになりました——



がき大将無用論

こんなことを願っていました

平井 雷太

大人が子どものために子ども集団を組織すると、何やらうさん臭さがついてまわる。だからといって子どもリーダーの養成を心がけても、うまくいかない。

かつては子どもたちのための子どもリーダーがいたという。だが本当にそうだったのか。もし、町々にいたがき大将が本当のリーダーだったのなら、彼ら自身が後継者を養成し、子ども集団は続いていたはずだ。しかし、がき大将はリーダーではなくボスだった。遊び（メンコやビー玉等）を中心に群れた子ども達の上に君臨し、力の弱い子どもを力で支配し、閉

鎖的な集団をつくり、部下の子ども達を手足のように動かした。こうした力によって支配されるがき大将集団は、今なお暴走族などに存続しているとも考えられる。とすると、子ども集団からがき大将が消えたことは、むしろ喜ばしいことなのかもしれない。

リーダーがいなくても、がき大将がいなくても、子ども達は群れて遊ぶ。必要なのは言い出しつべと電話などで仲間を集める呼びかけ人だけだ。彼らは決してリーダーにはならない。ディレクターとでもいうべき役割をはたしているのだ。遊びしかけ人とでもいうのだろうか。

子ども達が群れて遊ぶ様子を見ながら、そんな子ども達の在が見えてきたのだ。彼らには、他人のためなどという意識はない。自分が遊ぶために、自分が楽しむために、場をつくり、人をまきこみ、仲間と楽しみをわかちあう。がき大将やリーダーはもういらないのだ。

こんなふうに語り合いました

姫野 順子

がき大将も、自然発生的な遊び集団も見かけなくなつたと憂えている者としては、“無用論”なんて捨てておけない。でも気弱なわが子を見ていると、“がき大将無用”の言葉にはホッとすると、旗色不鮮明で分科会に参加しました。

昔、は確かにボスがいた。平井さんに言わせると、消えた要因に“土”がある。子ども集団があつて遊びがあつたのではなく、遊びⅡ土があつて子どもが集まつてきた。今は集団での遊びそのものが、土の上ではできない一輪車やサロンスッカーなどになっている。

消えてしまったがき大将に替わるものとして、おとなたちは遊びのリーダー養成を始めた。ルールを一応敷いてやって、その後おとなは手を引こうというのが狙い。ところがうまくいった例を見たことがない。ひよっとすると、つくろうと思うこと自体に問題があるのでは、自分の子どもを見ていると、リーダー中心の固定化した集団ではなく、その時ごとにあちこちからの呼びかけで集まってくる流動的な集団である。



昔々は、子どもはいなかった。小さいおとなとして対等な立場だった。印刷機の発明が子どもを産んだ。文字を読める者、読めない者でおとなと子どもを区別した。今はTVから情報がどんどん流される。量とすれば子どもの方がおとなより大量に得ているかもしれない。その結果、おとなと子どもの区別がなくなってきた。おとなが子どもに何かさせるのではなく、子どもとおとなが一緒にやれるような関係づくりの中で、遊びや集団をとらえていかなければならない。

と、話が理路整然と進んだわけでは決してありません。まず、「集団」に対するイメージの違い。例えば、私は子どもたちが群れてキャッキョウ笑いを響かせている情景が無条件に好きです（もちろん、泣き声こみで）。それ故に、群れに入らず家の中でコチャコチャ何かやっている上の息子の尻を叩いて追い出そうとします。群にはいれずなのか、はいらずなのかも無視して。

それに対して、集団そのものを良いイメージでだけとらえるのはおかしい。自分自身のことを振り返ってみても嫌でたまらなかった。何故その子のやりたいことをやらせてやらな

いのかと、非難集中。

話している内に、学校での状況と重なってきました。周囲と同じことをしないと、乗ってこない子が疎外されていく。通信ボの所感（というのですか？）で、おとなしいです、けれども、と、マイナスの評価しかされない。教師は、外で元気に、みんなと仲良くと常に言うが、活発であること、集団の中に入ることを重視しすぎているのではないか。

おとながこどもを見る目から話は発展し、藤武さん、榎本さんから、どうして教師はあかも平気で通信ボにその子の欠点ばかりを書けるのだろうと、内部告発。子ども会活動をずって見てきているという仲西さんからは、子ども会はむしろおとなのためにやっているのではないか、子どもたちはそっ

ぽを向き始めていると、おとなが意識的につくる集団のうさぐささが指摘されました。

結局、子どもたちを信じるかどうか、おとなが手を貸し教え導かなければならない存在と見るかどうか、ということになりそうですね。この夏、後樂園球場が中高生の解放区になっていたそうです。かれらはまったく自発的にやってきて、朝までかれらの時間を造りあげて、親も球場側も黙認している形だったとか。あそこに行けば何かありそう、出逢えそうという場そのものが失われているからなのでしょう。

話ががき大将にもどってきて、リーダーとボスとがき大将はそれぞれ違うと、西内さんが問題整理。真の意味のリーダーもがき大将も姿が見えなくなっただけで、ボスだけはまだいるじゃないか。え、どこに？ 学校に。教師は、自分が意義があることだと信じると、権力で無理にやらせ押しつけようとしてくる。ボス的な教師はもういないね、と結論が出てしまいました。

参加者わずか八名の分科会はとても和やかに、話がどんどん脱線して進み、「あ、時間余っちゃった。最後に自己紹介しようか」。平井さん、加藤由美子さんの掛け合い漫才風、子育て、連れ合い育ての話、飄々と話を引っくり返す小林さん。「がき大将」の話以外の部分の方が、面白かったみたいです。

家庭科の今日と明日を紡ぐ

こんなことを願っていました

磯 部 幸 江

「やっと、やっと、長い冬のトンネルから抜け出して、この国の家庭科にも明るい春が、手のとどくところまでやって来ています。」

私たちが、過去において、本当に確信と勇氣と連帯とで切り開き、守り育ててきたこの男女共修の家庭科のあれこれを、風化させることなく次代の方々に語りつぐことが出来たらとの願いもありました。」（森幸枝著『男女で学ぶ新しい家庭科』ウイ書房、「はじめに」より）。

私たちは、先人たちの長い歴史を背負って生きているので

すね。とかく忙しい事を口実に目の前しか見ていないのです。が。今、口に出して言うべき事を言い、やるべきことをしなければ、次の時代は――。

家庭科の今日と明日を紡ぐために、家庭科が変化していく時代背景をとらえ、どのような家庭科を創っていくかを、じっくりと話し合いたいと思いました。家庭科が、学校教育の持つ様々な矛盾や問題点の吹きだまりであるなら、風通しをよくしていこう。それは先生だけでできることではない。親として、市民として、いろいろな視点で言えること、やれることがあるはず。今こそ家庭科に声を上げていきましょう。前記の森幸枝さんも参加。背負っている歴史に軽重があるとしても、歴史は流れています。その流れを創るのは私たちだという自覚を持ち、明日からのエネルギーを蓄えられることと願っています。

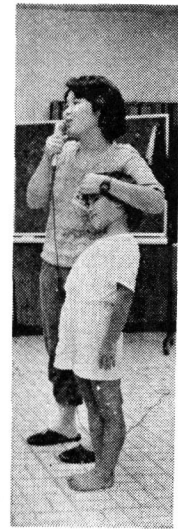
こんなふうに語り合いました

西 内 み な み

家庭科の先生を中心に29名が集い、教育課程審議会が打ち出した家庭科改訂の基本方向に対する問題点・疑問点を出すことから始められた。

教課審に要望書を出そう！

まず、「中学校での『四領域必修』ということとは、全面共学とする際にかえって弊害になるのではないか。中間まとめ発表の場で、文部省に対して『四領域以上するなということではない』ことを新聞記者に確認してもらってはどうか。また、新設された『家庭生活』の内容が、あるべき家庭像の押しつけにはしないか。高校では、いくつかの科目・領域があげられているため、男子は技術、女子は家庭といった中学校の高校版になりはしないか」という指摘があった。さらに、教育課程審議会では、高等学校家庭科この履修形態を、検討会議報告(1)案と(2)案の折衷的なものとし、やむを得ない時、当分の間「体育」等の科目で代替履修の余地を認めている、という問題が出た。「家庭科の男女共修をすすめる会全国交流集



会」が出した要望書の紹介のあと、「文部省がイメージしているような産業界の要望する『生活』ではなくて、私たちが欲しているような生活についての学習を、具体的な内容の中にとりもどす運動をしていく必要がある」という意見が出た。次いでいくつかの質問が出され、それについての意見が出された。

一、高校では、『家庭一般』だけを必修にすることはできないか。——現実論として、三つの科目が出た以上、白紙撤回されるということは考えられない。また男子校など、施設設備も全くなく、教師もいないところで、学校の体制として『家庭一般』を必修にできない現場もある。

二、中学校について——残る三領域を何にするかについては、各学校での技術科の先生との力関係で選択科目が決まると考えられる。

三、『家庭一般』と『生活一般』の違いについて——『生活一般』というのは全国高等学校長協会家庭部会の提案の中にあつた。教課審はこれを取り入れて男子向きの家庭科の性

格を与えた。

また、次のような重要な意見があった。『差別撤廃条約』の精神が全く生きていない教課審の報告ではあるが、一応女子必修の枠ははずされた。各学校の先生方が主体的にこのチャンスを活用する力量を高めることが必要である。また体育の代替措置は絶対に許してはならない。官製の研究会の場でも、参加している教師の意識を変えるために、積極的に発言していくことが大切。そして、「何ごとにも時機を逸せず行動を起こすべきだ。Weの夏季フォーラムとして要望書を教課審に出そう」という提案が、満場一致で支持され、We夏季フォーラム参加者一同からの要望書を出すことを明日の全体会に計ることになった。（原案は、実行委員会が作成する）

新しい家庭科を創るために

次に、家庭科についてこんなことをしている、こうして行きたいということが、ざくざくばらんに語られた。「家庭科の課題は性別役割分業をなくすこと、つまり男も女も同じなんだという意識を子どもの中に育てることと、人間らしい生活とはどんなものかを追求し、その中で自分たちの環境をつくり変えていくことであるが、この二つの底にあるのは生活を見つめる眼である」。

「新しい家庭科を創るために具体的に何をしているのかという昨年のフォーラムでの問いに応えるため、その後教科論と

内容との行きつもどりの学習会を始めた。そこで、現場で先どりされている情報処理技術教育の問題性等に気づき、今後とも家庭科の目標・ねらい・内容についてしっかりと考えていかねばと思った」。

「男女共修をすすめる会の全国交流集会に出たが、望ましい方向での話し合いや実践が非常に増えている一方で、まだまだ変えていくのは難しい現場が多くある。今回示された新聞記事等の情報を武器にして、要望を出していくことが重要だ」。

その後、サークルの重要性、具体的な教材のありかた、女子校・男子校での問題、商品生産の論理を否定する必要があることなどさまざまな意見・提案が出された。特に、家庭クラブの活動については、必要性がないこと、総会開催について負担が大きいこと、分担金の割当、管理職からの圧力、また現場の先生方の多くが「やらなくてはいけない」と思いこんでいること、京都は一時抜けたにもかかわらず、後に続く所がなく逆戻りしたことなど、次々と問題点が出された。

最後に司会者が、「教課審の今回出た方針についてはかなり検討できた。今後は各教師が学習と実践を地道に積み上げながら、適宜申し入れをしていくことが大切」とまとめ、その第一歩としてこの会から教課審に要望書を出すことが再確認された。

教師はふつうの人間にもどれるか

生徒と教師の関係

こんなことを願っていました

錦 真 理

「教師はふつうの人間にもどれるか」。分科会にこの題名をつけた時、私の中で「ふつうの人間って何だろう」という思いがありました。でもあえてこの題名をつけたのは、教師っていつも学校とか教育とかいうものをどこかで背負っていて、その分、一般(?)の人たちと教育関係の話をする時、平らな関係ではなく、教師っぽさで接してしまうことが多いのではないかと思ったからです。また、そういったものを背負っている分だけ、教師自身も重荷をしょっているのではないかとも思っていました。教師という鎧をぬいで We に集まっ

て来る教師たちも(私もそうですが)、やはりまだそういうものをひきずっているように思えました。それは「いけないこと」とは一口には言えないかも知れないけど、もっと楽になってもいいのではないかとこの考えがありました。昨年の夏のフォーラムにおいても、「We に集まる教師でも、やっぱり教育の問題になると急に教師っぽくなっちゃうのよね」といった声を二、三聞いていました。昨年以來、気にかかっていたことを話してみたいと思い、この分科会を設定したわけです。今、思えば、私の気持は単純で、「教師はもっと教育ってものから解放されてもいいんじゃないか」という程度のものでしたので、分科会で話された内容は、私の理解を越えてしまつて、司会をしているにも拘らず、みなさんの意見をちつとも整理できず、焦点をしぼることもできませんでした。消化不良のまま帰られた方も多かったのではないかと申しわけなく思っています。ゴメンナサイ。

こんなふうになりました

岩瀬 志津子

司会は錦真理さん。参加者は二十一名中十五名が教師で多く、教師以外は四名と学生が二名でした。

司会の錦さんから、昨年のフォーラムの後、「参加されている先生は、一般的な先生からはかけはなれているようだが、やっぱり先生なのよね。」という雑談(?)から端を発し、すべての教育をかかえこまされ、特殊な役割を期待されている教師の姿があるという話で始まり、この分科会にどんな関心をもって参加されたかから、会が進められた。

教師の発言

- ・退職しても教師の殻からぬけでなく、周囲から、一目でそれとわかる言動をする
- ・私立高の教師は、企業として成立たせるために、教師らしくなれなければ、職業人としてやっていけない
- ・自分では、教師らしくないと思っていても、学校で生活していること自体、教師のいやらしさを育てていてそこからぬけきれない



- ・教師は生徒より先に生まれた者と思っていたが、今では生徒を規則で、ビシビシたく調教師だ
- ・中学時代、荒れていて、教師に白い眼でみられた。今教師となつて、生徒と人間としてつきあいたいと思っている
- ・全寮制の私立高。管理をはずしたらこわい。生徒との関係は相対峙するところにいる。内部分裂を感じている
- ・新卒当時は生徒がよく見えたが、十数年やっている和管理が上手になつてきて、生徒の気持が見えない
- ・規則をきちんと守らせるのが良い教師というのが学校だ
- ・先生と呼ばれることが恥ずかしかったのが、いつの間にか恥ずかしくなくなっている。弱者(生徒)を処分できる側に立つたり、他人を評価したりする人間は世間では少ない
- ・教師はふつうの人間でないという前提なら、普通の人間とは、どう人間か、明確にしていきたい

どの発言を聞いても、この分科会に参加した人たちは、皆「教師はふつうの人間ではない」ということを不本意ながら認める一方、「ふつうの人間でありたい、もどりたい」という二極間で苦悩している良心的な人たちが多かった。

これに対して教師でない人の発言は実に手に負えない。

- ・教師は、「ふつうの人間でない」という実感。市民感覚に欠けている。教師からこのテーマに反論があってもよいが
- ・学校では、生徒の全人格に係わるものでも、平気で越権行為をする。単車免許のとり上げ、髪型等々の校則しかり
- ・学校は特殊な組織で、教師は優遇されている
- ・子どもを人質にとられているという親の感覚があるから教師にものが言えず、教委にすぐ言っていく
- ・教師以外の職業でも、その職業からにじみ出る「くささ」がある。「ふつうの人間とはどういう人間か」「自分らしさはどうむすびつけるのか」

この後も、「ふつうの人間」からかけ離れていると思われる教師の実態が狙上にのせられていった。

- ・教師は、権力の末端をにぎっているのでふつうではない
- ・教師はせめて「これだけはほしくないでほしい存在」だ
- ・教師は自らを教育の対象としない。自分にまわりを合わせようとする。学校は子どもが主人公。学校に依存しない子

を育てることが大切

- ・教師と対等に話し合える関係をどうしたらもてるのか
- ・教師同士のコミュニケーションもできない(教師側から)

・良心的に悩んでいる教師は生徒に嫌悪されている。生徒は教師であることの姿勢を敏感に感じとっていると思う

- ・教師は職業人としての誇りもないし、鍛えられていない

なごやかな雰囲気の中にも教師に対する鋭い批判は、一つ一つ心の中に浸み込むものがあり、あまり反論がない。

「教師とは何なのだろうか」「それぞれの自分らしさにもどれるか」これがこの分科会のテーマだったことを再確認。子ども達の世話でおくれてきた学生の渡辺さんが、教師は自分を特別視している。意識しすぎているのに、教師と思われたくないというのは矛盾しているという発言が印象的だ。

どの職業にも自分の仕事に疑問を感じない人には、「くささ」が出てくる。「ふつうの人」とは、「人と権力の関係で、権力側にいないことではないか。自己否定をかかえこんでいるかの度合で決まるのではないか」という元教師の武田さんの発言が、この分科会のまとめになったように思う。

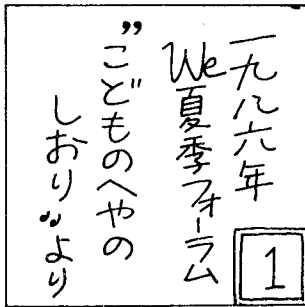
(録音の不手際で聞きとりにくいところがあり、意見のせられなかった人がありましたことお詫びいたします)

5、他者との豊かなかわりをひらく

子どもたちと共に

こんなこと願ってました

中野敬子



質についてかなり熱心に検討しました。根本は、大人についてきたお荷物的存在としてではなく参加者として子供を迎えたいという姿勢でした。楽しい時であることを願って”縛らないこと”をていねいに考え続けてきたわけです。

思えばフォーラムはもう五回、ゼミナールも四回を数えます。初めてのフォーラムから子供も一緒でした。三回目のフォーラムでは「保育」の

事前にスタッフは何回も準備会を持ち、下見もして計画を立てましたが、スケジュールびつしりというのではありません。また一コマの活動の中へも、子供全員を入れ込もうとはしませんでした。子供とスタッフとの初行動は、思いがけず枕投げ、蒲団投げ、人間投げ(?)から始まりましたし、眠りかけている子の横で即興お話し会があったりもしたのです。そして、子供たちはこの二泊三日を大いに楽しんでくれたようです。参加者の中には、お子さんの生き生きした姿に感動されて、来年の子供係を申し出て下さった方もいます。

ところで今回の子供係のスタッフは過去最高の一三名でした。五月号の「わんぱく夏祭」の若者、春のゼミに参加された「男の子育てを考える会」のメンバー、地元の高校生他です。一方参加した子供もこれまで最高の三八名でした。

今回は子供に保険をかけました。幸い大きな事故もなくうれい限りですが、次回はスタッフにもかけるかを考えてみましょう。みなさんどうもありがとうございました。

野外の昼食はおいしかったでしょう

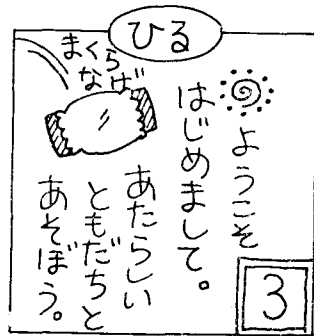
大 杉 洋

Weの夏季フォーラムは初めての参加だったが、実行委員会の集まりにでていたため、「これは何かやらないとまずい」という気になって、結局二日目の野外の昼食の担当を受け持つ事になった。最近とみに増した楽天的な性格から気軽にひきうけた。が、持ち前のルーズさのため中身を煮つめる作業は、フォーラムの間に、いっしょに「子ども係」をやる人たちと電話で話したり、会って話したりして決めていった。



もともと、決まった内容、やり方などなく、若干イメージしにくい面もあった。しかし、話していくうちに、基本的には子どもたちで午前中に準備でき、大人もただ食べるだけではなくいっしょに楽しみながらやる、といった点からやきそ





ば、焼サンドイッチ、おにぎりの三本立てのメニューに決まった。

話の中で、はしや皿は竹から作ろうだとか、残りもの風スूपスペシャルをつくろうとか、焼きサンドは子どもと大人といっしょにつくろうだとかいろいろで

たが、調達できなかったり、時間的な余裕がなかったりで、できなくて少し残念だった。

さて、フォーラムが始まって子どもたちといっしょにいると、子どもたちは思っていた以上に生き生きとしており、明日の昼も心配ないと思った。当日の朝、ややあせりながら子どもの部屋にいくと、習慣化した(?)枕投げの歓迎にあり、こちらの方もついていねいにこたえてしまったりして、準備の方はとりかかるのがおくれたしまった。場所は、森の中のやや傾斜のある所で、子どもたちはそれぞれ、段ボールを宿舍から運んできたり、テーブルの上でやきそばにいれる具や、サンドイッチにはさむ野菜をきったり、かまどに火をつけたりで、遊びながらつくっている。

焼きサンドは、厚めのパンでサンドイッチをつくり、それ

をアルミホイルで包んで牛乳パックに入れて、それごと燃やすとパックが燃え尽きる頃には出来あがりという、至って簡単なもの。牛乳パックは参加者にとってきてもらったが、説明不足で細長いよく売られているものばかり集まってしまう、発案者と顔をあわせて一瞬の後、思わず笑い合ってしまった。やきそばの方は、泣き泣き玉ねぎを切るのに時間がたったりしながらも、全体会が終わる前には、焼き始める事ができた。最後にいれようと置いてあった卵が、ビニール袋の中で割られてシェイクされてたりというアクシデントもあったが、準備の時は大人も何人か来ていっしょにやったので、ワイワイしながらも早くできた。

そうして、野外の昼食会が始まった。味の方はなかなか好評だったようで、弱気でたくさん量をつくらなかったせいもあって、やきそばは列が絶えなかったし、焼きサンドはあつという間に売り切れてしまった。これなら量を増やして、多少大人の人にもつくってもらうのだったと後悔した程だった。一瞬スリルを味わったのは、ガス管の上で焼きサンドが燃えているのをみた時だった。子どもたちは、食べ終わった後もじっとしていれなくて、火の周りに集まったり、何かしている。

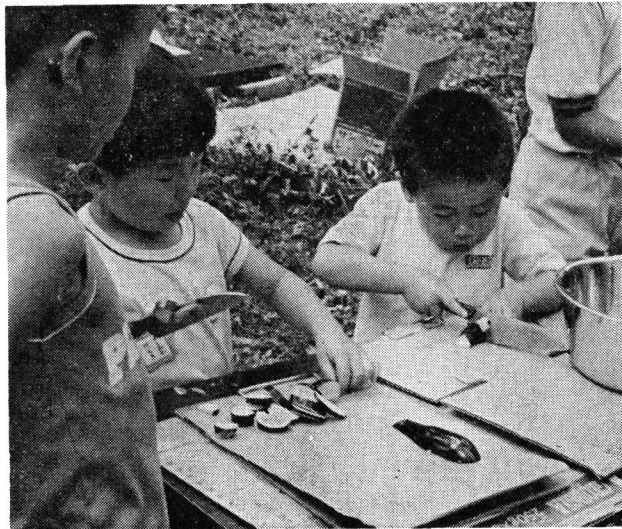
野外の昼食会は、まあまあよかったようだが、大人の参加者は、ごちそうされにきましたという風で行儀がよかったの

が印象的だった。後片づけの中で発見だったのは、うっかりして洗う道具は何も持ってこなかったのだが、さんざん汚れた鉄板が、かまどの灰と、土できれいになった事だった。

さて、子どもたちといった事を通じて、今回のフォーラムを自分なりに思い返してみるとどうだったろうか。自分の中に、フォーラムというもともと一過性のイベントに、どう参加するのだろうという気持があり、「自分らしさをこそ——他者との豊かなかわりをひらく——」というテーマの難しさを感じていた。そのうちのいくらかは、実行委員会に参加していくうちに、ある程度の確かなものを自分が感じられたのだが、正直いって子どもに対しては、行く前まで全く自信がなかった。実際に行ってみると、子どもたちは、自分よりはるかに自由で生き生きとしており、圧迫されてしまった。



今ふり返ってみて、子どもたちのかかわりから感じたものは、決して他の参加のしかたをした人に劣らないという思いがある。書いてみてずいぶん一方的な思い入れだと恥ずかしくなるが、正直な感想である。今回は子ども活動を充



実させようという事で、「子ども係」になってわりと子どもという事が多かったが、楽しくすごせた。しかし、その楽しさはフォーラムの場という限定つきで、どうしても残るものがある。自分としては、今回のテーマをもっとふくらませていこうかと思う。

アイディア満点、野外コース

ごじらりようこ

私は、実行委員会へ出席して準備のムードをずっと見てこられたことで、本番の2泊3日をとぎの延長上に意識した数カ月間がすごせました。もし今回の参加者の中に

「今日は山梨に行きます」

って突然知らされて来てしまった、みたいな人がいたとしたらと想像すると、比べるまでもなく

「ずーっと知って良かった。あー良かった」

と思えるのです。私が幼いとき、私の両親は娘の誕生日やクリスマスや子供の日のお祝いを、私の側からすると唐突にやってくれました。当日いきなり、よりも、長い間ワクワクしたかったからやな感じでした（毎度ではなかったけど）。集まってくる小学生や幼児たちが、これからWeのフォーラムというところへ行くんだな、という気持ちの用意をするのに少しでも役立つように、との意味を込めて「こどものへやしおり」が編集部から郵送されていました。

小さな参加者一人一人には、8月の9・10・11日にWeの夏



季フォーラムという所へ自分の保護者が参加する・しないの選択肢は与えられていない場合がほとんどだったろうと思います。ですが、富士研修センターの中へ一歩踏み込んだらその瞬間から、独立した、「一参加者」と見なされました。

フォーラムでは、参加者すべてにこどものへやしおりを配り、かれらとのかかわりを、と訴えかけたりしましたが、まだまだ確認と建前で終わってしまったな、という感想です。こどもスタッフめいた固定メンバーが存在していて、他の人達を安心させてしまつて（マイナスの意味で）いたのかも。次に書くのは、メモに書き出して読み返してみたとき、ひどいワガママな内容に思えるから書くのやめようかと思つた文章なのですが、これを本文中に含ませないと私の右手は次に続くマスを書き進まないから以下に記そうと思います。

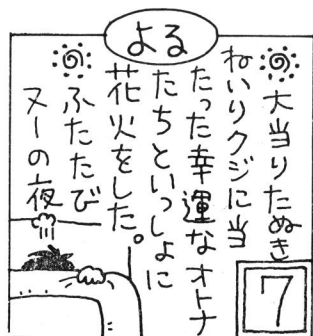
……私は二日目に分科会をひとつというお話を承けたから、そうすればいいのかと思っていました。分科会の準備だけを持って現地入りし、オーブニングに引き続いての村瀬さんの



講演を聴き、夕食がすんで夜になったら交流会の場で、いろんな興味深い話をせつせと仕入れている自分の姿が目につかぶようでした。ところが準備の段階で具体案がみんなから提案される気配もなく、そのことに大きな疑問を抱きました。それを発言するのすら滑稽な行為に思われてきました。迷いながらも動いてしまっているうちに、「ごじらは子ども担当」と見なされていたのは正直言って心外だったのです。……

目前に展開している事態は事実なので、事態の要求が読み取れた場合、その求めには応えなければ他の動作へ移ることはできない。だから、それが私の参加の要素の一つだと認めました。決して開き直らされたのじゃなく、行くからには、いい体験の一つにしたいと思ったから自分のフォーラム参加の意義を小さい人たちの関係に置くように開き直りました。

全国から集まってくる小さな人たちも、参加したからにはなるべくいい記憶の一つとして未来に残るようなことが2泊3日の中で体験できるといい。ではどうすれば？ と、しばらくの期間、ときどき、くり返し考えていました。で、結局



と思つて異常なまでにはしゃぎつづけていました（でもこの末期症状を超すと絶対目を開けていられなくなるのです）。そして到着。オープニングもそこそこに、ごじらが、とある部屋の押し入れで、夕食5分前にあらかじめ頼んでおいた親切な人に起こしてもらうまで眠りこけていた事実を知る人は少ない。

フォーラムへ参加してくる人たちの参加の姿勢が、小さい人たちと向き合うということを、子どものめんどろをみる、ととらえる限りにおいて、この自分には「ワタシって、コードモたちと一緒にすごしていただけるだけで満足なんです」っていう可愛いセリフは言えないな、と感じてしまいます。

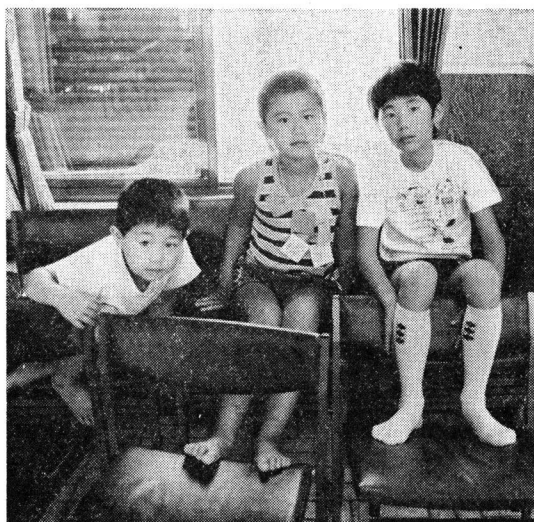
どうしても小さい存在をおまけ扱いしてしまう全体のふんいきこそぶつかるべき抵抗感を、分科会などへ抜け出すとい

8月8日、つまり前日の午後には小道具（画用紙・テープ・お菓子etc）の買

い物で、夜は父の会社でコピー機にはりついていて、空が白むころ荷造りをしていたりしたもので、往きの混雑した車中での私は、眠いなどと考えては終わりで

う、実益と重ね合わせた形に込めてしまったことを否定できません。参加者としての自由にうしろめたさを感じることはないような体制があるべきだったと思います。

しかし、小さな人たちと過ごす「時間」には理屈ぬきの良さがありました。分科会への魅力に十分勝るものが、私には体験するまで見えてなかっただけで、とても楽しめました。それはそれだし、また、これはこれなんでありました。



2日目 午後の

野外フクロクワラム 分科会

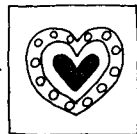
●あらかじめ、宿舎と周辺の地形を利用して色分けされた6つのコーナーが設置されている。
でも、参加者には、場所の詳しい説明はしない。

スタート地点で、1人1人に70cmくらいに切った麻ヒモを配る。うけとった人びとは、それを輪状に結んで首にかけて準備完了。各コーナーを終えることにももらえる、マーク入りの色画用紙の切れはしを首かざり(麻ヒモ)にボンドで接着してゆき、全部まわると、6色のかざりのついた首かざりが出来上がるという寸法。



★捜すヒント…上の方によく注意してさがしてください。
★ばしょ…研修センター屋上
★担当者…金子

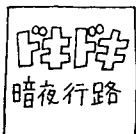
赤は
パズル



★捜すヒント
…坂の上の方？
★ばしょ…暗夜
行路のとなり
★担当者…まきりん
(花井)

だいたい色
は、
ふくを作る
ところ

でかいポリ袋とテアとはさ
みを使って、ちぎる勝手に
ふくを作りました。



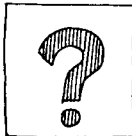
★捜すヒント
…坂道を
のぼっていく。
★ばしょ
…宿舎を見
おろせる、ちやう

きょうは とても あついで
ジュースを あげる

組み立てると上のような文があらわれるカード
(文節ごとに色分けしてある。)が、バラバラに
伏せてあり、それを表に返してパズルを解くと
おねえさんが、ジュースとポップコーンをかくし
場所から出てくれる。

白は
暗夜行路
かんやこうろ

と高いところ。★担当者…渡辺、関口(彼女は
地元の高校生)
数本の木の幹に、すずらんテア(たてにさける荷ぐ
くりヒモ)を張りめぐらし、ひとは目かくしをして、手
さぐりでテアをつたてずむ。ゴールまでの間
には、ありもしないのに「落とし穴、掘ってあります」
だの、平らなのに「足元注意」だのといったおどし
にであう。途中、くすみの入った袋が下がっていて、さ
わって言い当てたらプレゼント！ ジャリ石でコンコン…



青は、トレジャー・バック

★捜すヒント…坂をくだ
たところ。
★ばしょ…センターの向かい側
に位置する、一段下がった林の中。
★担当者…ごじろ W リょうこ

みどりいろ
は
自然観察

★捜すヒント
…ヤキノバ
★ばしょ
…お昼ごはん
を食べたところ



★担当者…森本直樹子。

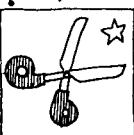
植物図鑑の付録ページから、ごく簡単な分類
表図をコピーしたものを配いた。
『なにかめずらしい虫とか草を見つけて』

きいろは
クラフト

★捜すヒント…上を見ながらあるいて
ください。
★ばしょ…屋上⑧
★担当者…米良、大杉、高木



あえて言ったわけじゃないけど、**かくれテア**
として、やり方が
わからない
人に説明で
きたら特別
シール！
○自然と共に…緑
○チャレンジ…赤・白
○他者との交わり…青・人に教える
○自己開発…だいたい・きいろ



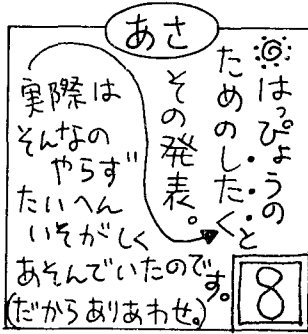
ウイのフォーラム おもしろかったよ

元気がいっぱいの子どもたちが

三十八人!

さあ、きみたちはどうだったかな?

- 1、おもしろかったこと
- 2、こまったこと
- 3、こんなふうにしたらいいになっておもうこと



うるさいことがたのしかった

たんばら まい (3歳)

おやまのぼりがいちばんおもしろかった。やきそば、おかず、おねえちゃんとおさんだこと

にいうち しおん (3歳)

とらんぷであそんで とてもたのしかった。おともだちができた

もり まきこ (4歳)

1 ふとんなげが おもしろかったこと

2 なかなかねむれなかった

すぎもと ゆき (5歳)

1 花火をしたこと。みんなとあそんだこと
みんなでおりようりを作ったこと。クイズをしたことがおもしろかった

2 ない
大角 めぐ美 (7歳)

1 まくらなげ

2 ない

3 ない

くわはた よう一ろう (7歳)

1 まくらなげをやった。

2 とくになし

3 もっとひろくて ほとんどのあそびができるといい。もっとごはんがおいしいほうがいい

坂上 智己 (8歳)

1 ハイキングで、がけのぼりをしたこと

2 なし

3 来年は まくらなげを いっぱいしたい

川名 光生 (8歳)

1 おふろにはいったこと

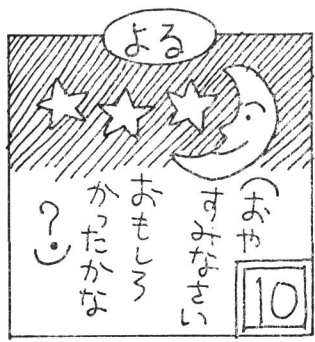
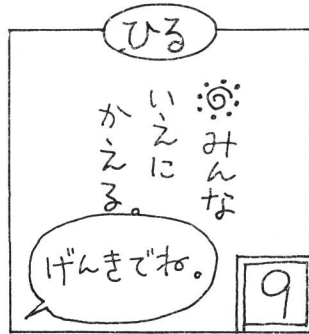
2 ない

3 むかしばなしの本があったらいい

青木 れい (8歳)

1 10日、いろんなところをまわって、おも

2 うわっはっはっは、何と言ったって、にしろかったです。あんやこうろで、と中、くるみをもらえた（今でももってるよん）のがよかった。新しい友だちもできて、よかったです。まくらなげせんそうで、はじめきようはくじようのやりとりが（こうふくしろっていうので）おもしろかった。



くたらしい男どもがいたからだ！
3 まず、本やあそびどろぐをふやすこと。もつとたくさんの友だちがくること。もつと、とまる日を多くすること。（もつと、たべ物を多くすること。じょうだんですよー）

藤武 美礼（9歳）

1 クラフトがおもしろかった
3 友だちにしんせつにする

磯部 由紀子（9歳）

1 夜、友達とねることや、友達とおにごっこをしたりしたこと
2 たまねぎをむくとき、なみだがでてこまった。
3 わからない

戸張 くに子（10歳）

1 トランプのかけ。男子—女子のまくらなげ
2 みんなにとういか、男子のほとんどにガムをパチられた（ぬすまれた）
3 もうすこし、あそぶものをふやしてほしい

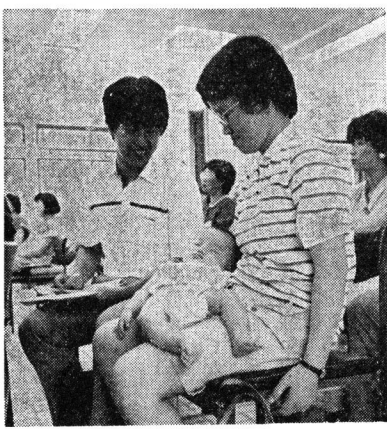
大東 知津子（11歳）

1 まくらなげ。はなび。オリエンテーリングみたいなもの
2 一日めにかぜ引いた
3 きもだめし

大東 範行（12歳）

1 トランプをしたこと、やきそばを作ったこと（切るのも）
2 なかった
3 アイスクリームが自由に食べれたらいいなア！

大東 真佐子（12歳）



6、こんなかわりもひらいて

早朝ミニハイク

渡 辺 千 津 子

地元のスタッフということで、この早朝ハイキングの担当となりました私「ちーちゃん」がこれより皆様を『富士山の美しく見える所』へと御案内いたします。――

八月十日午前六時。天気は上々、集合場所である宿舎玄関前広場にはおよそ四十人ほどの人々が集まっていた。昨夜はぐっすり眠れたらしくもう元気に走り回っている子供達、まだ寝足りなくてあくびをしている大人、そして田舎の朝の空気を存分に吸い込み清々しい顔をしている人達。皆さん昨日は遠方からいらしてお疲れでしょうに、朝早くからこんなに多勢集まっていたいて……本当に御苦労様（はつきり言っている人になるうとは思っていなかったので驚きました）。

さて、まだ来る人がいそうな気配なので少し待って六時五分。一行は目の前の山道を登り始めた。道は舗装もしていないし、まさに山道と呼ぶにふさわしかった。道々草や花に興味を示している人もいれば、登るだけで精一杯という人もいる。子供達は専ら宿舎から連れてきた猫と遊びながらの道中だ。

途中この描ががけを登って草の中に隠れてしまい、かわるがわる猫を取りもどすことに奮闘する場面もあり、猫が早朝ハイキングに花を添えたとも言える。子供達は必死になって三メートルくらいのがけを競争のように登り、大人はそれを楽しそうに、暖かく見守っていたり、あるいは「こっちから登った方がいいわよ」などとアドバイスしたりして、しばらく劇を観ているような気分だった。かれこれ二、三十分も登っただろうか、右にカーブして少し出っ張った所で後を振り向いた。今まで木々のこずえに隠れて見えなかった富士が霧のヴェールをかぶって立っていた。少々富士山についてのガイドをし、気分的にもう少し登ろうか、ということになり正



面から富士を眺められる所まで行った。ここで並んで記念写真パチリ。五分か十分くらい自由時間を取り、富士山に登るときの話などをしていうちに霧が流れ、富士山がその姿をあらわにした。

やがて一行は朝食に間に合うように山を下り始めた。登りよりもかなり楽に短かい時間で下りることが出来た。精神的にも余裕が出来て皆、思い思いの相手と和やかに会話しながら歩いている。玄関前の集合場所に帰ってきた時間はまちまちだったが、とにかく皆さんお疲れさまでした。――

いい気分で情景描写風に気取って書いてみましたが、ハイキングは実際こんな感じで行われました。でも担当となったので下見に行った時には参りました。いくら地元の間人とはいえ、近くではないので下見の時に初めて行ったという状態で、何にも分からず(担当になっちゃったけど大丈夫かなあ)と思ったりしました。それでも宿舎の人から聞いてハイキン

グコースを頂上まで行ってみたらまあ何とも言えず、まさに登山。頂上まで行くのはあきらめました。頂上までは登り一時間、下り四十分ほどでかなりきつい山道でしたが、今回はその三分の一くらいの距離までにしました。

下見の時点では、どれくらいの年の人が何人ぐらいくるか見当もつかなかったもので、はっきり目的地を決めるでもなく、また、もし子供が多いようなら下って近くの公園まで行こうか、などとかかなり柔軟に計画を立てました。結局登る方を選びましたが、富士山もちゃんと見えて目的を果たせて良かったと思います。

ハイキングはフォーラムの中で貴重な(?)野外プログラムなので参加者もかなり多く、久しぶりに自然の中に入って新鮮な空気を味わった方もいらっしやるのではないのでしょうか。もしこんなおんびりした田舎の気分には御満足いただけのなら、担当した私も非常にうれしいのですが、皆さん、どうでしたか?

これを読んで、参加した方々はその時のことを思い出したり、また参加されなかった読者の方も一緒に語りながら山歩きをしたような様子を想像されることがありましたら幸いです。あまり出来の良い文章ではありませんが、こんなところで失礼します。

来年のフォーラムまで皆さんお元気です。

やってみませんか からだのかかり

藤 武 礼 子

フォーラム三日目の朝は、さすがに前夜までの熱のはいった話し合いの疲れがでたのか、さわやかな朝の空気を吸う人の姿もちらほらというところ。富士山を見に行くという元気な親子づれに、「おはよう！」と声をかけて、朝はとても弱くて頭の回転もにぶい私が会場にあてられた大会議室に行くと、何と、元気はつらつ、目もぱっちりとした子供たちが四、五人先に來ていて、何をするのかなあ！ という感じで私を迎えてくれました。九歳の私の娘は心配そうでしたが……。

さっそく窓を開けてさわやかな風を入れるのを手つだつてもらい、イスも窓ぎわに寄せて会場づくりをする頃には、子供たちのお母さんと大人たちも集つてきて、みんなとてもはつらつとしているのには驚かされました。

半田さんはすてきなショートパンツスタイルで、前日までの疲れなどみじんも感じさせないのはさすがです。

寝不足で冴えないのは私ひとり、みんなに「そろそろ始めましょう！」とせかされてからだほぐしとリズム体操のはじ

まり。音楽は喜多郎のシンセサイザーで静かにゆったりと。本当は二階にあるベランダで緑の木々とつめたい朝の空気の中で、寝ころびながらのびのびとからだを動かしたかったのですが、周りの柵がこわれていて、さわると下に落ちるという怖いお話だったので、やむなく会議室ということになりました。なかなかステキなベランダでしたが……。

近頃は生活の中では、だしになることがほとんどないので、つめたいタオル張りの床ではあるけれど、参加者の方々には、だしになつてもらい、足で感じることから始めました。

は、だしでとんだりはねたりするには、木の床が一番良いのですが、町や学校の体育館以外ではこういう床を使える施設がほとんどなくて残念です。

は、だしになつて運動をすると、先ずふだんくつ下やくつの中にとじ込められている五本の指を充分に開いて全部の指を使うことになるので、脳をはじめとして全身に刺激がいき、特に内臓諸器官のはたらきを活発にするのに役立ちます。

ヨガではこのことから、まずはじめに足の指を動かし、次に足の裏全体を指圧します。立ったままでは大変ですから、床やタタミに腰をおろして、Weの読者の皆さんも今日から始めてみませんか。

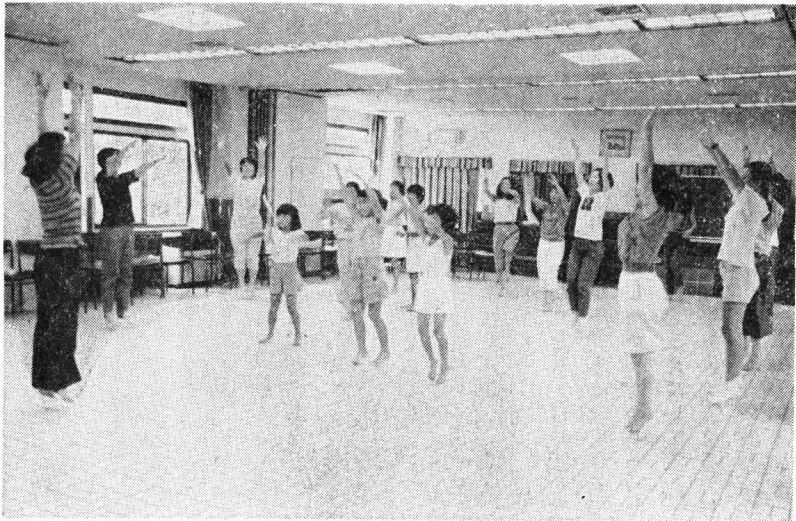
ちよつと説明が長くなりました。子供も大人も皆、さつとはだしになつてくれたので、さっそく足の指を動かし、指圧

をし、座ったままのストレッチ体操から、立ってストレッチという順序で音楽をリズムカルなものに変えながら続けたのですが、一緒に動きながら「いいなあ」と思ったことは、ここにこしながら動いていることでした。子供も大人も、からだを感じるリズムに素直に従って、気持ちよく動けるということとはとても大切なことなのです。なぜって、自分のからだと仲良くなるからです。そしてそのことがあつてはじめて他者とも暖かいかわりがもてるのですから。

“からだが語ることば”って、とても正直です。

さて、そのからだとかからだの触れ合いを、一連のからだほぐしが終わったところで始めてみることにしました。

最初向かい合って両手をたたき、両手を合わせ、次にちよつと横を向いてピノキオのような動きをする。次に両手を顔の前で左右に動かしながら、からだも右、左と二人で顔をみつめ合ったまま動く、という一連の動きを踊る相手を変えながらくりかえすコミュニケーションダンスですが、一曲終わる頃には、大人も子供も、「疲れたあ」という感じで、ちよつと汗ばんでいました。楽しみながら、仲間と触れ合いながら、からだでおしゃべりできたら、と思つて準備はしてきたのですが、ほんのひと時、楽しい時間が持てたかしらと、気がかりです。



ゆっくり楽しく生きようよ

八 島 紀 子

夕食の後、一息ついてから、五、六人集まって、ゆっくり楽しく生きていくには、どんな暮らし方があるのか話し合おうということになり、一人一人が自分の生活から、話題を出し合っていました。

中嶋里美さんが口火をきり、今の暮らしを少しでも楽しくするには、あせらず、ゆっくりした生活がいいのではないかなあ、それには、どんなことがあるのか、みんなでいろんな生活の形をみつけようと提案しました。

吉田清彦さんが、毎年毎年、より高い年収を目ざして生活をアップさせようとしているのを逆に国民全体が、毎年毎年、年収を下げていく生活をしてみるとどうなるかを考えたからおもしろいのではと話されました。きっと、ずいぶん、暮らし方に変化が現れるのではないかということです。彼自身の生活についてもくわしく話をしてくださったので、みんな興味深く、根掘り葉掘り聞き出しました。

吉田さんは、月の生活費を約十万円とだいたい決め、食事

は全て手作りで、外食はめったにしないそうです。買い物は、まとめて一週間分買い、野菜は、残さず全て料理をし、魚も安い物を調理法を工夫して絶対無駄な使い方をしない、と。

私は不思議に思い、細部にわたって聞き出すと、家賃二万六千円、一度の料理は、三日間で食べきれるように考えて作る。衣料費はゼロ。これには集まった人たち（後に人数が増えた）から、質問がいろいろ出ました。過去に買ったものでまかない、衣服はほとんど買わずに済むというのです。そういえば、私も衝動買いで買ったＴシャツなど、一度も手を通さずタンスの奥にあったような気がする。母が「同じような物をまた買って」と私に言ったように思う。無駄な衣服が、たくさんあるように感じてきました。コマーシャル等でかなり買わされているのでは、と考えてしまいました。確かに、次々と企業に利用されている部分があるように思いました。吉田さんのように、自分のペースで、自分流の生活をしていけば、あくせく働かなくとも、自分流の生き方があるのだと思いつつ、でも、何か不安も心をよぎるのです。彼は、貯金八百万円（過去に、しっかり貯めてあった）の利子が、ある程度、月十万円の生活を支えていて安心感もあり、調理関係のライターとして仕事も入ってくる。私のように学校にだけ通っていて、他に何もできない者は、全てに共感できないのだけれど、でも、やっぱり今の生活はおかし

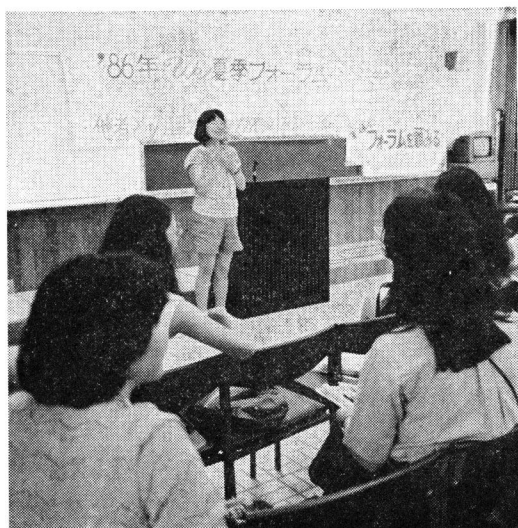
い。

毎日、学校へ仕事に行っている時は、はっきり言ってくた
びれる。現在、研修で、ちよっぴり学生気分なので、忙しい
けれど楽しい。面白い。楽しいということは、自分の知らない
ことを知ったり、やったことのないことを体験（糸を染め
たり、織ったり、ファッションショーを見たり）したり、新
しい人間との出会いがあるからだ。そして、自分からやりた
いと思って、自分で決めて行動していくことは、おもしろい。
仕事の上で、やらねばならない、やらされるとかいうこと
は、つまらない。おもしろくない。そんな気がする。

そして、もう一つ、ゆっくり生きるってことは、自分がし
っかりしていないと、なかなか難しい。自分のペースでやれ
ば、ゆっくり生きれるかというと、世間のペースに引き込ま
れたり、不安に陥ったりする。吉田さんのようにマイペース
にかなりの自信があれば良いのだが、なにせ、ちよっと心配
がちな人間にとっては、まあ、人と同じようなことをしな
いと、かえって生活が楽しくなくなるのではという気もしてき
た。

そんな思いも持ちながら、話し合いは終了し、部屋で蒲団
に入ってから、次のような話を聞いた。「エスキモー商法」
という言葉。これは、企業がエスキモー人に冷蔵庫を売りつ
ける時、営業マンは、おいしいビールを最初に飲ませて、ビ

ールがおいしいのは〇度。そのために、冷蔵庫で温度を調節
して、飲む、ということらしい。この話を聞いて、私たち
の生活は、企業に利用されたり、他人に左右されたりしてい
るのではと、改めて感じたのです。この夜の語らいや吉田さ
んの生活ぶりを聞いて、少しは、自分の生活をみつめ直そう
と思いました。やっぱり、自分流が一番みたいです。



児玉さんと語り合つて

森 本 邦 子

フォーラム二日目の夜、夕食後、入浴をすませ、外へ出てみた。空を見上げると無数の星がまばたき、高台から見おろす下界は、民家の灯が天上の星座を写し出したように、きらめいて美しかった。

私は、海辺の波打ち際にいて、ひたひたと寄せくる波、返す波に身をまかせて浮遊する時のように、心地よかった。

「来てよかった」と、声に出さない言葉が胸に溢れて、充ちたりた歓びでいっぱいだった。

「こんな人に出会いたい」と思う人に、まとめて会えたこと。また、かつて高校時代に、学び舎を共にした児玉さんと再会し、語り合えたこともうれしかった。

午前中、児玉さんの講演を聴き、Weが送られてくるたびに、真先に児玉さんのページを開き、毎度涙が溢れたこと。

私に涙を溢れさせるものは何か。その正体をどうしてもつかみたい。そんな思いが、このフォーラムに参加する直接の動機でもあったことを思いかえしていた。

その連載が、『若いいのちの像』という、青春の激動の中で躍動する高校生への賛歌としてつけられたであろう題名で、一冊の本として世に出たのを知った時、「この本を一人でも多くの人に読んでもらいたい」、いや、そんな願望のかたちより、私の知っている人には、「読んでね」とおしついたり、「読め」という命令形にすらしたい気持で胸が高鳴った。

児玉さんは、理性の領域の冷静さで、刃物のような鋭い物差しで、自分の位置を正確に計った上で、生徒の話を心から聴き、彼等のありのままを「受容する」という難事業をされたこと。児玉さんにとって、どれ程の心の葛藤と統合というつらい作業を伴うものであったろうと想像する時、私はただ、脱帽せざるを得なかった。そして、悩み、悶えるいのちの様々な姿を繰りひろげて、やがて、大空に方向を見定めて飛び立っていく若きいのちのドラマを、見せられる度に、私自身の生き方をもゆさぶられて、感動の涙をこぼしたのだった。

だが、心地よい夜風に吹かれた後に、「児玉さんを囲んで」という部屋での四時間余りは、私の多少感傷的な酔い心地などふつとぶ程の、重いものだった。

最初、四、五人の参加で始まったのが、夜も更ける頃には十数人にもなり、緊迫した話が延々と続く有様だった。

「自己紹介をかねて、今かかえている問題を話していきませんか」と、最初にありきたりの呼びかけを私がしたばかり

に、若い先生達が、次々に、学級の中にかかえているいわゆる問題の生徒の扱い、管理教育をする学校での自分の位置についての悩み、職場での人間関係に格闘する人、各々が、一篇のシナリオになる程の厚みで語られた。

参加者は、もと教師である私を除いて、全員が現場の教師という立場の人ばかりだった。

「なぜ、教師と生徒という関係が、管理し、それに反発する関係になるのか。教師が、異世代の生徒に対して、無意識に、抑圧者になっていく心の構造を、心理学的に説明する研究こそなされるべきではないか」という児玉さんの発言に、私はとても共鳴した。

さらに、もし、最初から、そういった、教師と生徒の無意識の心の流れといったものがテーマに選ばれていたら、もっ



と違った方向に話し合いが發展したのではと悔まれた。

翌日、全体会での発表のあと、吉田清彦さんが、「誰を囲んで」という発想は教師的ではないか。「誰か」と、「囲む人」は水平ではない。対話によって新しい自分を創造するには、位置関係が同じであることが条件だという発言をされた。

児玉さんを「囲んでしまったから」、児玉さんに、何かを教えられたという態度で皆が発言したのであるか。

午前中の「流れ」とらえる人間関係」と題する児玉さんの話から發展し、自らの日常の人とのかかわりあいの方角について、気楽に話せる雰囲気づくりをするべきでもあった。

「相手を受容することによってどこまで自分の実像に近づけるか」「あるがままを見つめようとしないで、見たいものを見ようとすると人間の弱さはどこからくるのか」等を、カウンスリングの実践者である児玉さんを仲間にて得て、もつとつっこんだ話ができたらと、今も悔いが残っている。

私達は複数で対話するという方法を、心を交流させる話し合いの場としての集会に参加する経験を、まだ歴史的にも浅いものしか持っていないのかもしれないと思うのだが……。だからこそ、仲間が集まり、泊りがけで、日常を共にすることから、人との交流を深める夏のフォーラムの意義がよくわかったというのが、この夏の私の最大の収穫だった。

森さんと語り合って

村岡洋子

家庭科の男女共修がきまった。その必要性は、一つには、現在の子供達の暮らしの中から、自分の頭で考え、手足と体を動かして生活し成長して行く能力、あるいは、その力を育てる教育が失われつつあること、二つには、家庭生活は男女が共に、くらしといのちをいとおしむ人間同士として、性役割をこえて、協力し育てるべきもの、という二つの認識からとらえられて来た。家庭科に対し、各方面の人達から、膨大な期待や課題が寄せられ、共修への大きな推進力となった。が、いよいよ現実に、家庭科の教科論と具体的な内容を創る重要な仕事、家庭科教師にバトン・タッチされた。

交流会・分科会で家庭科を紡いだあと、多くの魅惑的なテーマをふり切って、なお、「この指とまれ」で家庭科を語るうとする参加者の胸の中には、この重さが抱かれ、部屋の空氣の中には、どこか「囁」とした感じが流れていた。

森さんのお話も、主として、京都の共修がめざした教科の内容についてであった。

教育原則として、男女平等、特に家族・家庭責任の平等を追求し、教科論として、その本質を「生活の科学的認識」、独自性を「生活（くらし・いのち）と科学を具体的・実践的に直結させていく」ことに置いたこと。教科内容として「生活と家族・生活と経済・生活と衣食住」の三本柱を建てたこと。

十年後の昭和五七年度改訂にあたっては、家庭生活の機能の乱れや、そこに根ざす子供達の問題の深刻化の様相の下、現代の家族生活を基本に据え、「家庭生活の営み」を「家庭生活のしくみ」としての枠づけとのかかわりで、しっかりと把握することの重要性を考えて、この二本柱に発展させたこと。

京都の共修実現への歩みには、二つの特徴がある。一つは、男女ともに学ぶ家庭科にふさわしい教科内容を研究し、指導用資料や副読本を作成したこと、もう一つは、府下公立高校の家庭科教師の総意として、各ブロックごとに討議を重ね、共通理解を積み上げて進められたことだ。取組みの量的質的エネルギーの膨大さ、見事な成果に感謝は惜しまない。しかし、多かれ少なかれ、まわりの家庭科に対する無理解や思いこみにぶつかり、生徒の指導に悩む若い先生達には、遙かな夢物語を聞くような、とまどいと「かなわない」という気持が先にたつ。

それを敏感に感じ取った半田さんから、「森さんは、とてもない大仕事をされたスーパーマンみたいに見えるか

も知れないけれど」と前置きして、当時半田さんの編集しておられた「家庭科教育」に森さんの原稿を掲載したところ、文部省の家庭科教科調査官に呼ばれ、「森さんという人は、指導主事会議で、誰一人考えもしていない男女共修を「できる」と手を挙げて主張する変な人だ。そういう人の原稿をのせるなんて」と叱られた。当時の森さんは、発言すれば座がしられ、無視される。そんな中で、運動を進めておられたので、皆さんと同じ立場だった、と語られる。少し、笑いが拵がり質問も始まる。

男子二単位を捻出するために、どの教科を削ったか、という問いに、「京都の高校は、生徒による自主選択制だから、個々には選択科目が減っていることになるだろうが、学校として、何かを削る、という形には、なっていない」という答。話題は、やはり家庭科で何かを変えて行こうとする時の困難さに集まる。身近には、校長や同僚の教師であるが、その背後のもっと大きな壁をひしひしと感じる。今回の改訂で、それが全て解消したとは到底思えない。文部省は、男女共修の家庭科で何をしようとしているのか。それを教育委員会や校長は、どう受け止めるのだろうか、その不安。また黙って降りて来るものを待っていればそれは我々の思いと全く異なっているものになってしまうだろう。

今度こそ、我々の目指す家庭科を間違いなく創らねばなら

ない。それは、一人ひとりが子供達の現状を、家庭とそれにつながる社会のあり方を見据えて、どうしても譲れない第一のテーマに対しては、敢然と主張して行くしかない。半田さんの励ましに、家庭科教育に対し、これまでの自分の姿勢や実践が次々と語られて行く。

定時制高校で出会う子供達は、これまで1という評価に痛めつけられて来た。家庭科が、「いのちとくらしをいとおしむ」人間を育てる教科なら、評価はつけられないのではないのか。という問題提起に対し、半田さんは、竹見智恵子さんたちのグループの「評価白書」を例にとつて、今日の学校の評価に対する強い疑問をこのように受けとめねばならないのかと思つた、と話され、1と同時に、オール5の子供がエリートとしてこの国のリーダーに納まる恐ろしさにも言及された。今後の重い課題として我々の心に残されたのであった。

森さんから交流会のあと、メッセージをいただいた。

「男女にひらかれた家庭科となった今、『We』に集う方達が核になって、上からのお達しでない、子どもの実態をふまえた現場からの中身づくりをしてほしい。常にマクロな視点とミクロな努力、高い教育理念と同時に毎日の細かい実践への努力の両方を忘れないで。忙しい現場での努力は大変なこと。これからの先生は本当に大変だと思うががんばって下さい」。

7、フォーラムを顧みる

盛りあがった全体会

桑 畑 美 沙 子

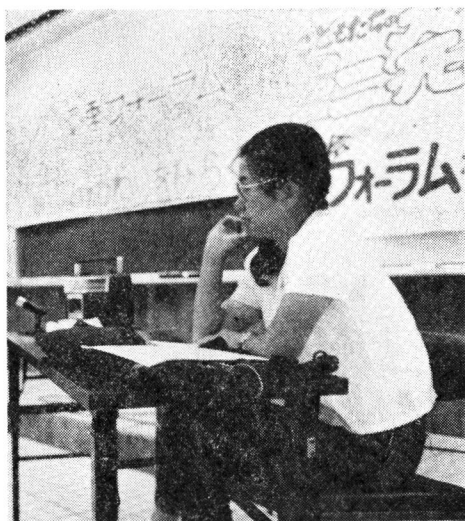
フォーラム最後の集まりは森本邦子さんの軽妙・軽快な司会で九時からスタート。

まず、一日目の交流会を四人の方が報告。最初に、「女や男、生活を語る部屋で」の様子が、黒板を使いながらソフトに優しく丹原さんから。つづいて、「指紋押捺を考える部屋で」の重い内容の話を、蔡さんが明るく報告。最後に、とどまるところを知らない川の流れの水のごとく、吉田さんが「どんなに変えよう家族と家庭の部屋で」から始まって深夜におよぶ話合いで、さまざまな家族や家庭の可能性や、結婚・

男と女の組合せとかのあり方が語られたと、報告。

二日目の分科会は四人の方が報告。最初に、中嶋さんが、「家族を超えた新しいネットワーク作り」を「ヌー」の大広間で子供達のけんかを仲裁しながら、「お互いに家庭を開放しよう。もっと、それぞれの家をみんなで利用したり、人にあるんことを頼んで、家庭のネットワークを開き、楽しく明るく生きようよ」と話し合ったと、報告。その話があまりに具体的なので、聞いている方は笑えばなし、おまけに、森本さんが「将来自分の私有財産になる福井の若狭の広い庭つきの大きい家をみんなの共有財産にすると、明治生まれの両親をも解放することになるのじゃないか……みんなも考えて」と付け加え、またもや、大笑い。しかし、笑いながらも新しいネットワーク作りにそれぞれ思いをはせた感じ。つぎに、子供のまま大人になったような加藤さんが、「がき大将無用論」を話し合うために少数精鋭者が集まったけど、集まった人がそれぞれ自分で勝手にがき大将の像を描いていたの

で最初はシラッターとしてたが、話し合っていくうちに教師はがき大將だなど意見が一致したと報告。続いて、沈着冷静な磯部さんが「家庭科の明日と今日を紡ぐ」には、「今度の教課審の方向ではいろいろ問題がある、その問題を知って欲しい、問題を解決していくために行動しよう、今や学校のなかにもまわりからの話を受け入れる下地ができ上がっている、家庭科教師に働きかけて欲しい、私達もガンバルから」と、みんなにまじめに熱い思いを込めてラブコール（「家庭科の



部屋で」の報告もかねて）。四番目に、錦さんが「教師はふつうの人間にもどれるか」で一九人集まったもののほとんどが教師で、悩んでる先生が多いのか、（教師に言ってもしょうがないと諦めている人が多いのか……どっちかな）と思いながら語り合ったが、話は空回りと報告。

二日目の夜の「この指とまれ式交流会」は、五つ設定され、それぞれの様子が世話人から報告。まず八島さんが、「ゆっくり楽しく生きようよ」というグループでは、吉田さんの「月十万円で生活する方法」が紹介され、みんなが年収を百万ずつ下げれば世のなか変わるんじゃないかなと考えたとか、「エスキモー商法」なるものがわかったと報告。つぎに、大場さんが、「かねてから憧れの存在である森先生から、京都の男女共学の経過を、そのあと、半田先生から、家庭科についての基本的な考え方をわかりやすく話してもらい、もったいないような時間が持てて感激」と報告。つづいて、ハスキーな声の川名さんの「こんな交流会をやりたい方は……とあったので、むらむらといたずら心がわきおこり、やらせたい方と変えて、《男の子育てを考える会》丹原さんにさりげなくしかもしっかりとろける法をならいましょう」としたところ、かんビール片手の人が集まり、テープが回ってないからいろんなことを話し合ったので、その全貌は明らかにできません」に、またまた大笑い。四番目に、司会の森本さ

んが児玉さんと語り合った様子と、Weの読者をふやすための
てだてを発表、そのあとごじらりようこさんが、いつの間に
か「今を楽しく生きる会」がロビーで始まったと述べて、す
べての報告がおしまい。

このあと、半田さんから、「家庭科の置かれている状況は
手放して喜んでいられるような、そんな楽観的なものではな
くて、上から降りてくるものは私達のぜんぜん期待しないも
のの可能性が大きい。だから、そんなものがくる前にこちら
がもっとやらなきゃいけないことのひとつとして、この会に集
まった人達の名で教課審や文部省に要望書を送ろう。そんな
要望書を各県なり、サークルなりでどんどん送れば私達の側
の願うものにしていけるのじゃないか。という話に家庭科の
分科会では一同大賛成。文案は実行委員会におまかせいた
くことで、どうでしょうか？」と提案。大きな拍手で了承。
さらに関連して、新聞に投書したり、新聞記者と仲良くなっ
て記事にとりあげてもらったりと、もっとマスメディアを利
用しよう、PTAや地域の親達の間で仲間を作り、その人達
にも助けてもらおう……などの提案もありました。

時は一時四二分。大人達の拍手に迎えられて、こども達
が入場。フォーラムの盛りあがりには貢献した人々への感謝の
歌で、楽しかった会は幕を閉じました。



要望書

フォーラム終了後、教育課程審議会に提出する要望書を検討するため、実行委員会を新たに開きました。次のような要望書を作成し、九月十日、文部省に手渡しました。

私たちは、人間らしくらしとは何かを学び、それを創り出す力を培う教科として家庭科に注目しています。そして「新しい家庭科——We?——」という雑誌を中心に、「男と女の自立」「人間らしくらし」「差別のない社会」を願い、教師を含む様々な立場の人たちが、新しい家庭科を築く運動に携わっています。

この夏には、全国の仲間が集い、「他者との豊かなかかわりをひらく」をテーマに、家庭科のあり方を考えるフォーラムを持ちました。そこでは、貴会が教育課程改訂の方向として、中学校技術・家庭、高等学校家庭科の男女共修を決定されたことを喜ばしく受けとめました。

しかし、男女で学ぶにふさわしい家庭科の内容をつくり、新しい家庭科を出発させるには、まだ多くの問題があります。

私たちフォーラム参加者一同は、子どもたちの生きている状況が日々悪くなる中で、男女がともに生きることが学ぶ家庭科が早急に実現できますよう、次の点を要望いたします。

一、小・中・高、一貫性を持ち、子どもたちの発達段階に合った家庭科を構想して下さい。その際に、現場教師の研究・実践の成果

や、市民の生活思想・方法なども反映させて、生活をいとおしみ、生きる力を育てるものとして下さい。

二、中学校では「技術」と「家庭」が一つの教科として取り扱われていますが、これらは、性格や教育目標を異にしています。家庭科を独自の目標・領域を持つ教科として、独立させることを望みます。

三、高等学校に新設した「生活一般」の選択部分に、「技術一般」「情報処理」「体育」の代替を認めていますが、教育目標の異なる他教科・科目で肩代わりをさせるのは理解できません。代替科目の記述を削除するか、やむを得ない場合は、条件と期間を限定して明記して下さい。

四、男女で学ぶ新しい家庭科が、望ましい形で実現できるよう国、地方自治体の教育行政機関に対して、教員の研修や定員確保、施設・設備の充実など条件整備に取り組むよう要望して下さい。また、すでに条件を整えている学校では七、八年先を待たず、できるだけ早く実施に踏み切るよう奨励して下さいを望みます。

一九八六年九月

教育課程審議会

会長 福井謙一殿

'86 We 夏季フォーラム参加者一同

水平・パートナー・シッパ

つかめたでしょうか

若 竹 キ ミ イ

「男と女の水平・パートナー・シッパ」という、村瀬さんの言い方が、なんだか気に入っていました。パートナー・シッパというだけで、人間関係としての水平感覚ニュアンス十分なのに、念押しするみたいに二つくっつけて使うと、心の中で反芻を強いられるような調子を帯びて、面白いのです。その前におく「男と女」を他におきかえてみても、パートナー・シッパの水平質を吟味せざるを得ないかの使用感です。準備会のいつ頃からか、この言い方をフォーラムの全体に、ああか、こうかとかぶせてみることで、私のフォーラム・プランニングは熟して行った気がしています。「親・教師の」」「子と親の」」「実行委員と応募参加者の」」「若いモンとオジンの」」「おりこうさんとわからん人の」。

一方、昨年のことですが、「このフォーラムは多様な参加者が条件のちがいを超えて寝食を共にし、テーマに寄せる共同体社会を現出させる、かりそめの三日間」というような話を内村章一郎さんがなさって、心に残っていました。それと

重ねて考えてみるのに、今年のテーマはまた素直にのっかりやすいものでもありました。学びの共同体に、かりそめの三日間、それぞれの私らしさをどう分かち合うのか。

小さい頃の遊びを思い出していました。北海道余市町よいちでのことですが、田んぼやりんご畑や草地を潤して子ども遊び相手でもあった小さな川です。土手で青緑の粘土をとり、指先程の流木片を拾って丸い粘土の錘りをつけます。それを水にボンと投げ入れると、白い流木片はまっすぐにつつ立った姿で流れはじめます。いくつも投げ入れては流れに沿ってどこまでもついて行きました。ただそれだけの遊びです。でも木片と粘土玉のバランスや土の練り具合、木片の乾き加減、その日の川の流れを読まないで、沈んだり錘りがとろけて木が横ざまに浮いたりして、楽しい遊びになりません。浮くでもなく沈むでもない白い棒たちが、めいめいの錘りを水面下に保ちつつピョコピョコと群れて、ゆるやかな洄りに入るところが楽しかったです。ぐるぐると並んでまわったり、しばらくは何か相談でもするように止まっていたりするのです。

大小の粘土玉は、私たちが抱えている日常。水面下のそれが実は何で、重いのかのわからないの……と問うも明かすも⑧とするもよしとして、集いのテーマである水にまっすぐに身を立て、ピョコピョコ浮き合っている私たちという絵なのでした。抱え通す日常は、介在する問題と共に継続性のもの



ですが、わざわざ三日を限り、一過性の非日常を了解事項として向き合ってみる「私」たちは、お互い100%わかり合えっこない関係に居直ることから、改めて鮮かに共有できるものを確かめ、それを力に日常へと甦って行くのだと思いました。豊かなかわりをひらくことをテーマとして集い、自ら学び、互いに学ぶことを通して共に学び合う他者同士として、ここでは子どもも大人も互角の仲間と言い切り、かわりも持って下さるよう呼びかけたことが、いくつかの違和感をかきたてた手応えがあります。共感の声にも触れました。どちらもその人の生き方を映す本音と受けとめています。本音に発するものであればこそ、また一年をかけてつきつめたい課題として行きましょう。解き明かす方向を何によつて見出して行くのかは、このフォーラムを通して、子ども活

動に身を挺したメンバーの声や、当の子ども達の心の深いところにしるされたにちがいない何かを読みとる力、またその周辺に思いを至す反芻にかかることじゃないでしょうか。

子ども活動への参加、担いを「小さくて立派な人たちとの出会い」と表現した若者がいました。子どもたちとのかかわりに、人間としての水平感覚を交歓できたからの言葉なのでしょう。

もうひとつ、学びのパートナー・シップに水平を確かめ切れなかったことがあります。村瀬さんや児玉さんとの関係です。村瀬さんは家族総動員で、私生活を基点とする水平パートナー・シップ模索へのたたき台役をひき受けて下さったのであり、児玉さんは職域（研究領域も含めて）での出会いから、人が人格ごとゆさぶり合うかわりに至る契機を成すもの、また経緯と対峙するとは等々、私たちを深く考えさせる体験を頒けて下さったのですが、それを互いの学びの資として共同学習を成立させるには、どうあったらよかったのでしょうか。

全体会での自分の省りは、やはり受け身だったナというものです。分科会を後段としてWeらしく、教える者と教えられる者、育てる者と育てられる者の関係は、かく解体されたとの報告に触れたら、とねがっています。こなれ切らない文ですみません。何卒、リピート！

子どもと過ごして

村 中 弘 美

子供達と遊んだ、というのはそれだけで充分おもしろかったけれど、“他者との豊かなかわりを開く”というテーマに興味を持って集まってきた大人達が、さてどのように子供達とかかわりを持っていくのだろうかという事が気がかりでした。講演中に邪魔になつて初めて子供の存在に気づく人から、時間を見つけては一緒に遊ぶ人まで様々な人がいました。こちらからも寝当番（子供と寝る人）をくじ引きで一般公募したり、一緒にバーベキューをしたりと、つとめてチャンスを作ったつもりなのですが、今ひとつカベがくずせなかったような気がします。

私達が中心になつて子供の分科会を受けもったため、ここに感想を書いているわけですが、皆、子供と一緒にだったのですから、“子供と過ごして”というタイトルで全員が何かしら書くことができるはずだと思います。

子供とかかわったことは私自身“あー、おもしろかった”と、プラスα得るもの、考えさせられた事もあつてとてもよかったです。来年もぜひ子供のプログラムに参加させていたきたいと思います。どうもありがとうございました。

金 子 博

Weの5月号「子ども―勝手な思い込み」のなかの「わんぱく夏まつり」がきっかけでフォーラムに参加してしまいました。「してしまいました」というのは、フォーラムがなんなのかよくわからないで誘いにのつたからです。

私の役目(?)は子どもたちと遊ぶことだったようですが、遊べた方かもしれない。実行委員の方が考えていたフォーラムの中での「子ども活動」の位置づけが、単に「保育」だとしたら私は門外の人間ではないかと思う。専門の教育を受けたわけでもなく、「保育」についての関心もなかった。だから私のかかわり方は「わんぱく夏まつり」のそれと同じで、「子ども」に対しての接し方も本気になつてしまふ。例えば、よくないイタズラに対しては真剣になつて怒ることです。「子どもだから」という言葉で曖昧にしておくことができないのは、「子ども」を「人」として「私」と対等の立場で付き合っていたいからです。

話が横道にそれるが、Weに関わりついでにお願いしたいのは、環境教育が実践できるのはこれからの「家庭科」だと確信しているの、フォーラムでもテーマを設けてほしい。最後に、蔡さんがんばって下さい！



荒井 真木

「きょうは、とても あついで ジュースを あげる」という文章を、文節ごとに色テープで区別して、言葉のパズルを作りました。題して、そのものずばり、「パズル」のコーナーです。できても、できなくても、ジュースをコップに一杯ずつあげて、ついでにケバケバしい色をした、とてもポップコーンとは思えない代物のポップコーンも食べさせてあげて、という、子ども大喜び(?)のコーナーを担当しました。どの子どもも、みんな一生懸命に、パズルを解いて、ジュースを飲んで、ポップコーンをつまんでいましたが、なかには、できなくて怒り出す子がいたり、最初は遠慮しながら、つまんでいたポップコーンを、慣れてくると、たくさんつまんで食べていたり、いろんな子どもがいました。

たった二日間でしたけれど、いろんな子どもと接することができて、とても楽しかったです。一緒に遊んであげるのではなくて、一緒に遊ぶという気持で、子どもと関わっていきたいと思っていますけれど、それも今回、なかなかうまくいったように思います。また、こういう機会があれば、ぜひ関わりたいです。

各地の読者会から

姫 野 順 子

野外での楽しい早い者勝ち風、アイデア満点昼食の後、各地の読者会からの報告です。

山形から大場さん、大阪から岩瀬さん、兵庫の入江さん、岐阜の杉本さんと遠い所から。

みなさん頑張っています。Weの会で話したい、仲間と考え合いたいと、県内各地から思いを同じにする人たちが集まり、エネルギーを充電しあう。いいですね。

神奈川は四つの読者会をまとめて植垣さんから。埼玉は川崎さん、武蔵野は小林さん、江東からは間瀬さん、城北の川名さん。「城北の会」と何気なく名付けたけれど、皇居に対しての北という意味だから、今少し考えています、という発言。生活の中で見過ごしているものにハッとさせられました。

一昨年のフォーラムをきっかけに「大阪の会」ができたそうです。「田無の会」も昨年のフォーラムでつくりたいとよびかけました。今年の一月からスタートしましたが、まだまだ手探り。各地のみなさんの話を聞いていて、圧倒される思



いでした。Weの読者以外の人にも参加してもらいたいのですが、なかなか拡がらない。気長にやっていきましょう。

千葉の森本さん、「文化果つる国の感がある千葉にも、Weの読者会をつくりたくなってきました」とアピール。来年のフォーラムではぜひ、森本節で報告を聞きたいですね。

一年に一回、フォーラムであえるのは楽しいけど、時々Weの仲間と話したり、新しい仲間と出会える場、たくさんあるといいですね。どんどん読者会をつくりましょう。

最後におわびがあるのです。全員で言おうと思っていたのに、司会が忘れてごめんなさい。

おいしい昼食を楽しんでつくってくれたこどもたち、若者たち、

ありがとう!! ごちそうさま!!

フォーラムの余韻の中から

夏の去るのを惜しむかのような

夏季フォーラムの思い出をつづるお便り

来年の企画に生かすためにも

参加できなかった方へのメッセージとして

——ここに——

◆ウイの合しゆくは、とてもたのしかったです。とくに、ベッドは一ばん上へねられたし友だちもできました。

子どものへやであそんでいたら、男の子たちがなぐりにくるっていうから、ふとんの下にかくれたら、だれかがあたまをふんだからなぐられるのとおなじだなあと思った。それからカーテンをしめて、男がカーテンのあつちがわにいるまに子どものへやを出て、それで、そとで夕がたまであそびました。そして夕ごはんを食べて、れいちゃんと、おねえちゃんとおふろへ行ったたら人が大^{マブ}かったから

すくなくなるまでまいました。そしてすくなくなつたからおふろへ入って、およいだりしました。そしておふろから出てふくをきようとしたら、ちゃんこがきたのでまたおふろに入ってしりとりをしました。そしてちつくんたちは、さいしよに入ったときからだをあらっちゃったから しりとりがおわたらずぐ出てふくをきました。そしてれいちゃんが水をもつてきたので三人でのみました。そして、ちゃんこがあがつてきてまだいたのつとびくりました。そしてちゃんこたちとあそんではをみがいてねました。それからかきわすれたけどれいちゃんは、男子のおふろに5かいも入ったこともおもしろかったし、青とか赤とか黄いろとか白とか色を6しゆるいあつめるのがたのしかった。らい年も行きたいです。

(東京・加藤ちひろ 7歳)

◆ウイの合宿は、とてもおもしろかったです。二目のお屋に、みんなでお昼ごはんを作ったことは、とてもたのしかったです。どこがというとべつに、とくべつってこともないんだけど、全たいできに、作ったやきそばがおいしかったからです。そのあとのゲームが合宿で、とってもとてもおもしろかったです。わたしはちつくんマンとれいちゃんと、青、赤、白、黄、オレンジ、黄緑のじゅんであつめました。またしたいなあ。夜には、ちつくんマンとれいちゃんとおふろに入ろうとしたら人がいっぱいだったので、おふろはあとにして、セنتーの中をたんけんしました。そしてまた見たら、もうほとんど人がいなかったの、早く行こうと思ったのか、男のほうに入ってしまったておかしいな? と思って気がついてわらってしまいました。おふろには人がいなかったの、早くあらって、およいで、遊んだので、とてもおもしろかったです。そのほかに、富士山が見えたりして、とてもおもしろかったです。また来年も行きたいです。ありがとうございました。

(東京・加藤みちる 9歳)

◆十一日午前六時、同室の方の目をさまさぬよう足音を忍ばせ、前日からフロントを拝み倒して呼んでもらったタクシーで着いた富士吉田駅。視野いっぱい、頂上から裾野までくっきりと鮮やかな真夏の富士山に、思わず声をあげそうになりました。

東側は朝日に染まったオレンジ色、影の部分は濃い藍色、まざまざと、息づかいまで聞こえそうな、まちな山影は、朝の光が眩しくなるにつれ、少しずつ光と影の部分が滲んでいくようでした。

バスの車窓に、樹林の間から姿を現す富士には、輝く白い雲が水玉模様のように、ポツリポツリと増え続け、一時間後、御殿場に着く頃には、渦巻く白い雲が、富士を二つに分断し、頂上だけが浮かんでいました。その頂上も三島に着くまでにはほとんど雲の中、二日間の見なれた景色に埋没してしまいました。

研修センターの皆さんは、どのあたりの山を……心を残しながら、早く帰ってしまったフォーラムは、あの富士のような鮮やかさで私の記憶に残っています。

さようなら 皆さん ありがとうございました。おしまいでいられなくて ごめんな

さい。

(京都・村岡洋子)

◆第一回目以来の、いわば初参加の私でしたが、複雑な感銘・感動を得て帰青いたしました。さまざまな関心・期待をもって集まって



くる人々をつなぐことのむずかしさを、特に感じました。うまくいってあたりまえ、すこしのキズが参加者個々の印象をおおってしまうことのつらさ、実行委員の皆さん、ウイ書房の皆さんの精神的疲労はいかばかりかと思いました。

しかし、他の回のフォーラムはわかりませんが、今回によりもよかったと思ったのは各地から、明日の家庭科をどうしようという切実な関心をもって集まってこられた若い新しい人たちの多くあったことでした。

「新しい家庭科」という看板をはずすべきかどうかという議論があるようですが、私はそこにWeのヘソの緒があると考えるだけに、それをおろすことによって、ヘソのない中途半端な組織になってしまうよりは、頑固に「新しい家庭科」という看板はおろさない方がよいと考えていました。それだけに、今回の新しい参加者、それを得て規模が大きくなったためにおきたさまざまな不都合は、やむをえないことと考えます。

教師がふえ、教師くさいフォーラムになったとの声、教師以外のものをふくめたWe独自の存在価値のうすまるのを残念がる声は、それぞれにもっともだとは思いますが、私はや

はり、きわめて「教師くさい」動機と他から映るかもしれない若い家庭科教師の内発的な思いにもとづく参加こそ、実はWeの拠って立つ最も信頼できる岩盤であろうと思います。

そうした人々が、教師以外の人たち、教育の領域外の問題意識に触発されて、自らの限界を打ち破りつつ、しかし拠って立つ岩盤からは頑固に離れない、そうしたあり方が、ほんとうの力になるだろうと私は思います。

私は、いわばそういう生き方を棄てた者だけに、そうした生き方に固執しつつ、自らを解き放っていく人々に対する尊敬・敬愛の気持ちはかえって強いのです。どうか、そういう点から、元気のよい総括(?)をぜひしていただきたいものだと思います。

(青梅・武田秀夫)

◆反省会には出席できませんでしたので、思いつくまま、いくつか書いてみます。

一、自分の責任が果たせなかった反省

交流会の司会もそうですが、一日目夜の子供係の仕事もできませんでした。子供の数が多い上に、係が手薄で申しわけなかったと思っています。

二、子供たちとのかわり

子供にとって、夜の子供部屋も、お昼作りも、わんぱくの遊びも楽しかったようです。帰ってから、姉嬢がいろいろ話すので、弟がとてもうらやましがっていました。

私は、自分の子以外とはかわりがもてなかったように思います。ヌーに宿泊していたのですが、食事も大人と子供でわかれたり、意識して中に入らないと、かわりは持てないのだなあと思いました。

三、家庭科の分科会に関して

森さん、入江さん、桑畑さんなどの経験豊かな話や、各地の実態も知ることができたのでよかったのですが、教師でない人の参加がやはり少なかったです。

新しい家庭科を市民の立場から創り上げていこうというWeの主旨を生かすには、どのような形がいいのでしょうか。まじめにまじめにやっているのに、まじめすぎる? という意見もあったようですが、家庭科の問題って重いから、まじめにならざるを得ない。授業は楽しくやりたいけど。

他の分科会に出たいという思いは大いにあるのですが、Weでもっともと話していきたいのが、家庭科でもあります。

(埼玉・磯部幸江)

◆私としては、細かい点で種々の〈要改良点〉はあったものの、全体としては大変に満足でした。実行委員の方々が、事前に周到な準備をととのえて下さって、会場が変更するなど

の危機も乗り越えて、あれだけの活気ある集まりを組織して下さったことに対して、まず心からお礼を申し上げたかったと思います。なぜかそこをそばして、すぐに不満を指摘し、不満を並べる方向に行ってしまったのは皆、限られた時間の中で、来年はよりよくと焦ったからだだったでしょうが、実行委の方々の気持ちを考えて、本当に申しわけなかったと悔やまれます。くれじれも、実行委に「ありがとう」をのべたあとで、以下の点を私の反省として挙げさせていただきます。

一、村瀬さんのお話は、本を読んだ通りで、私には新鮮味はありませんでしたが、8ミリの映画はよかったし、村瀬さんご一家をじかに拝見するというミラーハリーの興味も満たされて、まずまずでした。

ぶどうや枝豆をつまみながらお話をきく、というのも、フォーラムの導入としてよい雰囲気だったと思います。それに、村瀬さんに初めて接する人も多かったようですから、その方々の感想も聞いてみたいと思います。

二、子どもの部屋を担当して下さった方々の不満を最後に聞いて、やはりほとんどお任せになってしまった申し訳なさでいっぱいです。うかつな親でした。

いつもはべったりと甘えん坊の子が、親から離れて、お兄さんお姉さんとお友達と楽しく過ごし「暗夜行路」など、到底意味不明のことばをも、その後も繰り返し口にしては、思い出を反すうしているさまに、私は満足しきっていましたが、それが担当者犠牲の中に成り立っていたのでは……。

(1) 第一回の芋煮会のように、全員参加のプログラムを設ける。

(2) 子どもの部屋は、共同保育形式にし、大人の参加者は、必ず一度は訪れて、子どもと共にすごす時間をもつ。

(3) 家庭科の先生方が、今夏は燃えに燃えていたのは当然で、私たち「非先生」もその話の輪に加わっていけばよかったのですが……。

双方から「自分たち以外の世界」を求める姿勢があつてこそ、真の交流が生まれるのでしょうか。

(4) 分科会・交流会の参加にもっと流動性をもたせ、しかも誰がどこにいるかを一目瞭



然に表示する方法として、マグネットの利用はいかがでしょうか。

その他、伝言板も設けたらどうでしょう。(5) ヌーの食事は、最初の晩、鉄板焼きで、飲み物もなく、がっかりでしたが、その後尻あがりによくなつて、最後には食いの恨みはすっかり消えたどころか、大喜び

でした。他の人々も、Weのフォーラムは、いつも食事がいいとほめていました。

(6) 若い人の参加が多かったのは、子どもの部屋を設けた余録かと思いますが、大変うれしいことです。せっかくの機会だから、彼らの声をもっとも聞き取った。その意味でも、若い人たちが子ども専従のようになってしまったのは申しわけなく、残念なことでした。来年は、老(?)若のパートナーシップも確立しよう!!

(東京・川名はつ子)

◆夏季フォーラムへの参加も今年で三回目。参加するたびに新しい発見があり、回を重ねる毎にフォーラムそのものの質も変わってきたような気がしている。

また、今回は、三歳の息子慧太と二人で参加したこともあって、ふだんは見えないWeの会の良さが見えたように思う。慧太は、全体会の司会をやっている時も、夜の分科会でも、私にひつついたままほとんど離れようとしなかったが、子どもの望むままにさせている私に、「甘やかしだ」と、とがめる声どころか、冷たい視線さえ感じるものがなかった。おかげで人一倍照れ屋でかかん気の慧太

も、父親の私も気がねなくのびのびさせてもらい、はかrazuも、Weの会の器の大きさを身をもって感じた次第。

理想を理念としてとねえるのではなく、現在進行形として実現していこうとする姿勢は、会の運営そのものにもあらわれていた。

合宿終了後の反省会では、「誰々を囲む会」という分科会のもち方に疑問が出され、そうした形は対等の関係ではなく、与える者対学ぶ者という関係になってしまおうという指摘があったが、これは会全体の雰囲気を表する意見だと思う。

一方通行の伝達でも、すでにできあがった知識の獲得でもなく、あくまで相互の関係の中で、お互いに新しいものを求め、発見していく。だから、アジテーターとしての講師には不満の声が出たのだろう。Weの会は一定のところにどまることなく、個人と全体がからみあいながら、理念をあらゆる現実の中で具現しようとしている。まだまだ変わり続けるフォーラムに非硬直的な新しい組織のあり様を見た思いであつた。

(東京・平井雷太)

◆一、会場：自然環境は大変よいと思いまし

たが、交通の便が悪くて大変でした。

二、子どもと大人の関係：大人は話し合いに時間をかけるため、子どもと交流することは、具体的にはできなかったと思います。二日目の野外での食事は、参加者と子どもたちが、その場で作りながら食べるのかと思っていました。ですが、でき上がったものを皿にもらう形だったので、子どもとの交流の場にはならなかったと思います。講演の時、西内虎三君がそばにいたので、とっても楽しかったです。後からWeの会の便りに、虎三君の感想が来たので、親しみがさらに湧いてきました。また、村瀬さんの不思議君が、ネコにおかずの魚をあげていたのを見て、子どもっておもしろいと思いました。

三、今年のフォーラムでよかったことは、児玉さんの話が聞け、話ができなこと。自分の生徒に対しての接し方を振り返り、学ぶことが多かった。また、児玉さん御自身が苦しんで開けた道ということは、真正面から悩むことの意味を知らされた。

(静岡・加藤千恵子)

◆子ども参加の会ということでは「保育の用意があります」とは違って、期待することが多く

今年は参加者も多くて一段といきいきしていたようですが、これ以上増えた場合、交流会が今までのような形で持てるのだろうか。今年の会場は二つに分かれていて、自然の中で思う存分という感じですが、今後の会場探しにも影響すると思います。名案はないのですが……。

フォーラムの企画準備は、ほんとにその辺にあるものからのマネごとではなく、新しく他にはないWeらしさを創り出していくのだからすばらしいと思います。集まる方もいろいろな方。その人たちの話し合いがしみ合うまで時間がかります。交流会でも、きめられた時間ではほんとに入口。そして、夜おそくまで、そして分科会へと深められていきます。しかし、私を感じたのは、話し合いたい興につけて、夜おそくまで語られたことは、今度の家庭科の部屋の収穫でした。時間をきめないで語れる場の確保も、Weフォーラムにとっては、重要だと思います。

(兵庫・入江一恵)



《表紙のことは—加藤由美子》

夏号の銀河鉄道(!?)覚えて下さってますか。そう、あの連結器のきしみ音も高い……。まだ走ってるんですよ。夏にはフォーラムの人達を乗せて。相変わらずのきしみ音ですが、乗っている人達の声が負けずににぎやかでしょう。

★Webバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉 〈vol.2〉 〈品切れ〉

〈vol.3〉 4月号 PTAって何

6月号 地域に生きる

7月号 少年・少女たち

8・9月号 “遊ぶ”ということ

11月号 “病む”ということ

84年増 自分らしさをこそ

1月号 学び・教えるとは

2・3月号 “育てる”ということ

〈vol.4〉 4月号 性をどう語る

5月号 結婚の風景

6月号 家族、その人間関係

7月号 離婚と子どもたち

8・9月号 法津と私たち

85年夏増 働き続けるために

10月号 いま、熱く女の時代

11月号 みのりの秋に

12月号 人間と土を生かす

85年冬増 自分らしさをこそⅡ

1月号 暮らしの文化を探る

2・3月号 水はいのちの泉

〈vol.5〉 4月号 幼い日—大人は忘れてしまった

5月号 子ども—大人の勝手な思い込み

6月号 “いじめ”—その根っこには何が?

7月号 性—小・中・高校生は何を思う?

86年夏増 こどもたちへ—大人になる旅

8・9月号 親—いま、学校に何ができる?

10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ

11月号 家庭科—どう変える、どう変わる

12月号 平和—今年を顧みる

ございました。

(青木)

だろう、あの子に。(中野)

よう。

(馬場)

いのです。

(半田)

◆今回のフォーラム、野外

◆記憶のメカニズムなんて

◆今回の増刊号は10月号で

♥富士が美しく眺望できる所

での昼食がとてもさわやかでした。子どもと大人がいっしょに作って楽しんだ、フォーラムでは初めてのプログラムで好評でしたが、こういう楽しい企画は、事前の準備がとてみたいへん。パワフルで経験豊かなわんぱく村の方たちが走り回ってくださったおかげで、スムーズにはこびました。気持ちよく引き受けて下さった方々、ありがとうございます。

◆記憶のメカニズムなんて分らないのですが、校正をしながらいふ浮かぶシーンが、あまりに鮮やかで驚いています。林の中で昼食を作っていた時、ちよびりいたずらの度が過ぎて、その子は係のお兄さんから多分初体験のおしおきを受けました。遠くから見ていた私には、声が聞こえないだけに、二人のつながりが見えたようで感動しました。どんな記憶が残ったのだろう、あの子に。(中野) 増刊した分、少なくなってしまいました。参加者の生き生きした姿を写真で思ったのですが、今回は減らさざるをえませんでした。残念。村瀬さんがご自分の畑から持ってきた枝豆を早速ゆでて休憩の時に食べたり、山梨の人たちからのさし入れのブドウを食べたり、一人一人の心遣いが作りあげていったフォーラム。来年は山形で会いましょう。(馬場)

♥富士が美しく眺望できる所に案内してくれた、地元のチーちゃん。身も心もリラックスできる手がかりをおみやげにしてもえたらと、ダンスと音楽を選んでくれた藤武さん。早朝の行事のすがすがしさ。私はこういう方たちで心安まるのです。夜ふけまでの議論、気を許しあう者同士、のダベリングよりも。フォーラムを心豊かなものにするためのミニ行事にこめた大きな配慮、それも味わってほしいのです。(半田)

新しい家庭科—

Vol. 5 No. 10 1986年12月20日発行
¥700 (年間購読料・増刊号含 ¥6700)
編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

家庭科を教えるあなたのために
家庭科を教えたいあなたのために
家庭科に関心を持つあなたのために
いま、世に問う We 5年間の歴史
珠玉の実践、小中高30編余り
新しい家庭科の創造を、この一冊で

待望の1冊
'87年3月刊!

半田たつ子編

家庭科新時代

— We からの提案 —

●A5判 360頁 予価 2000円

教育課程が変わります

中学・高校でも男女共に家庭科を学ぶ新時代

完全実施は 小学校 '92年から

中学校 '93年から

高等学校 '94年から

私たちの願う家庭科を、私たちの手で創る、それこそWeの願い

〈好評既刊〉

男女で学ぶ新しい家庭科

— 京都における歩みと実践

森 幸枝 著

若いいのちの像

— 私のカウンセリング入門

児玉澄子 著

ともに

●B6判/224頁

●定価 1300円

〒250円

6年目('87年度)のWeのテーマは

4月号 先生は悩んでいる

5月号 情報化社会の光と影

6月号 学校給食で論争しよう

7月号 「制服」着る、着せられる

8・9月号 「原発」知らなくていいのか

10月号 機会均等法、何が変わった?

11月号 「家族」どう変わる、どう変える

12月号 国際居住年って、何だった?

1月号 "We"のルネッサンス

2・3月号 新教育課程と家庭科・生活科

夏増刊号 臨教審・教課審と女性民教審

冬増刊号 '87 We 夏季フォーラムの記録

A5判・例月号(96頁)年10回・増刊号(112頁)年2回発行・年間購読料 6,700円
(530円) (700円)

編集兼発行人・半田たつ子 発行所・ウイ書房 〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14

・Tel. 03-326-1380 振替・東京6-59867 銀行・第一勧業銀行 調布仙川店1075292